乾山江戸篇

九、乾山
江戸篇 ―その遺産―

はじめに
Ⅰ　江戸の乾山
一、公寛法親王と乾山
二、入谷村と乾山
三、今戸焼と入谷窯
Ⅱ　乾山焼と陶法書
一、初代乾山系陶法書
二、二代乾山猪八系陶法書
三、その他の陶法書
（一）乾山名のある陶法書
（二）乾山名のない陶法書
（三）専門陶工による陶法書・その他
むすび
Ⅲ　陶法書の調査と新資料
Ⅳ　附録：乾山自筆陶法書
『陶工必用』大概
おわりに

はじめに

ものとの別れ、人との別れ、生きるものには必ず別れがやってくる。ひたすら歩み、真を知る。何ら特別なことではないであろう。唯、当たり前に生きることではないか。

一仕事を為し終えたとする達成感、次代を養子猪八に任せたという安堵感、兄藤三郎、光琳も赴いており、新都「江戸」への興味と期待。乾山は都人の誇りを胸に上野山麓入谷村へと旅立った。江戸下向には動機があろう。推測ながら直接には上野寛永寺門主・輪王寺宮公寛法親王との邂逅、間接的には時代の波、吉宗による殖産事業の拡張と教育奨励、折からの光琳人気の高まりなどが背を押したと考える。禅に鍛えられた老陶匠の胸裡には小さな燈火が灯りつづけた。悔いなくその命を尽くすこと、入谷村は半農半陶、瓦・焙烙を焼く窯場であった。鳴滝山、聖護院の森との違いは如何であったか。

土を捏ね、形を造り、炎と闘う、何らそこに違いはなかろう。村に馴染み、新たな友と交わり、いきいきとやきもの造りに精を出した乾山の姿が浮かび上がる。

Ⅰ　江戸の乾山

一、公寛法親王と乾山

一、なけゝ世は卯月のかけの雲隠　（嘆け世は卯月のかげの雲隠）
むかしを忍ぶやまほとゝきす　（昔を忍ぶ山ほととぎす）
あちきなし花橘の香は消て　（あぢきなき花橘の香は消て）
みきりの草そあめにしほるゝ　（時節の草ぞ雨に萎るる）
たゝしはし休ふ旅の中やとり　（ただ暫し休ふ旅の中宿り）
ふくと吹なりせきのあさ風　（ふくと吹くなりせきの朝風）

（薗田秀延詠・六字名号連歌百韻初折）

二、袖の露はまたかハかぬにうきぎはをミとせの春のけふにむかへて
（袖の露はまだ乾かぬに憂きぎはを三年の春の今日に迎えて）
うつゝとも夢ともわかすあたにのミきえなて露の身は残りけり
（うつつとも夢ともわかず徒にのみ消えなで露の身は残りけり）
ほからかにひらくる花のうてなより瑠璃のひかりや空にみつらん
（ほがらかに開くる花のうてなより瑠璃の光や空にみつらん）
うけつきし法のともし火かけたかくあきらけき世をなをや照らさん
（うけつぎし法の灯火かげたかくあきらけき世をなおや照らさん）
いくちとせ榮へんものか梅かほりたちはな匂ふ玉のみはしは
（幾千歳栄えんものか梅かほり橘匂ふ玉のみはしば）
むさし野の草葉おしなミ野へふすもたへぬ御法の花の春風
（武蔵野の草葉おしなみ野へふすもたへぬ御法の花の春風）

（尾形深省乾山詠・崇保院宮追善和歌懐紙一幅）

一、連歌六句は、正徳六年（一七一六）四月一七日、上野寛永寺第五代門主輪王寺宮（三世）公辨法親王（一六六九―一七一六）の薨去に際し（在位二七年）、同家坊官従四位備前守薗田秀延が、同宮を偲び、詠じた追善供養の連歌百韻初折の六句である。折句として頭に六字名号「なむあみたふ」をおき、法号大明院宮准三后（准后）公辨法親王の霊前へ限りのない悲しみを捧げるが、宮を悼む秀延の想いは遺稿集『手むけ山』に留められた。

二、和歌六首は、元禄の陶工尾形深省乾山（一六六三―一七四三）が、公辨法親王の名跡を継ぎ第六代門主となった公寛法親王（一六九七―一七三八）の三回忌に（在位二三年）、法親王を偲び献じた追善の和歌である。この三年、現とも夢ともわからず年を重ねた我身をふり返り、「そうほういむ」の法号を頭におき亡き宮を想う。

同和歌書は乾山遺品として入谷村乾山焼二代目次郎兵衛が所持。次郎兵衛孫・坂本村百姓彦右衛門から酒井抱一へと渡るが（鈴木半茶）、一方次郎兵衛筆記「初代口述二代筆記」は三代宮崎富之助へと譲られ、富之助妻はるからこれも抱一が入手、併せてそれらは文政七年（一八二四）西村貌庵へと譲渡された。貌庵は天保七年「乾山世代書」を認め、名前譲り状とともに三浦乾也へと伝えるが、種々の曲折を経て大正期池田成彬の所蔵となり、今日、同和歌（懐紙一幅）は奈良市大和文華館に保管されている。

初代口述二代筆記陶法書は関東大震災によって消失（推定）。行方知れずとなっている。が、このたび筆者らはその写本を東京都中央図書館加賀文庫に見つけ出した（口絵）。

乾山、江戸篇では次の三つの事項を基に考えた。

一、江戸下向に伴う関与を推定：公寛法親王と周囲の人々

二、入谷村における作陶を考慮：江戸入谷村と入谷窯

三、光琳二世を名のり絵画も描く：席画・席焼と周囲の人々

はじめに乾山所縁の公寛法親王の足跡を尋ねたが、先立って法名「公寛」を与えた寛永寺五代門主・輪王寺宮公辨法親王の事蹟を問うてみたい。

（一）寛永寺五代門主・輪王寺宮公辨法親王

門跡寺院は、平安以来の伝統がある。

天皇は「御門」、その出家を「御門の跡」と称したが、仁和寺門主を始まりとして、天皇家の皇子・兄弟が門主となる宮門跡、摂関家の子弟による摂家門跡、皇族出身者・公家らによる准門跡などがあり、天台宗・真言宗・法相宗に限られていた。江戸期になり浄土宗を宗旨とした徳川家の所縁によって知恩院宮門跡（華頂御殿）、天海の希もあり、天皇家皇子を門主とした輪王寺宮門跡が創設。格式は門主の出自に順うが、「禁中並公家諸法度」（慶長二〇年・一六一五）には規定があり、宮門跡でも青蓮院・妙法院・梶井宮など、親王の位階を表す極位は二品であり、最高位一品は輪王寺宮門跡、宮は天台座主に補されることが決まりであった。

公辨法親王は後西天皇の第六皇子、母は梅小路定子（六条局）、幼称貴宮、字脩礼、秀憲、玄堂を号とした。延宝二年（一六七四）、寛永寺二代公海（一六〇八―九五）の法嗣となり山科毘沙門堂に入室、同六年得度するが、天和二年（一六八二）同堂門主を経て、元禄三年（一六九〇）輪王寺宮二代（初代は守澄法親王・一六三四―八〇）天真法親王（一六六四―九〇）の遺命に従い上野寛永寺五代門主の名跡を継ぐ。

その折、既述の連歌を捧げた薗田秀延（秀英・一六七六―一七四八）は一五歳。以来二六年の歳月を公辨法親王に近仕するが、法親王から深い信頼を寄せられていた。生国（父）は上野国吉澤と伝承、父秀房も輪王寺宮天真法親王に仕えた家司であったが、秀延は公辨亡きのち短期ではあるが次代公寛法親王にも仕え、享保元年（一七一六）四一歳を以って辞職。翌二年父の死を契機として玉川へ退隠、寛延元年（一七四八）その生涯を終える。

公辨法親王は、寛永寺中興の祖とされる。

三山管領として宗教界の頂点に立ち、宗内寺院の創設にも尽力するが、「公」とは私心なく正しい・公の義、「辨」は弁える・明らかにする・ただすなどの意である。元禄三年、寛永寺に入山。同六年（一六九三）及び宝永四年（一七〇七）の二度に渉り天台座主を勤めるが（元禄六年には一品宣下、宝永四年には准三后）、正徳五年（一七一五）病を以って新宮公寛法親王に職務を譲る。『輪王寺宮年譜』には「御上京御供覚樹院御附竹中主膳御医師芥川元泰正徳六年三月御上京御供御附之名前留無之」とあり、公辨は翌六年三月二四日体調の勝れぬなかを上洛、四月五日山科毘沙門堂に到着し、僅かその一〇日余りを経た四月一七日四八歳の生涯を閉じる。公寛法親王は嘆く坊官薗田秀延を即刻山科毘沙門堂へと送り出すが、公辨への深い思いを綴ったその道中記が遺稿集『手むけ山』（玉

川子園田君遺稿）である。

公辨には五代将軍綱吉との交流が知られている。

公辨時代、寛永寺は寺領・寺域を拡張、伽藍・堂・門などの増築もあり、露座であった大仏殿を建立、学問所の整備・勧学寮の再興を図るなどの功績が残る。隠居領も受理、綱吉の御成もあり、霊廟参詣、年回法要、元禄一一年（一六九八）九月三日には盛大に綱吉寄進の瑠璃殿（根本中堂）の落慶供養が行われた。同月六日には霊元院宸筆「瑠璃殿」の勅額も届くが、不運にも同日、新橋より発した火は下谷・上野山内へと廻り、瑠璃殿は免れたが、寛永寺本坊・巌有院霊廟（家綱）・子院一三坊を焼失した。一一年をかけて復興するが、江戸の疾風は秋から冬烈しさを増し、街は乾燥、しばしば火災が起きている。

宝永六年（一七〇九）正月一〇日綱吉が生涯を閉じる。公辨は、厄月でもあり祈祷のために日光に滞在していた。が、急ぎ帰山。儀式・法要の任に当たるが、綱吉との交流は宮の涙となって表れた。東山天皇の勅使が来山、綱吉は「正一位・太政大臣・常憲院」の官位・院名を下賜されたが、これらの事情は公辨に従い終止当儀式・法要に参列した秀延の遺稿集『いるさ山』に書き留められた（『玉川子園田君遺稿』）。

公辨には著述が多い。『延暦寺条例』『武州東叡山新建瑠璃殿記』『台宗二百題』などが現存するが、漢詩を好み、しばしば坊官らとともに詩会を開催。正徳元年には日光の美景を選し八景詩を賦すなど、翌年『日光山八景詩集』（一巻）が刊行された。冒頭には、

新刻日光八景引　日光山八景詩者吾　一品大王之所新設　而與陪従之輩同賦者也且頼遇朝鮮國聘使在干江城　命需夫詩合爲一冊集　就而傳寫之者多　臣恐其有魯魚之謬因請録諸梓云

正徳壬辰春三月　中大夫長州刺史源好古　謹識　四方白印・朱印

朝倉景暉詩序には「天地之間雄地佳境不爲不多（略）」

正徳改元辛卯炁九月既望朝倉景暉拜書

とある。詩序は陪従之輩矢田陪好古（矢田陪長門守好古）、朝倉景暉（孫六）、詩賦は「一品大王奉」（公辨法親王・玄堂）を筆頭に、大西法印元龍（子淵）・矢田陪長門守好古・園田備前守秀英（秀延）・水野子碩（敬雲・慶雲）、医師芥川時亨（元泰）ら坊官・諸大夫・医師らのほか、朝鮮国聘使による序文・八景詩もあり、好古詩序によれば、伝写する者も多く謬伝を恐れ、板行に至った経緯などが分明する。

公辨は伊藤仁斎・東涯を重用した。交流は古義堂文庫の記録に残るが、

「輪王寺宮公辨親王御筆靈山圖」（元禄一四年下賜）

「武州東叡山新建瑠璃殿暉」（宝永庚寅・七年賜、瑠璃殿は綱吉創建の根本中堂）

「次韻伊藤原蔵見寄」（七絶）

などとあり、輪王寺宮家坊官らに関しては、東涯筆『先游伝』に芥川貶敏（時亨・元泰父）・水野慶雲・朝倉如圭らの名がみられ（乾山関係では緒方元眞・緒方維文・那波祐英・三好安宅など）、書簡には芥川元泰・矢田陪長門守・進藤主税・原芸庵らの消息が伝えられる。公辨及びそれを取り巻く坊官・諸大夫、その学問、志、精神のあり方などを垣間見るが、仁斎は「仁を外にして所謂学問といふものなし」とし、仁は「言を以って盡し、口を以って悉すことのできない」ものであった。「よく人を愛すれば人亦我を愛す」ことを教えとした。

天和三年（一六八三）、仁斎日記「家乗」には「尾片権平」（乾山）の名

がある。乾山も正月二日の新年、五月五日の端午の挨拶に古義堂を訪れるが、仁斎の先妻嘉那（一六四六―七八）は乾山父宗謙の兄、備中浅野家半井家流医官緒方元庵の娘であった。母妙千院は旗本井上氏の出自、江戸に生まれ、嘉那は東涯・具壽・清の三子を残して延宝六年（一六七八）に没してしまう。乾山はそれより以前同四年、母「かつ」を失っていた。嘉那との面談は叶わなかったが、心中何処かに嘉那を懐かしみ、仁斎の学問に惹かれていたのかもわからない。文人となったその後の選択に答は潜むが、坐して自ら慮る道を進む。東涯は享保一六年、公寛法親王の在洛記録「准三后宣下勅書」を書写している。輪王寺宮と家司、学習塾と文人乾山、心底には各々相通するものが流れていたように思われる。乾山は江戸へ下向、坊官らの勤める輪王寺宮・寛永寺領内入谷村に住してやきもの製作、何らかの因縁が胸裡を過ぎる。

公辨には、寛永寺末寺深大寺の痩土地に蕎麦の栽培を奨励、その蕎麦を好み、年貢米にならない「はね米」を用いた竹隆庵のこごめ大福餅を食し、根岸では笹之雪の豆腐を楽しみにしたなど、種々の逸話も伝承する。

（二）寛永寺六代門主・輪王寺宮公寛法親王

公寛法親王は乾山所縁の法親王である。

「寛」は、心が豊か・度量が大きい・慈しむなどの意であるが、乾山初開窯の鳴滝山は摂家二條家山屋敷跡であった。元禄七年八月二日に譲渡されたが、当時の二條家当主は一七代綱平（一六七二―一七三二）、簾中は榮子内親王（一六七三―一七四六）、霊元天皇（一六五四―一七三二）の皇女である。兄には仁和寺宮寛隆法親王、弟には東山天皇、妙法院宮堯延法親王がおり、公寛は榮子内親王弟東山天皇（一六七五―一七一〇）の第三皇子であった。公寛法親王の消息は、以下の記録にその概略が認められる。

① 『輪王寺宮年譜』：出生・経歴・官位・院号とその大概
② 『徳川実紀』：将軍吉宗との交流、行事、日光登山のことなど
③ 『史料稿本』：寛永寺門主・輪王寺宮の動静、帰洛後の事柄
④ 『月堂見聞集』：天台座主として上洛、在洛中の諸事
⑤ その他伝えられる自筆の書・画・扁額揮毫、和歌・漢詩など

1、公寛法親王の消息（各々に重複する箇所を含む）

① 『輪王寺宮年譜』

『輪王寺宮年譜』は輪王寺宮歴代の来歴を年代を追い纏めたものである。公寛法親王の父は東山天皇、母は春日局従三位経子（参議水無瀬兼豊女・実は下冷泉爲経女）。幼称を三宮、俗称有定。三歳の折に近江円満院行恵法親王の附弟となり、同寺を継跡。円満院は平安期天元四年（九八一）の草創、村上天皇皇子悟円法親王を開基とするが、園城寺（三井寺・天智天皇皇子大友皇子の発願）一山中、第一の格式を有したとされ、宝永五年（一七〇八）公寛は同院において得度、法諱覚尊、正徳三年（一七一三）公辨の法嗣に決定。同四年坂本滋賀院に移り、二月一日東叡山・日光新宮に就任する。公辨からは公寛の二字を授け、二品、阿闍梨宣下、勅會御潅頂御修行、同五年五月二〇日一八歳を以って寛永寺門主、輪王寺宮を継承する。享保二年（一七一七）一品宣下。翌三年天台座主として上洛、供は霊山院（御附は不明）、五月三日に東叡山発輿、同月一四日京都着、

御旅舘は有栖川殿とある。

再度の上洛は同一六年四月二六日、供は恵忍院、御附は水野惣兵衛、医師名はないが、『輪王寺宮御上洛記上』（叡山文庫）に照合、芥川元泰であったことがわかる。同上洛記は寺方による記録である。大半が寺院関係、挨拶・贈答品などの記載である。もしやと思い叡山文庫を訪ねたが、三〇種ほどの文書中乾山名を見出すことはできなかった（町人名を認めるが）。

京都着は五月七日、御旅舘は廬山寺とあり、九月一八日には毘沙門堂に入室する公遵（こうじゅん）の得度に戒師を勤め、一〇月二三日江戸へ戻る。享保二〇年（一七三五）五月八日公寛法嗣として公遵法親王が決定。元文三年病がちとなり、三月日光新宮・公遵法親王に職務を譲り、勅賜号崇保院を受理。同月二五日、四二歳を以って薨去、東叡山慈眼堂境内に奉葬される。

②『徳川実紀』

『徳川実紀』は『御実紀』が正しく、幕府の記録を基盤とする。日付を追って歴代将軍とその時代の出来事、逸話などを集録。本編と附録から成り、編集には林述斎、成島司直（なるしまもとなお）ほか下級武士、昌平坂（しょうへいざか）学問所の学生が当たるとされる。文化六年（一八〇九）二月に始まり、天保一四年（一八四三）一二月（嘉永二年とも）完成したが、公寛法親王に関係する記述は、正徳三年（一七一三）一二月一一日「けふ日光准后こはせ給ふまゝに　円満院覚尊法親王附弟の事仰下さる」に始まり、元文三年（一七三八）三月一六日「この日崇保院准后公寛法親王うせ給ひしをもて音楽をとゝめらるゝこと三日なり」を以って終わる。

公寛法親王関わりの将軍は、かつての紀州藩主、八代吉宗・頼方である。政治体制、幕府財政の再建を試み享保の改革に着手するが、公寛とは親しく交流、日光山への往還にはその前後に必ず慰労の使者を立てるが、宮の健康を気遣い、時には医師の派遣・随行などを考慮する。宮の進言にも即対応。一例であるが、日光山東照宮給仕輩の困窮を伝える宮の訴えに即賑給を以って応え、天台座主として上洛する節には駅使の配慮も記録に残る。一方、公寛も吉宗の改革に恭順、享保六年寛永寺本坊の修理には「華麗に過ること然（しか）らず」として、自ら書院、装束所他を取り払うなど、質素を心懸ける態度をみせる。

が、享保一三年四月一三日、幕府は大散財、大行事を敢行する。

吉宗による日光社参である。秀忠・家光・家綱以来六五年ぶりの日光登山、諸大名を引き連れての参詣であったが、幕府権威の復活を図り、泰平の世に軟弱化した武士の精神を戒めることを目的にしたという。莫大な支出を伴い、出発前八日には行軍予習も行われたが、一三万人余の供奉、二二万人の人足、夥しい数の人馬を揃えた記録が残る。厳重な警護のもと日光までの途次、岩槻・古河・宇都宮に宿泊。一七日には公寛法親王の先導により家康忌日の祭祀を厳行。家光・大猷院霊廟に参詣し、帰府となるが、五月二〇日には寛永寺に御成（おなり）とあり、法親王・僧正・院家・坊官・家司ら一山の宗徒みな出座、無事の還御をよろこぶとある。

宮は、毎年一月・四月・九月の厄月には日光山に上るしきたりであった。滞在は凡そ一ヵ月、寺務を果たし、天下泰平、幕府安泰・万民豊楽を祈念するが、年度はじめの登城はそれ故二月一日が決まりであった。拝賀には日光・比叡・東叡山の三山僧侶、宮家の家司、伶官も参内。三月には上巳（じょうし）、五月端午（たんご）、七月七夕（たなばた）、九月重陽（ちょうよう）などの季節・節会の挨拶、

折に触れて法会・法要・法務に関する伺候もあるが、「日光門跡」（「日門」、『妙法院日記』は「輪門」と記す）からも四季折々の贈答品、祈祷の巻数・符録、祖師天海の植林した吉野の桜（上野の桜）、不忍池の蓮根、薯蕷・岩茸、京都からの薫衣香・干菓子などを献上。将軍からは昆布・柿・蜜柑・葡萄・茶・龍眼肉、朝廷の慣習に因み時服と称し毎年春秋・夏冬二季の衣服を贈呈。祝事には太刀・金、仏事・法会には金銭の授受も記録に残る。享保一六年の上洛には、出立前の四月四日、将軍は銀五〇〇枚・綿三〇〇把、大納言は銀三〇〇枚を贈呈。執当・坊官・家司らにも賜ものがあり、京都においては寛永寺門主法嗣公遵法親王の得度に際し、公寛・公遵両宮へ紗綾・銀・馬代などが贈されている。諸行事は恒例化、応答には寺側、幕府側ともに専門とする担当者の配慮があった。

元文二年五月三日上野は大火にみまわれた。下谷八軒町より出火した火は寛永寺本坊・開山堂・福聚院・東漸院などを焼き尽くすが、吉宗生母浮圓院霊牌所なども被災。公寛は観成院へ、新宮となった公遵法親王は春性院へ避難をするが、幕府からは即、時服・夜着・蒲団などの配慮があり、本坊復興の営作の任には寺社奉行大岡越前守忠相、小普請奉行本多近江守正庸が当てられた。が、公寛法親王はこの頃からしだいに健康を損なうか、病の記述が散見。やがて翌年三月九日病臥を以って任務を離れ、幕府からは医師吉田元卓も参上するが、同月一六日薨去、鳴物停止三日の沙汰が下された。

③『史料稿本』

『史料稿本』は、『大日本史料』の草稿である。明治年間の編纂であり、平安・仁和三年（八八七）から江戸・慶応三年（一八六七）までの史料、本文・書名・その他を集成、記録したものである。公寛法親王に関しては、正徳四年四月二二日（二三日とも）二品宣下、享保二年二月一九日（二九日とも）一品宣下、享保三年初の上洛を伝え、寛永寺新門跡の始まりを知らせるが、天台座主には二度就任。初度は享保三年、二一歳の折であり、青蓮院尊祐法親王の辞任に伴い選任された。「御上京御供霊山院其外御附之名前書留無御座」とあり、寛永寺執当霊山院が同行。霊山院は慈泉（公辨より賜）と称し、西久保普門院の院主であったが、供衆の詳しい記載はなく、滞在は五ヵ月余り。六月一三日天台座主、八月護持宣下、一〇月二六日には座主を辞任し江戸へ向かう。帰府後の記録は以下の通りである。

享保四年一一月四日　将軍吉宗より朝鮮国からの贈品を分与される
同　五年二月一九日　焼失した寛永寺開山堂（享保三年）の建立を願い出るも不許
同　一一月一日　再度幕府に開山堂建立を請い小規模として認可
同　七年一二月二二日　律院創置を願い認可
同　一三年五月二〇日　吉宗の寛永寺詣り（御成）、公寛宴を催す

再度の上洛は享保一六年四月二六日、三四歳の折である。「此時御供恵忍院御附水野惣兵衛御医師名前書留無御座」とあり、同行は恵忍院、水野惣兵衛、医師は芥川元泰の名を確認した（『公寛法親王御在洛日記』叡山文庫）。恵忍院は恵潤と称し、寛永寺執当と推測。供衆は水野惣兵衛、『月堂見聞集』には惣兵衛に加えて水野隼人正の名もみられる（両者は父子か否か）。滞在は同じく五ヵ月余り。一〇月二三日帰府の途につくが、その後のことは以下のように認められる。

享保二〇年五月九日　毘沙門堂公遵法親王を附弟とする
元文元年　九月四日　幕府開催江戸城大広間に於ける散楽・饗応

同　二年　三月一日　公寛、公遵両法親王を招き於御座間における散楽・饗応
同　五月三日　下谷大火。寛永寺本坊・吉宗生母巨勢氏廟焼亡
公寛は観成院、公遵は春性院に移居
同　六月二五日　幕府猿楽を開催、公寛、公遵法親王を饗応
同　一〇月一九日　幕府江戸城西丸において公寛、公遵を饗し猿楽
元文三年三月九日　公寛法親王病を以って隠居願。公遵に代わる
同　三月一五日　公寛法親王薨去
同　三月一六日　公寛の薨を以って鳴物三日の停止
同　三月二四日　公寛の薨を以って京都において廃朝三日

④『月堂見聞集』

『月堂見聞集』は本島知辰（生没年不詳）編。知辰は京都の人、字を梅干、号を月堂と称したが、詳しいことは伝わらない。同書は元禄一〇年から享保一九年（一六九七―一七三四）に至る三七年間の記録であるが、江戸・京都・大坂の三都を中心に地方に伝わる巷説、天変地異、災害、自然の出来事などを集録。公寛法親王に関しては正徳四年から享保一六年までの記述があり、以下はその抜萃である。

正徳四年甲午歳（一七一四　公寛法親王一七歳・乾山五一歳、両者の年齢差は三四歳）
○三井寺円満院宮　東山院之皇子　冷泉様御娘御腹　当年十七　此度日光山輪王寺へ御入院　去極月十八日江戸御殿中にて為被仰出　則当二月朔日京都御発輿被遊候由　町奉行中根摂津守殿　内々江府御参勤御願故　此度宮様供奉被成候筈

享保三年戊戌歳（一七一八　宮二一歳・乾山五五歳）
○同（五月）十四日　日光輪門主御上京　有栖川様御屋敷御旅館
○同廿七日（十月）　輪門主日光へ御帰山に付　京都御発足

享保一六年辛亥歳（一七三一　宮三四歳・乾山六八歳）
○五月七日　日光宮様御入京　廬山寺に御寄宿　御供水野惣兵衛　水野隼人正
御尋相済候御礼のため御参内
○日光宮様　江戸御道中御通り之節　大名方泊り休み高札をおろし　小き紙に何某泊り或は休みと書付　彼の札の柱に張る　但し地より二三尺高く張るなり
宮様御乗物よりあがらざるやうの為なり　若し寄宿の大名あれば幕をおろし上下の人数外へ不出　鳴り音を静め　是又細微なる紙に何某寄宿と書し　地より二尺程に張る　途中にて行逢たる大名家中末々迄惣下馬なり
○五月廿九日　六月朔日　二日右三箇日　日光宮様へ山門惣出家衆　其外諸国僧侶諸旦那　御礼金子銀子扇子御菓子献上　貝塚卜半金目録御目見え
○同十八日（ママ）日光宮様叡山へ御参詣　夫より三井寺にて御晝休み　夫より毘沙門堂へ御入御休息　志賀院に御滞留
○六月十日　二条右府吉忠公　御簾中一所に壬生地蔵堂へ御参詣　此処に二条殿御地方あり　庄屋濱岡与三右衛門宅にて御休息あり　饗応の内に御望に依て俄に舞臺を拵て　壬生寺大念仏の狂言を仕候　世間に日光様御見物と云尤非なり　輪門主様は祇園会七日十四日ともに御見物無之由　山門へ御登山被遊夫より志賀院に少の内御滞留　三井寺より山科へ夫より御本坊へ御帰駕被遊候由　已上
○六月晦日夜　日光宮様下賀茂へ御越　則拝殿幷橋殿に翠簾を掛御座とす　御祓御覧の後御帰寺　志賀院　水野惣兵衛御供
○九月十二日か　妙法院様坊官衆逼迫の事　一説に　日光宮様御方へ諸門跡様方御招請被遊候節　妙門様紫衣一説緋衣と云は誤り也　此れは御着被遊候時は青門様へ御断被遊候て御着被遊候古実也　右の御断無之　坊官衆の不届に依て如此右は法皇御所より被仰渡候由
○九月十二日　修学院へ御幸に付　日光宮様御一所に行啓あるべき筈の所に宮様は少々御機嫌不宜故　其義無之候
○同十八日　二宮　毘沙門堂へ御入室行列奥に記す
○享保十六年亥九月十八日　二宮（公遵法親王）　毘沙門堂へ御入室行列同日御得度其後に御囃子在之
二宮様は三条西殿迄御入　夫より窃に聖護院宮様へ御入被遊候毘沙門堂迄の儀式は空輿而已　是故実の由　御得度も実は当春被遊候　曇華院様も御得度は相済候て　当九月廿一日に御得度の御儀式有之候
二宮の御事　今上皇帝第二の皇子　御母は清水谷大納言御娘源内侍の御腹
（公寛法親王の法嗣、次代輪王寺門主公遵法親王の得度のこと、戒師は公寛）
○同（十月）五日　日光御門主　毘沙門堂御門主　両御門跡様御目見　金目録
昆布一臺御暇乞御礼貝塚卜半　右は日光御門主当十日には江戸へ御発足に付て也
○同十日朝　日光御門主京都御発輿　以上。

正徳三年一二月一八日、江戸城において公辨法親王の法嗣として公寛法親王が決定。翌四年二月一日町奉行中根摂津守同道のもと日光新宮として江戸へ向かう。

五年が経過、初上洛は享保三年。再度の上洛は享保一六年四月二六日。同日江戸を出立、供衆は水野惣兵衛・隼人正、宮の格式を示す道中記があり、近江三井寺、山科の毘沙門堂にも立ち寄っている。かつて新門主として研修に励んだ大津坂本天台宗滋賀院に滞留。滋賀院は天海の開創であるが、元和元年（一六一五）後陽成天皇より京都法勝寺を下賜されたことに始まるという。輪王寺創設に伴い兼帯寺となり、延暦寺里坊の一つとなるが、天台座主を勤めた法親王の住まい、学問修業所として使われていた。叡山文庫には享保一六年「公寛親王御上洛坂本并山上下宿部屋割覚」（「止観院文書」）とした宿泊記録が残る。供衆の宿泊を確認するが、月堂はここで巷説を挿入。京都滞在中公寛は、六月一〇日二條綱平息吉忠夫妻の壬生地蔵堂参詣に同伴した・否、祇園会見物をした・否、また六月晦日夜には水野惣兵衛を供に下賀茂神社の祓えに参上、九月には洛中の諸門跡の集会に参会するが、もしや乾山との手懸かりがあるのではと考えたが、否であった。

⑤　公寛法親王の文事・芸事

公寛法親王には桂洲（『浅草寺社書』他）と号し、書・画、漢詩・和歌、猿楽などの嗜みが伝えられる。絵画・扁額揮毫、和歌集奉納などが伝世（判然としないものもある）。近辺及び三山管領職を勤めた関係上それに繋がる寺社、輪王寺宮御家来衆に蔵された諸品などに足跡が残る。

―絵画―

一、元三大師肖像：

日光往還の折、公寛法親王は佐野大字寺岡、春日岡山惣宗寺を宿所とした。同寺は別名寺岡山薬師寺、通称佐野厄除け大師として親しまれているが、寺には公寛筆元三大師肖像画が伝承する（一六弁の金彩菊花紋章がある）。元文年間、亀田庄左衛門則重なる人物が寛永寺より拝領、当地の寺に寄進したと伝承するが（『栃木県誌』）、元三大師は天台宗中興の祖、延暦寺一八代座主慈恵大師・良源（九一二―八五）である。命日が正月三日であることから元三の異称が生じ、一説によれば同絵画は、佛絵師神田宗庭（三代善信か四代伊信か）の描く所、公寛法親王が開眼供養（目を描き魂を入れる）をしたと伝えられる。神田宗庭は、木村了琢とともに江戸期を通じ日光山、東叡山などの仏画・肖像画を制作した仏絵師である。初代宗信（一五八九―一六六二）は天海に従い江戸へ下向、家康の肖像画を描き、のちその修復に当たった七代貞信（一七六四―一八〇〇）は「東叡山御繪所宗庭御修復調達」と記すが、寛永寺絵所、絵仏師であったことが知られる。『古画備考』には寛文以来一一代に渉る記録がみられる。江戸期は大規模な寺社造営に伴って御用絵師狩野一派とともに神田家、木村家代々が活躍、日光東照社に関しては、東照大権現像・天海大僧正像・薬師如来像・釈迦三聖像などが伝世する。

二、珠絵（宝珠か）：

前橋市総社町、光巌寺には珠絵が伝えられる。光巌寺は天台宗秋元山江月院、府内・関八州天台寺院の取締役であったが、享保二〇年（一七三五）三月上旬、同寺一〇代晃覺は日光山禅智院住持を勤め、その折公

寛より同画を下賜され、箱書には以下のように記されている（「光巌寺文化財調査」）。

晃覺曾住持晃日光山禅智院干時公寛大王命爲□近因自画以賜之者也
享保乙卯春三月上旬　准三后一品公寛親王御真筆　當寺第十世晃覺寄附

三、山水画：

享保一四年刊『澹園初稿』（秋本澹園・一六八八―一七五一）に「東叡玉台因不佞白雲詞賜画山水謹奉拝謝即事」とある。澹園は下野国黒羽大関藩鈴木刑部三男、名は以正（喜内）、秋本家の養子であった。荻生徂徠に古文辞学を学び、詩文にすぐれ、しばしば大名家の詩会に参会するなど、同画は澹園の賦した「白雲詞」に対し、公寛法親王が山水画を描き下賜したものと伝えられる。その他、地蔵菩薩像、日光照尊院蔵品なども伝聞する。

―書（扁額・経巻・その他）―

一、日光山二荒山神社神額：

享保一六年日光山二荒山神社中鳥居に「正一位勳一等日光大権現　一品公寛親王御筆」（『日光大観』「千とせの神垣」）とした神額が掲げられた。元禄八年の建立であるが、寛政年間修理によって杉の鳥居は唐銅に改められ、のちに神佛分離によって撤去されたと伝承する。

二、下谷稲荷神社扁額：

下谷廣徳寺向かい側にあり、俗称廣徳寺稲荷また正法院稲荷。寛永寺の建立に伴い寛永四年上野下寺（屏風坂大久寺隣）、延宝八年下谷廣徳寺前へと移転したが、享保四年、公寛法親王の執奏により正一位、中鳥居扁額に「正一位稲荷大明神」（『江戸名所図会』）と揮毫、下谷鎮守となるが、大正一二年関東大震災によって社は倒壊。昭和九年に復興する。

（その他『略縁起集成』によれば埼玉熊谷稲荷社額もあるという）

三、鶴岡八幡宮「三十六歌仙」扁額：

鶴岡八幡宮扁額に関し「畫ハ住吉廣守筆、歌ハ日光准后公寛法親王ノ筆ナリ」とある（『新編相模国風土記稿』）。康平六年（一〇六三）源頼義（九八八―一〇七五）が石清水八幡宮の分霊を由比鶴岡に勧請（神仏の分霊を請じ迎えること）、現在地には治承四年（一一八〇）鎌倉幕府初代将軍源頼朝（一一四七―九九）が移し、日光山と同様、頼朝によって関東一円の護りとされていた。扁額は伝世せず、廣守筆絵、公寛の和歌書も不明であるが、住吉廣守（一七〇五―七一）は住吉廣保息、御用絵師であり、やまと絵を専らとした。公寛の周囲、和歌・文学では田澤義章が侍史しており、田澤は享保二年『武蔵野地名考』を著し、『日光山記』『志賀記』『歌仙考』などを献上。鶴岡八幡宮両宮（上・下）にはさらに公寛法親王筆歌仙和歌各々一通があったと伝承。

是元文御修理ノ時造ラルヽ所ナリ
承寛雑録曰、元文元年、上下両宮へ歌仙一通ツヽ御奉納、日光准后ノ筆ナリ云々、　按スルニ、上宮ノ額ハ、回録ノ時烏有ス（『新編相模国風土記稿』）

とあるが、「烏有」は全く無いの意、文化・文政期には既に消失していたか。が、『徳川実紀』には「日光准后公寛法親王鶴岡八幡宮の歌仙を染筆ありしにより　高家中條大和守信實して純子二十巻　昆布一箱をくらせたまふ」とあり、幕府の関与が推考される。

四、法華経八巻：

埼玉県岩槻市大字慈恩寺に伝承する「崇保院公寛親王御筆法華経八

巻」である。慈恩寺は天長年間（八二四―三三）天台宗延暦寺三代座主慈覚大師・円仁（七九四―八六四）の開創と伝えられるが、寺山の風景が唐の慈恩寺に似た所から慈恩寺の名がつけられたという。天正一九年（一五九一）徳川家康は寺領一〇〇石を寄進。寛永年間、寛永寺末寺となる。

五、書一行物：

文政頃、輪王寺宮家に仕えた狩野派絵師鈴木一郎（秀実・有年　？―一八六六）は宝井馬琴（一七六七―一八四八）に公寛法親王筆一行物「乾坤一草亭」を贈る（『馬琴書翰集成』）。天保二年（一八三一）宮家家臣宅において目にした掛物であったが、詩句（『金石印譜』）は馬琴の愛翫する印章句の一つ。喜ばせようと無理に入手、馬琴に進呈。が、権威に媚びることを好しとしない馬琴は押入にしまい込み、遂に用いることはなかったという（『馬琴日記』）。その他公寛作の漢詩には葉室頭孝（一七九六―一八五八）自筆「頌公寛法親王初賦詩」がある。

安永頃には初音の森の鶯（乾山献上と伝承）、浅草寺門前の浅草餅を好むとした逸話も伝承、俳諧では宝井其角門人秋色女の句、「井戸端の桜あぶなし酒の酔い」（『いつを昔』元禄三年刊）に心を留め、庶民の暮らしに目を向ける。

公寛は「供養法華儀」「重建勧学会条式」「読法華千部会啓建議」などを著した。日記には『公寛親王御在洛日記』（叡山文庫）が伝承する。が、このたび叡山文庫を訪い関係文書のすべてを披見、乾山に関する如何なる文書・事項も見出すことができなかった。自筆・個人の日記などは別途に保管されているかも知れず、江戸では度重なる火災もあり、焼失した可能性もある。乾山は入谷村のほか本所六間堀・材木商（米問屋か『深川区史』）筑島屋坂本米舟の長屋に独居、陶器を製したともあるが（『古画備考』）、元文二年下谷は大火、寛保二年には綾瀬、千住の堤防決壊、浅草・下谷一帯が大洪水に見舞われた。大火の折には本所へ移るが、本所には長崎町があった。「長崎乾山」はその折の作陶であると考えるが、一仕事成し終えた老陶匠は、数寄者の陶芸、席焼・席描を愉しみとしたものではなかったか。光琳二世を名のり、何帛（立林）を相手に絵師としても活動、和歌・俳諧では吉原名主庄司道恕斎、坂本米舟、須藤杜川、ことに依ると『近代世事談』を著した菊岡沾凉らとも知り合いではなかったか。茶会・詩会、和歌・俳諧の集いに参会、江戸における乾山は、輪王寺宮公寛法親王と同家坊官進藤周防守勝任、入谷村やきもの工人次郎兵衛、久作。絵師立林何帛、数寄者・趣味人、既述の俳諧仲間などの交遊の中に活動していたことが推察される。

2、公寛法親王と乾山

元文三年三月一五日、公寛法親王は四二歳の生涯を閉じる。薨去は京都『二條家番所日次記』には以下のように書き留められた。

三月廿四日晴　関白様御使中島昆八　御廻文來候儀　次第御傳達可被成候由也　其趣左記　崇保院宮様就薨去　従今日三ヶ日之間廃朝候　仍而爲御案内如是ニ候　已上　三月廿四日　右如例次第可被來御傳達候　以上

『妙法院日次記』にも同様の文書を認めるが、加えて公寛法親王後継者、中御門天皇皇子公遵法親王の兄弟からは、「御悔御使被進候ヶ所」として聖護院宮様忠誉法親王（一七二二―八八）、曇華院宮様聖珊女王（一七二一―五九）、大聖寺宮御附弟友宮様など、弔意の使者が立てられたこ

とが知られる。

乾山の嘆きは如何ばかりであったろう。三回忌に当たり崇保院宮の法号を頭に和歌六首（冒頭の六首）を詠ずるが、光輝く宮の遺業を偲び、儚くも命長らえる我身を寂しくふり返る。

宮と町人との関わりは、寛文年中初代輪王寺宮守澄法親王に随従、江戸入りした江州坂本豆腐屋平右衛門の名が残る。天和三年（一六八三）坂本町二丁目に「金御紋付御用掛札」とあり、京都より「連れ來たり」、麩の用達を命ぜられた麩屋清右衛門は屏風坂下車坂町に「御用札」を拝領する（『下谷区史』）。寛永寺門主らとの関係では天海と御木具師（吉兵衛　柴田山城、屏風坂下車坂町）、公海と御木具師（庄左衛門　山城屋）他があり、薬種商勧学屋大助池之端仲町、菓子商茗荷屋肥後上野元黒門町、呉服商・瀬戸物商・指物師など、上野界隈に住まいし、時代とともに名匠、名店として名を残す。

乾山も、類似の立場ではなかったか。

法親王との関わりは元文二年正月の乾山自筆書状（「小西家文書」）に確認できる。銀座役人甥の彦右衛門（光琳庶子）を宮に紹介、その同僚長谷川長兵衛を宮に対面させるなどの労を執るが、『上野奥御用人中寛保度御日記』には乾山の死に関し坊官計らいによる弔いの配慮、「乾山世代書」には「准后様京師より御召連被成候」、『古画備考』には「上野ノ准后様ヨリ折節召レシ時」とあるなど、町人ながら法親王との関係はかなり融通のきく立場にあったことが推測される。

御所出入りの商家の出自、半ば商い、半ば属する貴族に従属するなど、乾山には上つ方との交流が深く、葬儀、善養寺への墓所を手配した人物も輪王寺宮家坊官周防守進藤勝任である。「宮様御不便の者」とした言葉も残り、さらに進藤家は毘沙門堂坊官も勤める家柄。毘沙門堂には「東叡輦寺」と書した乾山焼薔薇図茶碗が伝世していた。追善和歌六首、書状・絵画にみられる「傅陸」印と活用。傅陸は「王命傅御」、帝に奉侍する王臣の意を含み、「傅」「扶」は同義、「陸」は睦む・広く平らな上野台地を意図したものか。武江在住の証であろうが、佐野の素封家大川顕道も手控（『陶器傳書』）に「乾山焼秘傳武刄より申來たる」「壬九月廿二日」（享保一七年）と記しており、享保一七年乾山の江戸在住が確認できる。入谷は上野にあり、上野には寛永寺・輪王寺宮家があった。権威ある天皇家、権力を有する将軍家、両者の結びつきが如何に大きな力を有したものか。乾山はその法親王の膝元にあり、晩年をおくる。

（三）日光山・比叡山・東叡山

1、日光山満願寺（一乗実相院）

輪王寺宮は三山管領宮とも称された。

東叡山寛永寺に常住、正月・四月・九月の厄月三ヵ月を一ヵ月ごと日光山に登り滞在、時に応じて天台座主として近江比叡山に上る。輪王寺宮は承応三年（一六五四）後水尾天皇第三皇子守澄法親王を初代とするが、明暦元年（一六五五）後水尾院の勅によって日光山満願寺は輪王寺と改称、貫主は輪王寺宮と称された。天台座主として上洛、東叡山門主、日光山貫主、比叡山座主を兼ねる三山管領、全国の天台宗寺院及び幕府の施策・行政に従って当時の宗教界を統轄する役割を担う。

日光山は、地名であり、祭祀団体、同地方の宗徒二〇ヵ寺の総称である。奈良時代末期、天平神護二年（七六六）、山岳修業を求めた勝道上人（七三五―八一七）が神宮寺、四本龍寺を創建したことに始まるとされ、二荒山神・三社大権現を勧請、寺院は満願寺と改称、弘仁一一年（八二〇）二荒は日光に改められた。嘉承元年（八四八）慈覚大師円仁（七九四―八六四）が来山、天台宗一乗実相院を総称とするが、二年後には坐禅院を創立、宗徒三十六坊が開かれるなど、勝道上人従弟大中臣清真を招いて二荒山神社に神主を置くが、治承元年（一一七七）兵火に遭遇、寺院は全焼してしまう。

再建は鎌倉期である。鎌倉幕府初代将軍頼朝は下野寒河郡の土地を寄進。源氏の信仰を受けて日光山は関東一円の護りとなるが、三代将軍実朝（一一九二―一二一九）時代に護持僧弁覚法印が入山、熊野修験法を導入。光明院を創設し、貫主は源恵、鎌倉に居をおき、執務は留守役が当たるとした形式が成立。源恵はやがて京都へ上り天台座主を勤めるが、日光座主が天台座主となる嚆矢とされる。隆盛をきわめ、室町時代には関東一の霊場として知られるが、領主壬生氏が介入するのは戦国時代以降のことである。が、壬生氏に従い日光宗徒は秀吉の北条征伐には北条氏に加担。全てを没収される結果となり、復活は、慶長一八年（一六一三）、家康が天海を日光山貫主に命じたことに始まり、日光山に新たな時代が訪れる。

家康の没した翌元和三年（一六一七）、日光山に「東照大権現」（家康）が祀られた。天海は、臨済僧以心崇伝（一五六九―一六三三）らの主張を退け、神仏融合、山王一実神道の立場をとり、家康の死に権現号の諡号勅許を願い出る。日光山は徳川氏とその祖廟を守る霊地となり、徳川幕府の権威を支える拠点となるが、かつて天台宗祖最澄（七六七―八二二）は中国に渡り帰朝後、天台山国清寺に倣い延暦寺に地主神・日吉山王権現を祀る。空海の来山説も伝承し、天台・真言二つの密教が伝播、日光山は山王神道、日枝山の山岳信仰・神道・天台宗が融合するが、さらに真偽は別として「一周忌過ぎに日光山へ勧請（神仏の分霊を請し迎えること）するべし、八州の鎮守とならん」とした家康遺言も伝世、天海は朝廷から「東照大権現」の勅許を得る。元和三年（一六一七）駿府久能山に納められた遺骨を遷移、東照廟が創祀されるが、七回忌には二代将軍秀忠が参詣。寛永一三年（一六三六）、三代家光による東照社大造替が完成するなど、二一回忌には「東照大権現縁起」（狩野探幽筆）が起草された。同二〇年天海は入寂。正保二年（一六四五）東照宮の宮号が勅賜されたが、家光は積極的に家康の神体化を図り、自らも日光に大猷院霊廟を造営。家康は増上寺において盛大な葬儀、安国院霊廟を設営、日光山には大権現となって神として祀られる。家光も寛永寺に墓所を設け、日光山に霊廟を設えるが、同山には朝廷から毎年奉幣使が参向、正徳五年三月には一〇〇回忌勅使として二條綱平の発駕があった。秀忠・家光・家綱・吉宗・家治・家慶らの将軍社参、御三家・諸大名の日光詣、庶民の参詣も始まってゆくが、日光街道も徐々に整備。門前町・宿場・茶店などが揃い、東照宮の造営は多くの繁栄をもたらすなど、統率者、その責任を任された人物が三山管領宮、輪王寺宮であった。

2、比叡山延暦寺

比叡山は、『古事記』に山の地主神「大山咋神」（「山末之大主神」）の鎮まる所、聖地であったと記されている。天智天皇が大和から三輪明神を迎え大比叡と為し、大山咋神は小比叡として、日枝大社に祀られる。

比叡山は京都及び大津坂本に位置する山である。山上には桓武天皇代延暦年間（七八二―八〇六）に開創された勅願寺延暦寺があり、天台宗総本山、開山は伝教大師最澄（七六七―八二二）である。大山咋神は山の地主神、延暦寺の結界を守る守護神であるが、中国の天台山鎮守「地主山王元弼真君」に倣い別名「山王」、天台宗に起きた神道一派を山王神道と称している。

最澄は、近江に生まれ一二歳で同地国分寺行表の弟子となった。一五歳で得度。奈良東大寺に学び、延暦四年（七八五）比叡山において禅定修業。一乗止観院（根本中堂）において経典研究、同七年比叡山寺を建立する。入唐して天台山に学び、四宗（天台円教・密教・止観・戒律）を相承、帰朝して桓武天皇から天台開宗の勅許を得るが、継承者修禅大師義真（七八一―八三三）も最澄に従って入唐。『天台法華宗義集』を著し、天台座主の初代となる。二代は寂光大師円澄、三代は斉衡元年（八五四）慈覚大師円仁であるが、三代以来寺内の称であった天台座主は公的な役職となり、一山宗徒三〇〇〇人、一八代慈恵大師（良源・元三大師）の頃には最盛を極めたという。

元亀二年（一五七一）、織田信長（一五三四―八二）は延暦寺を焼討ちにする。秀吉、家康は復興に尽力するが、多くの堂・塔を焼失。叡山に学びの道を求めていた天海はこの折、武田信玄のもとに身を寄せるが、信玄は翌元亀三年壬申正月二一日身延山を以って「東叡山」の山号を希んでいた。が、成就することなく（『享禄以来年代記』）、「東叡山」はのちに常陸の千妙寺、天海が住持を勤めた武蔵国仙波喜多院（無量寿寺）の山号となる。天海は新都江戸に、比叡山延暦寺と同格の寺院・勅願寺造営を望んでいた。結果、山号「東叡山」は上野寛永寺に移され、千妙寺は古東叡山と呼ばれ、仙波喜多院は星野山に復されるというが、慶長一二年（一七〇七）、天海は家康の命を受け比叡山探題奉行を勤める。叡山復興に尽力、根本中堂、大講堂なども再建、積極的に幕府の宗教政策に参画する。勅願寺の建立、三山管領宮の確立と輪王寺宮の設立、家康を権現として日光山に祀るなど、元和元年（一六一五）には比叡山麓に滋賀院を創設する。滋賀院は後陽成天皇から京都法勝寺を下賜されたことに始まるという。輪王寺宮門跡の成立に伴い天台座主・門跡の学問修業所、隠居所、延暦寺里の坊の一つとなったが、寺領は一二五〇石、境内は凡そ六〇〇〇坪、客殿、小書院、二階の書院、文書保管・寺務を司る用部屋があり、御成門・物見・長屋・土蔵が設けられた。滋賀院御殿とも呼ばれており、公寛法親王も輪王寺宮となり江戸へ下向する前、滋賀院に入室、勉学修業、上洛時には御座所として活用、滞留に用いていた。

3、東叡山寛永寺

家康（一五四三―一六一六）は、江戸入府（天正一八年・一五九〇）前、小田原陣中におき、菩提寺、祈祷寺として増上寺、浅草寺の方丈、別当を招き、話し合いをもったという。

三縁山増上寺は、武蔵国豊島郡貝塚にあった真言宗光明寺を本居とす

る。明徳四年（一三九三）千葉氏・佐竹氏などの助力によって再建され、浄土宗増上寺に改められたが、家康は郷里岡崎の菩提寺大樹寺とともに江戸にも菩提寺を求めていた。結果、法系を同じくする増上寺を選択、元和二年（一六一六）、家康の葬儀が執行される。将軍家の菩提寺となり、家康墓所安国院（家康）廟を設けるが、将軍秀忠、家宣、家継ほか、その生母、各夫人方、子供方の墓所・霊屋などが調えられる。

金龍（竜）山浅草寺は江戸における最古の寺である。聖観音宗の総本山とされ、始まりは推古天皇代三六年（六二八）に遡る。隅田川に流れ着いた観音像を本尊とし、坂東三十三所観音の十三番とされており、大化元年（六四五）観音堂を建立した勝海上人を開山とし、東国を巡行した円仁（七九四―八六四）を中興の祖とする。寺名は『吾妻鏡』に初見、頼朝・北条氏・足利氏らの庇護などが記録に残る。家康は寺領五〇〇石を寄進、江戸城鎮護、幕府の祈願所としたが、秀忠は同寺に東照宮を造営するなど、周辺は庶民の集う娯楽場として繁栄する。綱吉時代に寛永寺支配下となり、貞享二年（一六八五）兼帯寺、昭和五〇年天台宗から独立する（伝法院は本坊である）。

―東叡山―

寛永寺の山号「東叡山」は、比叡山に対する東の叡山（上野山麓）、もとは武蔵国仙波（埼玉県川越市）、天台宗準別格寺院、星野山無量寿寺・北院（喜多院）の山号である。喜多院は通称川越大師、天長七年（八三〇）淳和天皇の勅により円仁が開山となるが、鎌倉期には北院（仏蔵房）・中院（仏地房）が設けられ、天台教学拡張の拠点となった。五五歳の天海は同寺豪海に師事、僧名隋風を天海に改めるが、慶長一七年（一六一二）天海は住職として中興の功有り、後陽成天皇から「東叡山」の山号を下賜されたという。家康は寺領五〇〇石を寄進、北院は喜多院に改められ、関東天台宗の総本山となるが、寛永一五年（一六三八）川越大火に遭遇し罹災、山門以外を焼失する。復興には江戸城紅葉山の別殿を移築、東叡山寛永寺の末寺となる。

―寛永寺―

寛永寺は円頓院と称し、寛永二年（一六二五）、上野山麓に天台宗、徳川将軍家の祈祷寺として創建された。家康没後の建立であり、開山・初代門主は慈眼大師天海、開基は三代将軍家光である。山号は天海が喜多院から移した東叡山。計画は家康の意を承けた二代将軍秀忠時代に始まるが、将軍は朱印地と称し全国の寺社に領地を与える権限を有していた（大名の場合は黒印地）。元和八年（一六二二）一一月、寛永寺建立地には伊勢阿濃津城主藤堂高虎・陸奥弘前城主津軽信牧・越後村上城主堀直寄の大名家屋敷別野、及び周辺の村落が当てられた。寺域・寺領は寛文から宝永期まで四期に渉り拡張されるが（『下谷区史』）、京都御所から鬼門に当たる延暦寺を模倣（陰陽道）、江戸城より鬼門の地、上野忍岡を選択。桓武天皇の勅願寺延暦寺の止観院に対し、「円頓止観」（『摩訶止観』）の題目から寛永寺を円頓院と命名した。天台宗は江戸期叡山、東叡山に二分されるが、輪王寺宮を門主とする東叡山寛永寺が総本山となり、日光山に結集する寺社を統括、東照社（東照宮）の宗廟祭祀、鎮護国家、仏法興隆を祈願する任務を負う。三代将軍家光以降は徳川家の菩提寺となるが、本坊は今日の東京国立博物館全域に当たるとされ、上野台地の半分余りが寺域であった。大規模な寺社の建設・造営に伴い谷中、池之端、車坂

側の一帯へと拡張されるが、寛永二年（一六二五）本坊が落成し、その後京都清水寺を模して上野清水寺、琵琶湖に見立て不忍池、竹生島弁財天を勧請し弁財天堂が創設される。寛永四年までに経蔵・多宝塔・仁王門・東照宮など、同八年までには鐘楼・清水観音堂・五重塔・大仏・祇園堂などが寄進された。末寺は一八〇〇寺に余ると伝承。諸大名も前後して子院を設け、自らの宿坊としたが、元禄一一年（一六九八）五代将軍綱吉が瑠璃堂（根本中堂）・吉祥閣（文殊楼）・山王社門・宝蔵などを寄進。同年九月三日には瑠璃堂落慶供養が催されたが、生憎当日新橋から発した火は神田・下谷、寛永寺へと延焼。瑠璃殿は免れたが、本坊・子院一三坊・巌有院霊廟を焼失する。復興には一一年の歳月を要したという。

寺領（寺の収入）は、幕府の寄進が基本である。神領・佛供領・坊舎領などを合わせ、正保三年（一六四六）二一〇〇石、享保三年（一七一八）一万一七九〇石となるが（『下谷区史』）、子院は三六坊とされ、霊廟祭祀料、寄進、葬儀・法要・祈祷料などの収入があったという。年中行事・開山堂など種々の領分・修理・学頭・衆僧らの配当に充てられたが、寺界隈は農村と町家が主体。商業の発達は遅く、産業は近在の土を以って瓦・土器を焼く瓦生産、幕府、寺院の御用を務めた窯場が知られ、職人は半農半陶。乾山の江戸下向以前の活動は記録に乏しい。

―慈眼大師・天海―

天海（一五三六―一六四三）は、戦国末期から江戸初期に活躍した天台僧である。寛永二〇年寛永寺において一〇七歳の長寿を全うするが、陸奥国高田の出自。会津黒川稲荷堂弁誉舜幸のもと一一歳で得度し随風を名のる。一八歳から比叡山・近江園城寺・奈良興福寺において修学。一旦帰郷し永禄三年（一五六〇）足利学校に学び、上野国新川善昌寺に住したと伝承する。元亀元年（一五七〇）再度比叡山を目指すが、信長の焼討ちに遭い、甲斐国武田信玄のもとに身を寄せる。天正元年には会津黒川稲荷堂別当、上野、常陸国不動院、下野国宗光寺にも関わり、慶長一二年（一六〇七）家康に謁したことから運命が変わる。背後にあって徳川幕府の寺社政策・行政、法度などの起案・施策に参画するが、家康・秀忠・家光と三代に渉る将軍家の帰依を獲得、以下はその概要である（『下谷区史』・中川仁喜著「徳川将軍家と寛永寺」）。

元亀二年（一五七一）信長による比叡山焼討後、甲斐国武田信玄の庇護を受ける
天正元年（一五七三）会津、上野、常陸に移る
慶長四年（一五九九）武蔵国仙波無量寿寺（北院・喜多院）に住し豪海に師事、天海と改名。同八年下野宗光寺を復興
同一二年（一六〇七）施薬院宗伯の推挙を得て家康から比叡山探題奉行に任ぜられる。叡山の復興に尽力、同山南光坊に入る
同一三年（一六〇八）家康に招かれ駿府に赴く。翌年後陽成天皇に謁する
同一四年（一六〇九）智楽院院室の下賜、権僧正となる
同一六年（一六一一）後陽成上皇からは毘沙門堂門跡の室を預けられる
同一七年（一六一二）武蔵国仙波喜多院、天台宗関東の本山となる。川越へ移る
同一八年（一六一三）家康から日光山貫主に命ぜられ、元和七年（一六二一）同山本坊光明院を再興する
元和元年（一六一五）比叡山麓に滋賀院を創設する

寛永二年（一六二五）寛永寺が完成する。天海は八九歳を以って開祖となるが、家康の構想に従って幕府、徳川家の繁栄・安泰を祈願。門主には天皇家の皇子を迎え宮門跡寺院とすることを願うとされる。初代天海、二代公海（花山院忠長息・一六〇六―九五）、承応三年（一六四五）三代門主に後水尾院第三皇子守澄法親王（尊敬）が迎えられる。勅号を得て

明暦元年（一六五五）門主は輪王寺宮となるが、東叡山門主、日光山貫主、比叡山座主となり三山を統括、三山管領宮と称された。天台宗に限らず江戸期の宗教界に君臨する存在となるが、一年のうち寛永寺に九ヵ月、日光山に三ヵ月（正月・四月・九月の厄月各一ヵ月毎）、延暦寺には時に応じて五ヵ月余りを滞留した。比叡山の支配権を掌握、天台宗一門を統率するが、「座主」は貫主、住持・住職の意である。のちに各宗本山住持の敬称にも使われるが、平安期天長元年（八二四）、寺の私称として始まっており、最澄入寂後、修禅大師義真が初代座主に就任、二代は寂光大師円澄、三代慈覚大師円仁着任以来、太政官の任命する役職となる。中世には宮・摂家門跡の制度も整い、法親王らが就任するが、寛永寺建立後は後水尾院第三皇子尊敬法親王のちの守澄法親王（一七九代）が着任、同寺門主四代天真法親王・五代公辨（一八八代・一九〇代）・六代公寛（一九六代・一九九代）・七代公遵法親王（二〇三代・二〇六代）が任に当たる。

寛永寺は三代家光以来徳川将軍家の墓所となる。同寺及び家康廟安国院のある増上寺に葬られた将軍は以下の通りである。

寛永寺：三代家光（大猷院・一六〇四―五一）・四代家綱（厳有院・一六四一―八〇）・五代綱吉（常憲院・一六四六―一七〇九）・八代吉宗（有徳院一六八四―一七五一）・一〇代家治（浚明院・一七三七―八六）・一一代家斉（文恭院・一七七三―一八四一）・一三代家定（温恭院・一八二四―五八）以上七人。

増上寺：二代秀忠（台徳院・一五七九―一六三二）・六代家宣（文昭院・一六六二―一七一二）・七代家継（有章院・一七〇九―一六）・九代家重（惇信院・一七一一―六一）・一二代家慶（慎徳院・一七九三―一八五三）・一四代家茂（昭徳院・一八四六―六六）以上六人。

最後の将軍慶喜（一八三七―一九一三）は寛永寺谷中の墓地に埋葬。各寺には各々将軍生母・正室、関係する子女らの墓所がある。

寛永寺は幕府の官寺であった。将軍の御成もあり、葬儀、法要、命日の参詣ほか、門主・輪王寺宮には葬儀・法会の導師、戒師、その他の勤めが課せられたが、寺には役職があり、各々補佐が控えていた。学頭（宮に代わり一山を統括、法要・儀式・僧徒の指導に当たる）・執当（寺の諸実務を執り仕切る）・別当（霊廟・三内諸堂の管理などに当たる）目代（年貢・警護・警備などの雑務を担当）である。

輪王寺宮は寛永寺の門主、併せて宮家の当主でもあった。家臣には坊官・諸大夫がおり、僧俗両面から宮を支える家司である。宮個人の使者ともなり、公武の場にも関与するが、俗体、帯刀、剃髪して僧位をもつ者もあり、皇族、摂関家の事務を掌る。朝廷に仕えるところから天皇より官位が下される官人であり、位階は四位、五位から進む廷臣、官は「守・大輔」など格別の待遇であったとされる。解る範囲内であるが、初代守澄法親王には進藤長昌（二男長之は近衛家諸大夫）。二代天真法親王には芥川貺敏（古義堂『先游伝』）・薗田秀房。三代公辨法親王には薗田備前守秀延（秀房三男秀英）・矢田陪長門守好古（孟敏）・芥河時亨（元泰・貺敏子息）・水野子碩（敬雲・『先游伝』に慶雲とあるが）・進藤泰道（長昌長男・のちに近衛家家司）。四代公寛法親王には進藤周防守勝任・矢田陪豊前守好銑・水野惣兵衛。五代公遵法親王には進藤周防守勝任・矢田陪豊前守らの名が確認される。

院家は、仏事に関与し僧侶として宮に随う側近である。宮が個々の住職に与えることもあったという。

二、入谷村と乾山

（一）江戸

地形は気候の変動によって変化をする。海面が下がり陸地が生じ、川や谷、台地が造られる。江戸は下総台地に対しており、武蔵野台地、山の手台地、下町低地から成り立つという。武蔵国に属するが、「入江」の門戸」、「江戸」の地名は平安時代末期に遡る。在地領主に江戸郷を名字とした武将がおり、関係文書数通が伝世する。

江戸重継（生没年不詳）である。祖を桓武天皇曾孫高望王秩父流平氏とし、江戸に本拠地・居館を構えたとされる。子の重長（生没年不詳）は水上交通路、江戸湾・隅田川の水路を握るなどして経済力をつけ、治承四年（一一八〇）、重継とともに相模国豪族三浦氏と戦うが敗北。頼朝に屈し、やがて武蔵国指揮権留守所総検校職に補任されるが、応安元年（一三六八）一揆に敗れ、一五世紀頃には没落したとみられている。以後、江戸は扇谷上杉家の支配所となるが、長禄元年（康正三年・一四五七）、上杉家（持朝）の家宰であった太田道灌（資長・一四三二―八六）は享徳の乱（幕府・足利成氏・上杉氏の争乱）に備えて同地に江戸城を築城する。道灌没後は上杉朝良の居城となるが、桃山期大永四年（一五二四）、戦国大名後北条氏（北条早雲・伊勢氏）の支城となり、城代は遠山綱景。が、秀吉の小田原攻めに遭い敗北。天正一八年（一五九〇）八月朔日、徳川家康の移封となり、新たな江戸の歴史が幕を開ける。

江戸は、家康の入府した折、僅かな町家と農家の在する貧弱な土地であったという。周囲は湿地、原野、入江が入り込み、船の発着場はあったが、城館は板葺き・萱葺き、土間によって構成されるなど、子城・中城・外城の三重構造、城は門・橋を以って結ばれており、南に品川湊、さらに南方、鎌倉への水・陸路があったという（『江戸城静勝軒詩序并江亭記等写』）。

家康の事蹟、説話を伝える『岩淵夜話』（大道寺友山著・享保初年頃）は「東ノ方平地ノ分ハ爰モカシコモ汐入ニ茅原ニテ」と記しているが、三代将軍家光に至るまで浅草寺雷門より東叡山の峯までは葦が一面に茂る谷とされた。家康は池や沼、海岸を埋め立て、掘割を開削、川の流れを替えるなどして即刻土地の開発、治水工事に着手する。城や城下の整備も開始。時代とともに内郭の本丸・二の丸・三の丸・西の丸・北の丸・吹上など、外郭の武家地・寺社地・町人地などの配置も徐々に整えられるが、造成地の地割り、割り当ても始まり、沼地・田地であった寒村は、慶長期から寛永期（一五九六―一六四四）、のち二五〇年に渉る帝都の土台に変貌する。城の大増築、市街の整理・拡張など、侍屋敷、神社仏閣、町屋ほかの建設地へと姿を変えるが、それには莫大な建築資材・工材、人材の需要があった。

新都江戸は、城を軸として江戸内海（江戸湾）、及び隅田川を中心に展開される。海が迫り、辺りは沼地・湿地帯。物流には運河、造成地の乾燥や排水のため掘割を開削、飲料水（神田川など）には井戸、上水道を建設するが、江戸の発展、拡張には水路、水の便の確保は不可欠のことであった。城下には舟の出入りを可能とするべく日比谷入江を埋め立て道三堀を開削、江戸湾へと繋げ、隅田川では本所・深川から小名木川を通して房総へと結びつけるなど、資材・部材、米・塩・魚・野菜他の食

料輸送路を確保。城の周囲には外堀を繞らし、内濠・外濠を結び、内側に徳川家直属の家臣群団を住まわせるなど、着々と城と城下の建設が進められた。

慶長八年（一六〇三）家康は征夷大将軍に任ぜられる。天下に号令、「天下普請」の時代となるが、近世江戸の建設はこの期に始まり、諸大名は競って未整地造成に着手する。大名小路と称し武家地を設定、周囲には町人地を配し、日本橋川には橋を架けるなど、日本橋からは東海道・中山道が拓かれてゆく。江戸城の本丸普請も本格化（慶長一〇年）、寛永一四年（一六三七）には江戸の街づくりは一定の終わりをみるが、大名も一家二邸・三邸・四邸まで許されるなど、上屋敷と称する邸は主人の所居・江戸詰藩士の長屋を含み、中屋敷は上屋敷の補助、世子・隠居方の居処となるほか用途も雑多、下屋敷は修理・災難に際しての住まいとされた。府外には農地を買い取り抱屋敷を設けるなど、幕府同朋衆数寄屋坊主をはじめ、医師・絵師・能役者などにも土地が給された（『下谷区史』）。

状況が一変するのは明暦年間（一六五五―五八）のことである。町の六割を焼き尽くす大火が発生、都市の改造が余儀なくされる。復興は急務であり、且つ広範囲におよぶ移転が必要。選択は郊外となり、新たに本所・深川などの湿地の開発・造成が計られる。中級・下級幕臣らの武家屋敷、寺院などは強制的に同地へ移動、町人地も芝・赤坂・小石川・下谷・本所・深川へと広げられた。

（二）上野台地

台東区は、先史時代、海底、海水の押し寄せる処であったという。陸地化したのは旧石器時代のこととされ、縄文期には海が入り込む内海であったと伝承。貝塚の分布により武蔵野台地には大集落の存在が認められるが、活発な火山活動は火山灰を堆積させ、関東ローム層が築かれる。

「上野」はもと岬であったという（1001頁上段図参照）。台地には古墳群があり、埴輪なども発見されたが、国・郡・郷などの区分が生まれた律令時代、江戸は埼玉県・神奈川県の一部とともに武蔵国と称された。『望海毎談』（著者不明・元文から明和年間成稿）は江戸の古事・古跡を伝え、上野（「忍の岡」項）に関して以下のように記している。

> 一武蔵の國にて今の上野を忍の岡と云　湯島天神の臺を向ふの岡と云　谷中の方を入砂の岡と云　昔は芝浦の海の潮此所迄入來る入江の續にて　斯三ツの岡の打續を以て　谷中の岡に三崎と云地名有（略）

上野は忍の岡と呼ばれ、潮の打ち来る入江であった。名称は足利期永禄二年（一五五九）『小田原衆所領役帳』（北条氏康の家臣諸役・分限帳）に「上野内法林院分」とあり、『天正十九年の水帳』（一五九一・入谷村名主二葉傳次郎所持）にも「武州豊島郡上野郷」とある。足利期文明頃（一四六九―八七）には「忍岡」、永禄年間（一五五八―七〇）には「上野」と呼ばれ、徳川期以前の呼称であり、のちに山麓一帯の名称となる。町の起立は寛永寺建立時代に始まると伝承する。

（三）下谷低地

「下谷」は台地に対する低地の意である。台地は上野・高台にある平坦地、低地は下谷・上野から下へと続く低い土地をいうが、文書には「江戸廻り下谷菅野分」（『小田原衆所領役帳』）とあるなど、戦国時代からみら

れる地名であった（谷中・深川・本所・小石川・金杉・巣鴨・青山・麻布・四谷などを含む）。同地域からは石器・金属器、貝塚、縄文土器・弥生土器などが出土、『新編武蔵風土記稿』（文化七年から文政一一年・一八一〇―二八）には「下谷ハ古キ地名ナリ」、同書中『事蹟考』には「大猷院殿御代ノ後マテ　浅草寺雷神門ノ邊ヨリ東叡山ノ岸マテ　葦一面ニ茂リシ谷ニテ一目ニ見渡サレシトアリ」とあり、下谷の歴史の古いこと、家光時代は未だ一面に葦草の覆う見渡しの良い谷であったことが理解される。明暦の大火後、急速に拓けるが、南方には下級幕臣の家屋敷、北方には文人墨客の集う根岸村、寛永寺前方にはしだいに門前町が開かれてゆく。浅草寺門前には戦国時代以来の古い集落があったとされ、寺院、娯楽場所が混在、賑わいは今日の浅草寺界隈へと継続する。下谷一帯は農隙に土器を造る村であった（『新編武蔵風土記稿』）。半農半陶、隅田川の西岸川域（上野・浅草側）を中心に、土器・瓦・火鉢・植木鉢などが生産された。

当時、職人は紺屋・鍛冶屋・木具屋・畳屋・石屋・研屋・経師屋・髪結師などが代表である。正保（一六四四―四八）頃から寛永寺を中心に門前町が開かれ始め、下谷・谷中界隈には徐々に米穀・炭・味噌・油などの問屋、両替屋・飛脚屋・呉服屋、紺屋・鋳物屋・樽屋などの諸職商人・職人が住まいし、寛文年間（一六六一―七三）には寛永寺御用を勤めた菓子商猪左衛門（受領肥後）、豆腐屋平右衛門、麩屋清右衛門らの名が認められる（『下谷区史』）。延宝頃（一六七三―八一）には『江戸雀』（近行遠通著・延宝五年刊）に「かはらけ町」として麻布一帯、金杉新堀・三田台町・西の久保・四ッ辻（飯倉四ッ辻）などの名があり、麻布・四谷も下谷の内、現在の麻布台二丁目三番東側・四番、東麻布一、二丁目北部とされる。「土器坂」「土器町四辻」「土器町」などの名も残るが、元禄年間、土器に関しては井原西鶴（一六四二―九三）の『西鶴置土産』（元禄六年刊・一六九三）に浅草北の土人形師、『萬買物調方記』（元禄五年刊）には瓦師、土器師を分けて以下のように記されている。

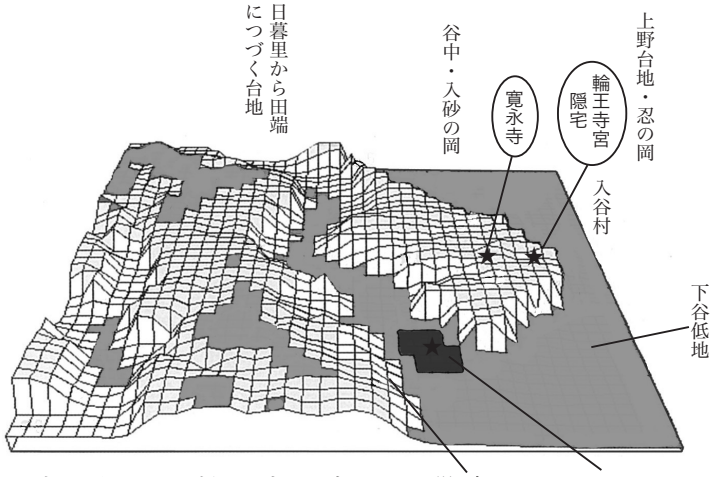
かはら師　浅草門跡前　同　せう天町のうしろ　同　はしば
かはらけ　あさくさ　竹丁　弥左衛門　同　西ノくぼかはらけ町

初期、大名屋敷は山の手周辺を占めていた。対して「下谷」は庶民の住む下町であり、地域は時代によって変化をするが、浅草・本所・上野周辺を本拠地として、南は神田川、北は坂本村、東は鳥越・浅草に接し、西は上野・湯島を限りとし、金杉・箕輪・南千住など台東区一帯が含まれた。元和五年（一六一九）、下谷村名主金子三郎兵衛・恩地惣兵衛が願書を提出、町屋が起こるが、商家の出現は遅く、当時商業は日本橋・京橋を中心に発達、問屋・仲買・小売りまでも同所に集中していた。街道の整備、駅路・飛脚の進歩も著しく、さらに物資の供給、物流には船便こそが不可欠であった。隅田川の沿岸は埋立られ、河岸・荷物の揚場、蔵、卸売りの施設などが設置される。塩・酒・油・野菜ほか、木材・石材、建築資材、多くの物品が運び込まれるが、当時、大坂・江戸間の定期貨物船には菱垣廻船（寛永元年始）、後に樽廻船（享保一五年始）があり、到着した荷は小舟に転積、河岸へと運搬、隅田川の両岸、蔵前・深川・両国などの揚場・倉庫に移された。

隅田川は荒川の支流である。古くは入間川・浅草川とも呼ばれており、北区岩淵辺りから分派して隅田川、浅草辺りで浅草川、駒形辺りで宮戸川、両国では大川とも称される。絵図によれば、京都が碁盤の目のよう

上野台地と下谷低地：地形様式図

都立上野高等学校遺跡調査会編『東叡山寛永寺護国院』一九八八年参照作成



上野・高台から続く低地。三代将軍家光時代は未だ蘆草の一面に覆う谷であったという。

上野台地の谷底に生じた池とされる。

上野台地は、もと岬。室町時代にはその名称があり、歴史は石器・弥生・古墳時代に遡る。

下谷低地は、室町期永禄頃の記録に残り、上野に対して生まれた名とされる。寒村であったが、江戸期慶長から寛永年間（一五九六―一六四四）に武家屋敷と寺院が大半を占める地域となる。

に整備されたことに比し、江戸は江戸城を中心に円形に広がり、内濠・外濠、運河、上水道、不完全ながら下水道（火消人足分担）、自然の河川も加わるが、水路が重要な役割を果たしていた。上水道には神田・玉川・千川があり、廃止されたが青山・亀有・三田などの六派が開削されたと伝えられる。

―入谷村―

入谷村は下谷北部に位置している。御府内（品川・四谷・板橋・千住域内）の外にあり、豊島郡坂本村内に置かれた村であった。周辺は沼地であり、発展の最も遅れた地域とされるが、入谷村の名主には二葉伝次郎・五左衛門の名が残る。二葉家先祖伝次郎は『天正十九年の水帳』の所持者であった。かつては寛永寺本坊辺りの住人であり、寺の建立に伴い土地は御用地として召し上げられ、坂本村へと転居の由、村名入谷村をそのまま用いたものと伝承する。入谷は下谷の中の村であるが、坂本村は古くは廣澤村と呼ばれており、水田地。寛永期になり寺院建立に伴って拓かれたが、坂本町から浅草までの間、入谷村は元入谷・中入谷・南入谷と拡張され、乾山時代には周囲に日光抱屋敷があるなど、界隈には庚申塚、浄土宗泰寿院・英信寺・良感寺、天台宗嶺照院、曹洞宗正覚寺などが建てられていた。入谷村は江戸末期まで入谷田圃と呼ばれていた。

三、今戸焼と入谷窯

（一）江戸期の産業

家康は、信長、秀吉らとともに戦国時代を生き抜いた。秀吉没して全国統一を完遂するが、基本的には戦国大名の一人であり、政策なども多

くそれらを継承。将軍と大名による国家統治の機構を整える。

江戸の町は、地方の大名とその家族、関係する人々の集合体であった。東西南北、日本各地から地方人が集まり、全国見本市の如き様相を呈したというが、衣食住、あらゆる面において大消費地として発展する。

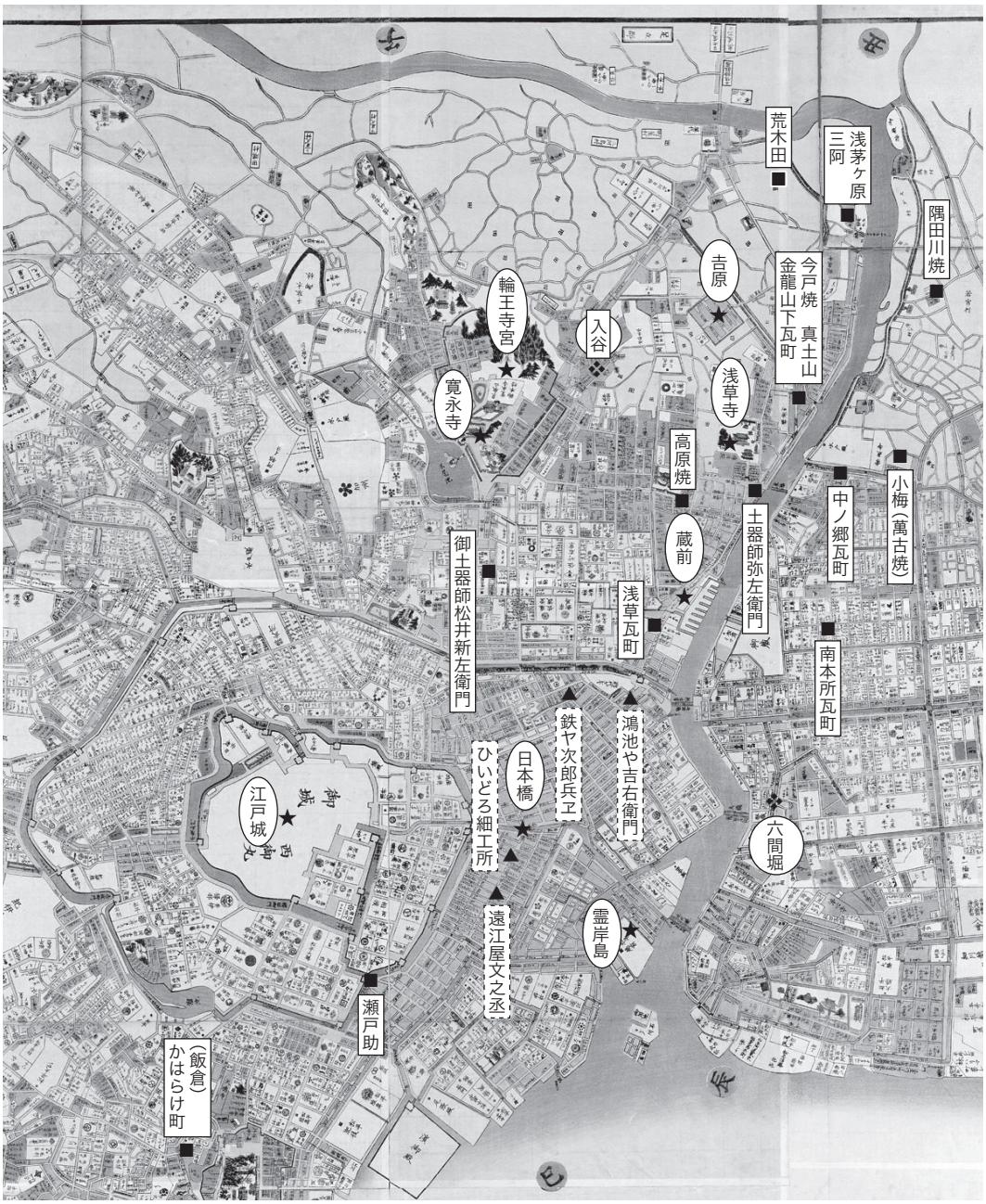
「衣」は、衣類から夜具に至るまで、支配者階級・庶民階級の需要に応える。織物、染物、全国各地に絹・木綿・麻織物が出廻るが、絹織物は京都西陣、九州博多が主産地であり、二本の糸を撚り合わせる撚糸から各地には縮緬生産が始まってゆく。大衆の衣料品は綿織物である。綿作が起こり、摘み取り、繰綿、紡績まで家内工業が主体となるが、手織りの竪機・居座機から絹織物には高機を導入、西陣の技術が地方へと伝播する。糸染め・布染め、染色技術の進歩もあり、農閑期の家内労働は専業の生産者の手へと移る。

「食」は、公家の饗応、禅院の精進料理・食作法を融合した本膳料理は会席料理へと移行。室町末から桃山期、茶事が盛行、懐石料理が新たに始まる。酒宴を切り捨て簡素を旨とし、膳は一膳、飯と汁、菜は二、三菜とした形式が定着。江戸期には宴会・寄り合いに合わせ懐石は会席・宴席へと転ずるが、流通機構、都市の発展もあり食生活も変化をする。労働力を必要とした明暦大火後には出店が流行り、災害の起こる度ごと煮しめ・煮豆・おでんなどの煮売り・飯売り・田楽豆腐売りが町を往来。飢饉のたびに新たな食物屋が出現した。自由な町人が中心であり、茶屋・料理屋・居酒屋など大衆的な商売が発達する。

「住」は、安定した時代を迎えて建築需要が急増する。侍屋敷、寺社建築、経済力をつけた町人らの町屋敷・別業・蔵・店舗、また長屋・見世物小屋、遊里・料亭など様々な建築が求められたが、幕府創設当初から設けられた普請奉行、寛永九年（一六三二）に常設された作事奉行が任に当たる。普請奉行は橋・石垣などの土木を担当、作事奉行は建築部門、後に破損・修繕を担当する小普請奉行も加えられたが、作事奉行の支配下には大工頭・作事下奉行・被官・畳奉行・勘定役などがあり、享保三年以後、工事造作を担当する手大工（町大工）なども加えられる。大雑把には作事奉行のもとに起案、勘定方が吟味し、工事費を支払う仕組みであるが、大工頭は技術官僚の最高位に位置していた。世襲制、筆頭は中井家であり、中井正清（一五六五―一六一九）は官位大和守・従五位下、知行一〇〇〇石、畿内・近江を支配し、京都大工棟梁として御所造営・修理などに携わる。関ヶ原の戦の後は家康に仕え、二条城・江戸城ほか、徳川家御大工として多くの建築を担当、工事関係の責任を負うが、工事監督・資材調達は作事下奉行、被官は工事設計・職人の監督。設計・図面作成・細工は大棟梁、手大工（町大工も加わる）らの管轄であった。大量の需要に応えるべく、資材・部材は規格化へと進み、土地の条件もあるが、建築形式も一定化。基本を柱の大きさにおき、指矩を用いて用材に墨付する「木割」「規矩術」が発達する。戦国時代に陣中の使役であった黒鍬者も土木下役に置かれるなど、除草・清掃・荷役などの作業に割り当てられた。江戸期には江戸城の清掃・防火・荷役運搬などを担当。

（二）隅田川流域の窯業

江戸在地の窯業は、基本的に家康の入府とともに開始される。建築に伴い瓦造りを第一に、初期においては陶磁器製作の窯はみられない。大



文久改正御江戸大絵図

文久元年刊（一八六一）
カリフォルニア大学バークレー校図書館所蔵図参照作成

❖乾山関係：
入谷・六軒堀

■やきもの関係：
荒木田・浅茅が原・隅田川焼・今戸焼・金龍山下瓦町・小梅萬古焼・中ノ郷瓦町・南本所瓦町・土器師弥左衛門・御土器師松井新左衛門・高原焼・浅草瓦町・飯倉かはらけ町・瀬戸助

▲絵具・材料店：
鴻池や吉右衛門・鉄ヤ次郎兵ヱ・ひいどろ細工所・遠江屋文之丞

★地名・寺名：
江戸城・寛永寺・輪王寺宮隠居所・吉原・浅草寺・蔵前・日本橋・霊岸島

江戸は、江戸城を中心に発展。陸路・海路を軸として武家屋敷、寺院・神社、やがて町家が起立。浅草寺周辺には、やきもの造り、また娯楽機関が発達する。

商業は隅田川を基盤に、日本橋・京橋・霊岸島など、絵画・やきもの造りの材料店が軒を連ねる。大坂からの船便が発着、便宜が計られていた。

規模な江戸城造営、大名屋敷、神社・仏閣、町家造りなど、瓦は屋根瓦、地下貯蔵施設・穴蔵などに大量生産が求められた。

平成一四年、大坂城の発掘調査が行われた。三の丸外側・惣構堀の内側に豊臣時代の瓦窯を発見。形態は中央に燃焼室、窯両側に焚き口のある達磨窯であったが、小判形、瓢箪形の二形があり、生産には大坂城築城に当たり瓦師として活躍した寺島家の可能性が指摘された。寺島家は紀州粉河の出自、天文年間（一五三二―五五）に三郎右衛門が大坂において瓦造りを生業とした。落城した大坂城はのち家康（大名方）が修復。その折担当した瓦師も寺島家であるが、二代惣左衛門はやがて徳川幕府御用達となり瓦屋町に屋敷を拝領、初期江戸城の瓦は専ら寺島家を中心に、大坂産の瓦が納入される。三代宗左衛門の代に大坂・京都・江戸の三家に分派、二男三郎兵衛が江戸へと移るが、安永三年（一七七四）『大名武鑑』には「御瓦師本所よこ川丁寺島宗次郎」とある。一方、土器師には「御土器師十五俵二人ふち下谷坂本入谷松井新左衛門」の名も残り、松井家は天正年間（一五七三―九二）岡崎城主であった家康に従い松井弥右衛門が入府した。『増訂武江年表』（正保二年―四年）には「寺嶋氏某、中氏彦六といふもの、江戸瓦師の元祖といふ」とあるが、さらに彦六なる瓦師の存在もあるなど、各々それらの集団が江戸住となり、やがて関東に窯業の根付く土台となってゆく。瓦産地は江戸城東隅田川沿岸を中心に、多摩地域、埼玉地域からも遺物が出土、搬入された瓦に加え、江戸在地製の瓦が混じる。元和二年（一六一六）二代将軍秀忠は江戸城増築、水害防備のため平川（神田川）の流れを変える。川岸北部には新たに浅草平右衛門、瓦町などが作られたとされ、明暦大火後貞享年間（一六八四―八八）には瓦師は隅田川沿岸地域に集約されるが、防火、土の獲得、運搬などの地の利に従い、浅草、今戸周辺に瓦・土器・陶器造りが本格化する。

1、浅草瓦・土器造り

元和二年、秀忠による町作りに従い浅草に瓦造り・瓦町が成立する（『御府内備考』）。浅草瓦の生産地として最も古い記録であるが、金龍（竜）山下にも瓦町が起こり、金龍山下瓦町も活動する。

瓦造りは大量生産である。大規模経営が基本となり、建築上の需要に伴い発展するが、古代中国堯・舜時代に始まると伝承。日本へは朝鮮国百済から渡来。が、飛鳥寺・法隆寺など神社仏閣、宮殿、城郭ほか、大規模建築に限られており、平安期には貴族の邸宅などにも使われたが、瓦を敷き詰める瓦葺は、平瓦に丸瓦、軒瓦を併せて使用、かなりの重量が土台に掛かる。耐え得る支柱・基盤が必要であり、堅牢な建物でなければ適わなかったことが理由である。安易に一般化するには至らなかったが、信長時代、畿内において瓦師を養成、明人の指導によって燻し瓦も造られたという。瓦生産は、江戸では一つに都市建設の進む初期、二つに明暦大火後の大移動期、三つに享保時代吉宗による防火対策などを節目として変動する。

①　家康時代：大坂城の復元及び江戸城普請に尽力した摂津国天王寺住の御瓦師寺島家。家康に従い三河より下向した「三州瓦」の松井家の活躍がある。一部を除き瓦御用は専ら大坂において製造、舟を以って江戸へ運ぶなどの手法が取られていたが、時とともに工人らは江戸に土

着、やがて江武のやきもの産業を支える基盤となる。

②　明暦三年（一六五七）：本郷丸山本妙寺から出火した火は江戸城本丸・二の丸・三の丸・天守閣、また市中の大半を焼き尽くした。新たな町作りが必須となり、大名・旗本屋敷、神社、町家、吉原、火を扱う土器師などが大移動を促される。建築資材・部材の需要は一期に高まり、復興には二年余の歳月が費やされたが、市中の六割強は武家屋敷であった。

③　享保時代：大名火消に加え、自衛のための町火消制度が発足する。建築資材、屋根葺きにも燃え易い木材・柿葺に代わり瓦葺が奨励されるが、瓦葺は従来平瓦と丸瓦、軒先に軒丸瓦と軒平瓦、鬼瓦が使われる。が、享保期になり重量のある瓦葺に代わり防火対策もあり新たに桟瓦の使用が促される。桟瓦は延宝二年（一六七四）近江の瓦師西村半兵衛の工夫と伝承。平瓦と丸瓦を一体化、左右の一方に桟をつけ、表面をうねらせて重ね合わせることを可能にしたが、三都を中心に広く普及。江戸では町人にも拝借金制度が運用され、市街化する都市計画に合わせ、桟瓦の需要は急速に高まってゆく。瓦生産は活気を呈する。が、火を扱う仕事である。しだいに市外地への移動を余儀なくされ、土は浅草待乳山（真土山）、運搬は隅田川、窯地は浅草界隈へと、隅田川沿岸に集中する。新たに開く、合併する、いずれにしても窯業は隅田川を中心に発展。元和二年（一六一六）、浅草瓦町が起立、「瓦焼職有之候」（『御府内備考』）とあり、年代は不明であるが「あさくさまつち山此所にて金龍山茶碗やくなり」（『買物調方三合集覧』元禄五年刊・一六九二）とあるなど、金龍山下瓦町が活動。安永年間（一七七二―八一）の記録には以下のようにある。

待乳山　聖天宮、見晴しの能き所也。景地。涼しさや船を見おろす待乳山
金龍山　浅草寺観音、三月簑市、十二月年の市、歯朶掃いて居わる並木の煮賣廊
力出せ年の市人仁王門　（『江都近在所名集』安永三年刊・一七七四）

在地瓦は浅草瓦町、金龍山下瓦町（起立年不明）の活動が早く（落合則子著「江戸今戸焼史に関する一試論」）、浅草瓦町は豊島郡峡田領のち浅草寺領鳥越村、今日の蔵前辺りとされ、現在の浅草橋一、二丁目、柳橋二丁目に当たるという。金龍山下瓦町は浅草北部、隅田川沿い待乳山・真土山の丘陵地域とされ、聖天宮（金龍山本龍院）、現浅草七丁目を生産地とし、元禄初期の製造が確認される。新たに中ノ郷瓦町、小梅瓦町なども起こるが、江戸の土器産業は浅草一帯に始まり、元禄五年には「かはら師浅草門跡前」「かはらけあさくさ竹町」（『諸国（萬）買物調方記』『買物調方三合集覧』）など、瓦師、土器師は別れて生産に当たったことが推測される。

2、今戸焼

「今戸ハ古へ今津ト書シ後今ノ字ニ改ム」とある（『新編武蔵風土記稿』）。正保、元禄頃に今戸村とあり、土器産業の盛んな土地であったと記されている。

土器は素焼、釉薬のない低火度焼成のやきものである。縄文から弥生時代に煮炊き・貯蔵用、神饌を盛る器・食器などが造られ、朝鮮から須恵器の技術が伝播し、高坏・瓶・壷、祭祀具・日常飲食器・灯明具などの硬質土器が生産された。一二世紀には瓦造りと分化し、土師器窯に土器生産が盛んになるが、一四世紀、日本各地へと拡散する。山城国深草・嵯峨・幡枝辺りに土器師集団が居住、朝廷、幕府、神社仏閣の需要

浅草周辺の土器・瓦生産　出版物を中心として

一、浅草周辺

―瓦―

①元和二年（一六一六）『御府内備考』（文政八年・焼失した「御府内風土記」編集に備えた史料）：
浅草瓦町起立（浅草蔵前地域）「瓦焼職人有之候に付名付申候由」云々

②寛永一七年（一六四〇）『徳川実記』・『寛永日記』：
「寛永一七年三月二日浅草瓦□屋敷より火起り」「浅草瓦屋敷より出火」

③元禄二年刊（一六八九）『角田川紀行』（『隅田河紀行』）：
「あさくさ川にのほしけるに岸ちかく舟とめて色黒き男腰たけ川に入うつふけになりて水底の土を抱あけ舟に積　世のわさといひなから秋の風身にしむ比水にひたりくるしむあはれなりけれは　土とりよなにほと冷る秋の水」「瓦焼けふりは霧にましるかな　滄波」「今戸には土をこね　瓦造並べてほしければ　やかぬまは露やいとはん下瓦　杉風」「尚　今戸以外に箕輪附近でも土焼のものを捧へた」以下『続江戸砂子』の箕輪土器の事項がつづく。

④成立年代不明『御府内備考』：
金龍山下瓦町成立「往古当所は瓦焼候場所にて町名に相成候由」

⑤元禄五年刊（一六九二）『諸国（萬）買物調方記』：
「かはら師浅草門跡前」

―土器・陶器―

①承応二年（一六五三）『御府内備考』（文政一二年成立・一八二九）：
承応二年　摂津国茶碗師高原平兵衛　江戸下向　屋敷を拝領　窯を開く

②延宝五年刊（一六七七）『江戸雀』：
「前の通廣小路より右之道金輪寺につづきて町　高原やき物有　左も同町」

③元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』：
「諸職名匠諸商人　土器師　浅草竹町　彌左衛門」「土人形問屋　浅草かや町一丁目　ひなや七兵衛」「江府外町一　浅草橋通　南は浅草はしより北へ追分まで　此町筋諸職賣物土人形類　瓦屋」「瀬戸物や　一　靈巖島　常盤橋前　御成橋前　浅草まつち山此所にて金龍山茶碗焼くなり　かやば町」

④元禄三年刊（一六九〇）『人倫訓蒙図彙』：
「土器師　昔賀陽親王作り始め給ふとかや　此の御子細工に妙まるよし古物語に記せり都は嵯峨　簇枝深草里に作る。大内に捧ぐる時は　烏帽子装束して参るなり　江戸浅草竹町作手弥左衛門　誠に上古よりの器物なり」（同書には土器師と焼物師の別がある）

⑤元禄九年刊（一六九六）『本朝武林系禄図鑑』：
「御茶わん師　あさ草門跡まへ　高原平兵衛」

⑥享保二〇年刊（一七三五）『続江戸砂子温故名跡志』：
「藤四郎焼　茶碗水さしの類　浅草聖天丁　高原藤四郎」「瀬戸助焼　茶碗水さしの類　すきやかし　瀬戸助」

二、今戸周辺

―瓦―

①元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』：
「今戸橋　暁かたにハ瓦焼の松葉の匂ひに目さむるやうにおぼへて少しはや」云々

②享保一七年刊（一七三二）『江戸砂子温故名跡志』：
「今土橋　此片瓦作多し」

③享保二〇年刊『続江戸砂子温故名跡志』：
「今戸瓦　今戸　橋場　本所　中ノ郷瓦師多し」「箕輪土器　下谷　坂本　箕輪　金杉邊にて製之　土火鉢　瓦燈　土風呂　土燈籠等の土焼ものいづる　京都稲荷前がごとし」

―土器（土器・人形に施釉したものを含む）―

①天正年間（一五七三―九二）『工芸志料』（黒川真頼著・明治一〇年刊）：
「下総国千葉家の族某（略）、其の家臣数輩　石浜或いは今戸村に土着し　瓦及び土器を造り以って業と為す者十余戸ありしと　而れども其の姓名詳かなず」

②貞享年間（一六八四―八八）『工芸志料』：
「貞享年間　土器の工人白井半七と云う者あり　今戸にいて始めて点茶家に用いる所の土風呂を製し　又火鉢等の種々の瓦器を造る」

③元禄六年刊（一六九三）『西鶴置土産』：
「思はせ姿　今は土人形　揚屋町の眞砂を　金龍山の眞土に交ぜて　今は薄雲　高尾が姿を造りて　土人形の水あそび」（今戸周辺一文人形を商う店があったという）

④享保年間（一七一六―三六）『工芸志料』：
「享保年間二世白井半七という者　始めて瓦器に釉水を施し楽焼と等しき者を製す」

⑤宝暦二年（一七五二）：
狛犬一対台座銘文「火鉢屋　土器屋　炮燧屋」今戸神社

⑥宝暦一三年刊（一七六三）『風流志道軒伝』：
「今浅草の志道軒　江戸に一人の名物といふべし　故に一枚絵、今戸焼を始とし」

⑦寛政一二年刊（一八〇〇）『風俗通』：
「ちゃうど今戸焼のあねさまといふつらだは」

⑧天保五年―七年刊（一八三四―三六）『江戸名所図絵』：
「瓦師　中之郷の辺　瓦師の家多く　是を業とするもの多し」「今戸には甄（瓦）者陶匠多くありて・今戸焼と稱す」

⑨『川柳江戸砂子』（明治五年刊・一八七二）「今土橋　金龍山のふもと入堀にわたす　此邊瓦工多し」

⑩成立年代不明『本窯薬焼唐物薬秘方全』：
「今戸すへ物土・今戸土器師一瓶」

三、その他

①延宝五年刊（一六七七）『江戸雀』：
「左金杉新堀かはらけ町三田臺町へ出る　右西の久保への道」「南へ付てゆく道かはらけ町」

②元禄三年刊『増補江戸惣鹿子名所大全』：
「西久保通北は天徳寺前より南へ本札辻まで　西久保

かわらけ町貳丁 赤羽 三田町 通新町」

③元禄五年刊（一六九二）『萬買物調方記』：

「かはらけ 西ノ久保かはらけ町」

関係事項

①『増補江戸惣鹿子名所大全』（元禄三年刊・一六九〇）：

「繪具屋　南傳馬町一丁目　稲野　信濃」「京橋北一丁目　繪具屋惣兵衛」「同所　ゑのぐや市兵衛」「唐物屋　靈巖島長崎町　大平五兵衛」「同所　海老庄兵衛」「同所　片岡與兵衛」

②『彩画職人部類』（明和七年刊・一七七〇）：

「土器　洛の東山深艸の里に多く是を業となす者居れり　最上品とす　東都は箕輪金杉のわびしさ　土の轆轤の音かすかにさすがに陶作りといふほどにもあらで　あるほどの日南に並べ在り　うら〳〵と陽炎もゆる雨上がりの朝景色　鶯の声　なよ竹のまばら垣に　そこ爰鄙びたる住居こそ何とやら哀れ深し」

③『今様職人尽歌合』（文政一八年刊・一八二五）：

「此の頃は素人の樂焼がはやりて　誂へなき　焼き継ぎは　窯塞げにてうるさや」

④『武蔵』日本国誌資料叢書（太田亮著・大正一四年刊・一九二五）：

「藤四郎焼　茶碗水さしの類　浅草聖天町　高原藤四郎」「瀬戸助焼　茶碗水さしの類　すきやがし　瀬戸助花林尺八一流の細工古今類なし両國元町花林清兵衛」

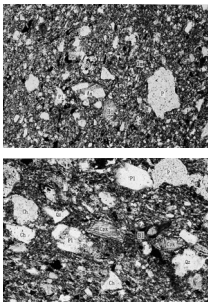
⑤『江都近在所名集』（安永三年刊・一七七四）：

「小梅　竹やのわたしより三めぐりの間　蚊柱の中に小梅の涼臺」「待乳山　聖天宮、見晴しの能き所也　景地　涼しさや船を見おろす待乳山　意和久」「橋場　神明宮　今戸の續き　近所北野天神勸請　傾城も交る橋場の生姜市」「浅茅原　總泉寺境内、三谷より橋場へ出づるところ昔しは繁花。傾城の夢は浅茅を駆けまはる」「箕輪　吉原の別荘多し　句體により戀也　梅が香や雪の箕輪に女駕　機夕」「金杉　箕輪の續き　日本橋より千住へ出づる所　奥州海道也」「上野　東叡山寛永寺　元三大師　三日　十八ひ参詣多し　戸の建たぬ駕に吾妻の比叡おろし」

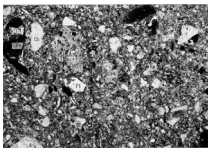
江戸在地系土器：（江戸遺跡発掘調査報告書所収）

カワラケ　ホウロク　風炉

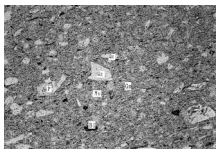
江戸在地系・栃木越名河岸出土陶片（116頁参照）胎土薄片顕微鏡写真



江戸在地系出土陶片



栃木越名河岸出土陶片



京都鳴滝窯出土陶片
胎土薄片顕微鏡写真

これらは関東、江戸在地系土器、越名河岸出土陶片の胎土薄片顕微鏡写真である。江戸在地系・越名系粘土は火山系岩片の特徴を示し、砂質。関東ローム層に関係するなど、隅田川水系の河川粘土と考えられる。

参考として京都乾山焼鳴滝窯出土陶片の分析を試みた。粘土の特質は京都市近郊、京都盆地西縁・北縁の地質に整合。江戸在地系粘土とは異なる特徴が認められる。

土器は、縄文式土器・弥生式土器・土師器（古墳時代）、黒色土器（奈良・平安期）・瓦器（平安後期・室町期）など、日本では時代を追って儀式、実用器ほかが造られた。手捏ね、ロクロ成形。基本的には採取した土をそのまま使用、やがて砂・岩石の粉末などを混入、技術・焼成の進歩に伴って変化が生まれる。

瓦は屋根瓦を主体に敷瓦・塀など、百済の瓦博士の指導に始まるという。地域、時代によっても異なるが、江戸においては家康の入部に関係。江戸城、大名屋敷、寺社、町家の建設など、瓦は大坂からの搬入を第一として、在地、大名家国元からの移入もあるなど、文様、刻印ほかに特色をもつ瓦が出土した。

土器類も京都・金沢・伊勢・利根川流域などの移入品が出土。それら他国産土器に対し、江戸には在地系土器と呼ばれる一群があった。市中の需要、消費に応え、周辺で生産された土器であるが、隅田川西岸地域を中心に、しだいに東岸地域へと移動。瓦・土器・焙烙・灯明具・人形・植木鉢などが造られた（上図参照）。文化・文政期、『江戸名所図絵』には今戸焼の瓦焼成・達磨窯、土器を焼く煙管窯が描かれたが、達磨窯は左右に焚き口があり、還元焔焼成、多くは瓦の焼成に使用。いくらか小さな煙管窯は焚き口が一つ、酸化焔焼成、土器の生産に用いられた。

粘土の分析は、元素成分の考察では（東京都埋蔵文化財研究所）、瀬戸・美濃・京都系に比較、江戸在地系土器の胎土は二酸化珪素、酸化アルミニウムの含有量の少ないこと、鉱物片・岩片の顕微鏡観察からは（パリノサーヴェイ考古学研究室・ウィルソン）、江戸在地系・越名河岸系胎土には火山岩石が多く含まれる特徴が示された。参考として京都鳴滝窯出土の乾山焼陶片も分析したが、鳴滝陶片は長石・石英・雲母を多く含み、西日本における花崗岩帯の特質を示す。火山岩石の多い江戸系粘土とは明らかに異なる。

に応えるが、東海地方では須恵器を製した窯に近畿産出の土器造りの模倣が興る。家康の入府以来、江戸には大名・家臣、それに伴う商人・職人らが集住。土器は需要に伴って京都・金沢・南伊勢・利根川流域などからも搬入されるが（梶原勝）、在地では初期、必要に応じ所々において焼成。明暦大火もあり中期以降、防火対策の一つとして隅田川沿岸に集中する。

同沿岸の窯業「土器」には三つの意味が含まれる。土器造り（日常品）、瓦造り（建築用材）、陶器造り（茶道具など）である。土器関係は大きく浅草周辺、今戸村に分けられ、陶器は摂津国・大坂から江戸へ下向、浅草本願寺辺りに屋敷を拝領し幕府の御用を勤めた高原焼が挙げられる。高原焼は天明六年（一七八六）水害が起こり窯を閉じ、宝暦年間（一七五一―六四）向島小梅に沼波弄山が萬古焼を開始、寛政期（一七八九―一八〇一）浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、文政三年（一八二〇）向島に佐原菊塢のすみだ川焼、天保一〇年（一八三九）大坂十三からは吉向治兵衛（一七八四―一八六一）が下向、吉向焼が陶炎を上げる。

今戸における瓦・土器生産は、天正年間千葉氏家臣を創者とする。が、実態は不明であり（『工芸志料』）、今戸焼の名称も元禄期にはいまだみられず、初期においては浅草瓦造りの範疇に入る。

近年二〇ヵ所に及ぶ今戸焼の発掘調査が行われた。土器・焙烙・瓦などが出土（〓頁図参照）。寛延・宝暦頃から植木鉢・焼塩壷・灯火具が多くみられるが、硬質瓦質の火鉢・焜炉、今戸神社に奉納された宝暦二年（文政五年再興）の狛犬台座（阿型・吽型）銘文には「火鉢屋・土器屋・炮燵屋」「白井善次郎・岩本多郎吉・永嶋伊之吉」「浅草新堀」などとあり（関口広次著「隅田川沿岸の窯業」）、今戸及びその周辺の生産者、生産品目が確認される。

『角田川紀行』（杉山山風著・元禄二年刊・一六八九）には、

あさくさ川にのほしけるに岸ちかく舟とめて色黒き男腰たけ川に入うつふけになりて水底の土を抱あけ舟に積　世のわさといひなから秋の風身にしむ
比水にひたりくるしむあはれなりけれは　土とりよなにほと冷る秋の水
今戸には土をこね瓦造並べてほしければ　やかぬまは露やいとはん下瓦　杉風

とある。陶工・人夫が腰まで水に浸かり隅田川の土を採取、それを用いて瓦を製したことが窺われるが、今戸村では天正年間（一五七三―九二）瓦・土器生産を業とした十余戸の存在があり（『工芸志料』）、貞享年間（一六八四―八八）には白井半七（生没年不詳）が土風炉を製し、享保年間（一七一六―三六）二世半七が楽焼を始め、工人らがそれを倣い食器を製するという。都市の拡張に伴って需要も増加。土器・焙烙・瓦造り、一八世紀後半には土人形が人気を集めるが、器種別の専業化が進行、窯場は今戸村、中ノ郷瓦町へと集約される。

二〇一〇年、入谷遺跡の調査結果が報告された。入谷焼の胎土分析は今戸焼にほぼ同一（小俣悟著「第4章総括」『入谷遺跡下谷二丁目1番地点』）、粘土は亀戸辺の荒木田土（『下谷区史』）、浅草付近の七つの丘中待乳山（真土山）土などの説があり、荒木田とは三河島村の字、荒川に沿う荒木田原に産する赤色粘土。粘着力があり、壁塗り、瓦葺きの下地に用いたと伝承する（のちには煉瓦の原料になる）。待乳山は「真土山」、真の土・本物の土を意味するとされ、瓦生産には隅田村・木下村・四ッ木村・若宮村の粘土が使われたという。明治期、人形造り尾張春吉の話によれば、同

一五年頃今戸橋付近の粘土は涸渇、川向かいの隅田村辺の土、金町、柴又辺り、古くは岐阜多治見の土の使用もあったとされる（安芸毬子著「掘り出された土人形」）。

土器造りは皿・鉢・壷、また焙烙・植木鉢・塩壷などを主とし、個人経営、在地における製作が基本である。他所から運び込まれたものもあるが、土器は消耗品、多用されることもあり、地域粘土の使用が一般である。厳しい土の選択はなく、江戸では家康の入府を契機として同地に発展、中世近畿土器の伝統を継承したものではないとされている。神供具・日常品が主体であり、成形は手捏ね・ロクロ・型の使用、焼成は低温による酸化焔焼成を基本とし、短時間で焼き上がる小規模窯、焚き口一つの煙管窯が使われた。持ち運びのできる内窯も使用されたが、瓦生産には還元焔焼成、窯の両側に焚き口を設けた達磨窯が用いられた。

3、高原焼

土器・瓦造りの一方、浅草では陶器造りが開始された。

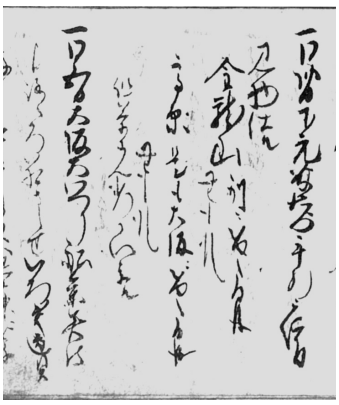
藩御用、陶工の移動は、寛永中頃（一六三四―三八）尾張徳川家に仕え、御深井焼に関与した陳元贇（生没年不詳・元和七年頃渡来）、福岡藩黒田氏関わりの高取家が早い例である。幕府御用の高原焼には諸説があるが、

① 創始者は肥後国山本郡高原郷出自の高原平兵衛（のちに藤兵衛『武鑑』）。肥前三川内窯の陶工、大坂・摂津国に赴き高原五郎七の弟子となり、五郎七没後高原を名のる

② 同じく高原郷出自の藤兵衛（茶碗商人高原伊十郎先祖）、慶長末期に摂津能勢において高原焼を創始。承応二年（一六五三）、普請奉行・四代将軍家綱茶道師範片桐石州（貞昌・一六〇八―七三）の推挙によって江戸へ下向（『工芸鏡』）。浅草本願寺辺りに七七四坪余の屋敷を拝領、領内二間半×五間半に窯を築き、御本・呉器・半使などの高麗茶碗を製し、幕府の御用を勤める

③ 慶安年間（一六四八―五二）、高原市左衛門が摂津国末吉橋辺りで作陶。二代平三郎が承応年間（一六五二―五五）江戸へ下り、二年後には摂津に戻るが、招請によって市左衛門が江戸へ下り、御茶碗師を勤めるなどとある。判然としないが、久右衛門・五郎七・市左衛門など陶工名も残り（大橋康二著「高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼、そして本遺跡出土の主要な陶磁器」）、茶会における使用は『隔蓂記』『三菩提院御記』に茶碗・香炉・皿など、『森田久右衛門江戸日記』（左図参照）には延宝六年（一六七八）一〇月四日、金龍山窯とともに高原窯の見物記が認められる。

『江戸雀』（近行遠通著・延宝五年刊・一六七七）は「浅草廣小路より右之



金龍山・高原焼見物記
『森田久右衛門江戸日記』丸山和夫著『東洋陶磁』第五号（一九七五―一九七八）

（延宝六　十月四日）
一　同四日下元藤右衛門手引
被仰付見物仕ル
金龍山　別ニ替たる儀
無御座候
高原　是も大坂ニ替た
る儀無御座候
但茶わん弐つかい参ル

道金輪寺につづきて町、高原やき物有」と記し、浅草広小路周辺に屋敷のあったことを伝えるが、天明六年（一七八六）水害に遭遇、窯は破却し、摂津国へ帰国したと記している。高原町、高原屋敷として知られ、現在の台東区寿二丁目辺りと推測されている。

貞享から享保・元文年間、隅田川を挟み寛永寺・浅草側に今戸焼（今戸村）、高原焼（浅草広小路辺）、乾山焼（入谷村）。のち川向こうに小梅村の萬古焼（宝暦年間）、寛政期（一七八九―一八〇一）浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、文化文政期（一八〇四―三〇）に向島百花園に隅田川焼が起る。

元禄期、将軍綱吉は御庭焼を試みた。瀬戸の陶工を招き城内吹上苑に窯を築いたとされるが、時移り、武家、富裕町人を中心として、江戸では即興を妙趣として席画、席焼などが流行する。職人仕事に数寄者・文人らの趣味・趣向が入り込むが、やきものでは絵付・釉薬掛け、窯入れから火加減、窯出しなども体験できる。経済力を手にした町人らは自らの知識を顕示、折からはやりの庭焼・席焼、翫事がその後押しをするが、楽焼は慰焼と『百工秘術』にある。秘技・秘伝、陶技・陶法、その他の蘊蓄披露も始まるが、大衆文化の交流も盛んな折柄、材料屋、絵具屋なども活躍、書・画・陶、各々に素材や用材、手本を揃えて店頭に並べる。親方の傍にあり修業を積む必要もなく、即席に作者・製作者の楽しみを得るなど、オランダ人に製法を学ぶビードロ・ギヤマン（ポルトガル語）の応用も成果を発揮。小規模な内窯は持ち運びも可能、素人間に低火度焼成、楽焼が盛行する。「此の頃は素人の樂焼がはやりて誂へなき　焼き継ぎは窯塞げにてうるさや」（『今様職人尽歌合』文政八年刊・一八二五）とあり、素人陶芸が人気を集める。

4、入谷窯

入谷窯の実体は不明である。土地の産物として土器造りが知られるが、乾山入府以前の記録は乏しく、詳しいことは解らない。が、安永三年（一七七四）『大名武鑑』には「御土器師十五俵二人ふち下谷坂本入谷松井新左衛門」。文化文政期『新編武蔵風土記稿』（傍線筆者）には、

土俗村内ヲ槩シテ入谷ト唱ヘリ　農隙ニ専ラ土器ヲ造ル　是ヲ入谷土器ト唱ヘ　土地ノ産物トス　村内ニ土器ノ御用ヲ勤ル松井新左衛門ト云モノ住シ又日光御門主ノ職人仁右衛門ト云モノ居リテ　専ラ土器ヲ造ル

とある。幕府御用を勤めた松井新左衛門は、家康に従い江戸入り後、御用を勤め三州瓦を製した松井家と推測、分家、或いは上野長者町から入谷に移転をしたか、変わりなく幕府の御用を続けていた。日光御門主御用の職人仁右衛門も入谷住。文化文政期、乾山没後も入谷村では御門主御用を勤める工人の活躍があった。

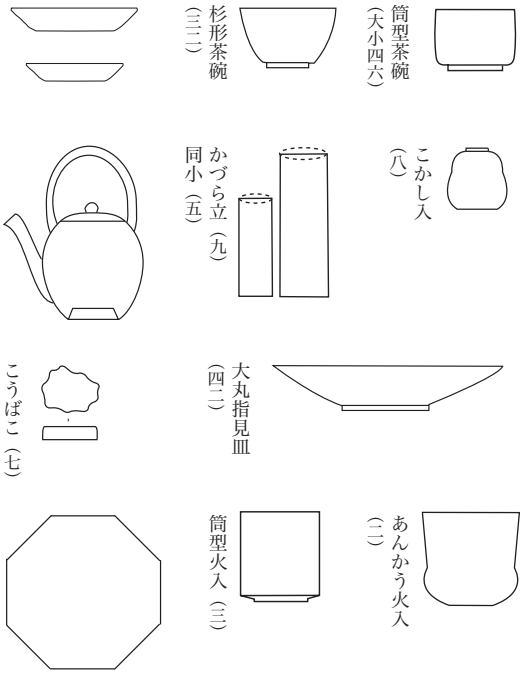
乾山時代には久作（『陶器傳書』）の名が知られる。

元文二年九月佐野における庭焼に際し、素焼の皿、筒形・杉形茶碗、香合・火入（次頁想定図参照）、白粉、内窯などを大川顕道に調達した陶工である。久作が乾山と同じ窯場の工人かは解らないが、遺跡からの出土品に「山」に「久」（〈久）印のある陶片がみつかった。

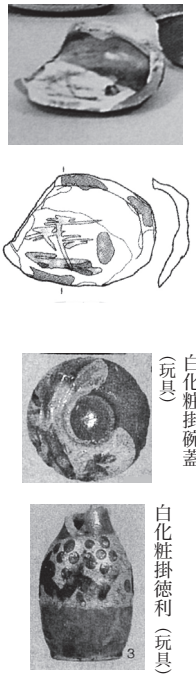
下谷二丁目1、2番地の発掘調査では、一九世紀前半の地層からは変形皿が出土した。佐野における乾山焼色絵松桜図鮑貝形皿に類似、同種の皿はさらに千駄ヶ谷五丁目遺跡、旗本小林家屋敷地土坑内からも出土するなど（中野高久著「入谷遺跡2―2地点出土の施釉土器について」）、乾山の得意とした色絵具、白化粧の掛け分けがあり、その名残りを窺わせる。

『陶器傳書』（大川顕道著）：入谷村久作への素焼下地注文想定図

「元文貳年巳九月乾山初而佐野へ罷り下り候節すやき下地　江戸入谷村久作方へ誂候」



入谷遺跡出土の乾山焼類似作品（台東区文化財調査会二〇一〇所収）



乾山焼二代には入谷村次郎兵衛の名が残る（「乾山世代書」）。入谷村の庄家・窯主の一人であったか（推定）、乾山の死を懇意の医師（立林可帛か）を通じ寛永寺坊官進藤氏まで伝えた人物である。「初代口述二代筆記」とする乾山陶法を書き残すが、同陶法書は請われて三代乾山宮崎富之助へと渡る（同書奥書・『古画備考』）。富之助妻「はる」は酒井抱一へ譲渡、そこから西村藐庵、三浦乾也へと伝世するが、文政七年六月三日、抱一筆の大澤永之宛書状によれば入谷村の陶工に多三郎の名が認められる。永之は行田の富商、乾山に傾倒、江戸浅草茅町に隠居をするが、抱一とともに善養寺乾山碑の建立に尽力をする。例年入谷村では乾山の命日には枇杷を供えることが慣例という。多三郎は抱一へも枇杷を届けるが、以後の入谷窯の消息は途絶えてしまう。

享保二〇年、下谷・坂本・箕輪・金杉辺りの窯場では火鉢・瓦燈・土風炉などの土器を製していた（『続江戸砂子温故名跡志』）。浅草寺界隈は寺を中心に、高原焼、入谷窯、今戸窯が活躍、互いに徒歩で往来可能な距離にあった。享保一七年乾山は、佐野庄大川顕道へ絵具の秘伝を通達、「白繪具一主藥拾五匁　高原白土也」と記している。乾山自慢の白絵具であるが、京都時代は豊後赤岩村白土を使用。江戸では陶工の居所近辺、高原白土を選択したか。幕府御用を勤める高原焼は高麗茶碗の製作にすぐれていた。高麗茶碗に白土は不可欠、土の吟味にも長じたものと推測するが、素地は自作・他作に拘わらず用いるとした乾山は、現存作品に照合、顔料、素地ほか種々の顔料を江戸においては入手のし易いものに変えている。高原窯とは往来のあったことを推考する。

入谷、坂本に関し『江都近在所名集』（安永三年刊）には以下のように

ある。

入谷　坂本より大音寺前へ出づる所、土器師あり
　　掛箱の下に入谷の土轆轤
　　早乙女の中を入谷の豆腐賣
坂本　上野の下　入谷の手前
　　百姓もある坂本の町はづれ

同書には「土器師」「土轆轤」の語がある。入谷村の日常、上野の下・坂本村の町外れの百姓家など、まさしく入谷村は同地域において最も発展の遅れた地域であったことが想定される。入谷村は坂本町に挟まれていた。今戸焼、高原焼、入谷窯があり、時代を追って川向こうに萬古焼小梅窯（伊勢土が基本）、浅茅が原に萬古堂三世三阿窯、向島百花園に佐原菊塢の隅田川焼（東竈）が陶炎を上げる。他国からは陶工らも入府、近在には傾城吉原があり、下谷地域は文化人・趣味人、数寄者陶芸の発生の地となった。好事家・素人陶芸が流行、乾山焼陶法も知られてゆくが、文政期『今様職人尽歌合』（文政八年刊）には「此の頃は素人の楽焼がはやりて」などと詠じられている。一つに商売、二つに数寄者陶芸として、乾山の目指したやきものはともに功を奏すが、京都では猪八が商いに励み、乾山焼を続行する。土産物にもなっており、東山の諸窯においても模倣が盛行。世上に出廻り、多くは乾山焼として流通するが、今日残る玉石混淆の作品群が結果である。初代乾山は江戸に住し光琳二世として絵画を描き、やきものを造る。陶匠であり、個人作家の域であるが、乾山晩年の生き方を伝え、数寄者・文化人陶芸の魁けとしてその役割を果たしたことが認識される。職人仕事が趣味者へと歩みを進める。

芸への道、近代の足音が聞こえてくる。

乾山の入谷窯時代は京都時代の総復習である。

絵画活動は活発化するが、乾山焼は猪八に托し、京都出張店の意気込みはあるとしても、新たな様式、利益を上げるなどの目的はなかったものと考える。経験を活かし自ら造り、自ら愉しむ。粘土も工人の居処近辺の土を良しとするなど（『陶工必用』『陶磁製方』）、気負った所は少しもない。生産を案ずる必要もなく、時に応じ、事に従う工夫を説くが、求められて佐野にも赴き、庭焼、陶法書を認める。

八一歳、最後に残した作品は、和歌十躰・烏丸光廣卿の和歌短冊皿である。書を得意とした乾山の真髄を伝えるが、成形は手造り、歪みもあり削りも不充分。が、書の力強さと呼吸の正しさ、乾山八一年の思いを刻むように筆を運ぶ。若年時の豊かな教養、文人としての誇りと自信、陶工として考案した白・黒・色絵具、これらの要素こそが次代に来たる数寄者陶芸に引き継がれるものであったが、まさに後世、それらは乾山焼の特色として記録される。色彩への関心も高く、絵師としての心構え、陶工でありながら、陶工で終わらなかった誇りが伝わる。

文人は別して書を大事とした。心の発露、書は自らを律する所から磨かれるが、独照禅師の公案はここにおいて完結。自ら飛び込み、心底深く潜む神龍を手中に修める。悟道の域、人中の龍、非凡の人の意にもなるが、形式ではなく、技術の巧拙でもない。自由人、のちの数寄者が継承しながら、受け継ぐことのできなかった部分である。様式上の模倣にとどまらない。乾山焼を会得するには乾山にならなければならない。少なくともその道、その精神に触れることが求められる。作品は作者の表徴である。後世の乾山焼に書のない理由に結びつくが、書を陶器に表す

乾山入谷窯・高原焼・今戸焼の位置関係（地理院地図参照作成）

上段図は、今日の東京都台東区である。やきもの産業は、江戸期江戸城界隈の需要を中心に発展したが、やがて寛永寺、浅草寺、隅田川を控えた浅草及びその南方へと移行する。大雑把には一七世紀末期迄は武家中心、一八世紀には町人中心、一九世紀にはさらに個人の求めも加わり（隅田川焼・浅茅が原三阿窯など）活発化。乾山時代は土器・瓦生産のほかに幕府御用の高原焼、今戸焼、入谷窯など、やきもの造りは浅草寺周辺、ほぼ三角形に位置して陶煙を上げる。

下段図は、入谷遺跡調査地の簡略図である。『諸宗作事図帳三』「下谷坂本東運寺」には東側に「御土器師新左衛門地面」とあり、東運寺墓所は一部入谷遺跡に重なっている。

坂本・入谷村周辺：乾山碑

「東都下谷絵図」（文久二年・一八六二）をもとに筆者作成

ことはむずかしい。書家の書ではなく、その人物の筆である。作者個人が剝きだしになる。乾山模倣の困難さが立ちはだかる。

出土品の胎土分析によれば、入谷土器の粘土は今戸焼にほぼ同じである。江戸在地系土器の類いであるが、江武の土は所によって性弱く本焼には適さない。乾山は必要であれば京都・瀬戸・信楽・志戸呂焼の土を求めよと述べるが、内窯焼は元来火勢柔弱、器物の破却も無く、何国の土も使用可である。土質により成形後に高台内など亀裂が生ずるが、それを防ぐ手立てとして京都では山科藤尾石を混入、江武では房州産の砂を混ぜることを勧めている。南京・阿蘭陀・肥前様式など、本焼物に彩色・絵付けを施す場合は素地は自作・他作を論ぜず応用するが、書・画を描くための拘りもあり、自己発明と誇りをもつ絵具を活用。錦手絵具には必須であるが、伝統的な孫兵衛伝・内窯絵具にはビードロ（白玉）が入らない。一流として乾山は白・黒、一部の色絵具にビードロを加え、紙絹同様、陶面の書・画、地塗りなどを自在にする。白を基盤に桃色・鼠色・薄柿色・薄萌黄色・薄浅葱色なども創案するが、江戸・佐野作品には惣地塗りの技法がみられ（惣地塗りは猪八作品に多く残る）、合わせ絵具の紺に合わせ絵具の緑を加えた二藍絵具、緑色に白緑を混ぜた濃緑色にも工夫を施し、絵画用の顔料にも注意を払う。上薬は伝統的な孫兵衛伝に終止。それを薄く掛けることこそ乾山焼の秘伝であったが、絵画の風趣を損なわず、色絵具の落ち着きを計るなど、これも乾山のいう細工・焼方上手の孫兵衛あっての技であった。

乾山焼の特色は形状にも現れる。床の間にあり、意義を正し鑑賞する書・画作品は、畳の上、手の上へと移されたが、掛物・巻物・帖物などの体裁は、角皿・額皿・筒茶碗・火入などの特殊な形態となって趣を変える。書画に適した釉薬・絵具の考案。陶面を紙絹に見立てる上薬の調合、調整、如何に紙・絹に近づくか、如何にしたら陶面の書・画の効果を高められるか。白化粧を施すことはその工夫の根本であり、土色を消し、ざらつく表面を滑らかにする。何より装飾を引き立てるための最上の工夫であったが、のちの陶法書が証左となり、これこそが数寄者陶芸の関心事となる。顔料の調和と独自の配合、別して白絵具は惣地塗り、画面の仕切り、部分塗り、絵具としては文字書き、彩色として花弁などにも活用するが、作品の種類と趣向、技法上の見事な融和が乾山焼の特色である。書・画・陶一体の妙味を実現。一方、茶人、やきもの師として茶の湯の盛行にも心を留めるなど、異国・本邦の古陶磁模写に関心を払い、時代の需めに従っては当時流行していた兄光琳の意匠文様を転用する。装飾・表現上の概念に捉われず、大胆かつ繊細、思う所、好しとするものに心を向けるが、それを可能にした技術技法こそ鳴滝窯の二大陶工、本窯・仁清焼二代仁清、内窯・一文字屋助左衛門親族押小路焼孫兵衛の熟練した技と経験であった。

乾山は仁清家より同家の秘伝を譲り受けた。孫兵衛からは口授を受けた。それを伝える乾山焼陶法書は後の陶法書類の先駆けとなるが、私見・私案を交えたその見識は、自らも数寄者であり、熟練陶工であった経験のもと、同じく数寄者、また陶工へと「秘伝とすること無用なり」とした精神を伝え残す。乾山自筆陶法書は内容、形式、書法において別途の風格、趣きを具えている。

江戸における乾山の活動　―絵画とやきもの―

①絵画と乾山焼

乾山は、晩年、江戸に住した。享保中頃からのことであるが、土器製作を専門とした入谷村ではやきものを造り、俳諧仲間と交流、光琳二世を名のり、絵師としても活躍する。門人には立林何帛（生没年不詳）がおり、光琳三世を継承するが、光琳人気は正徳から享保期へと継続。みやこの風趣、軽妙な運筆、減筆による象徴的な光琳画は、江戸においても興味をもって迎えられた。

乾山焼の主要装飾の一つであったが、江戸では読本・戯作、浮世絵、歌舞伎などが流行していた。俳諧・茶会・能鑑賞会ほか、寄り合いには席画、席焼、自らそれらの作業を愉しみ、技や知識を披露する。絵画作品には模写も多いが、周囲には、俳句を作り、画を描き、やきもの造りを試みるなど、吉原名主、本所の俳諧仲間などが顔を揃える。輪王寺坊官らとの交流は如何であったか。

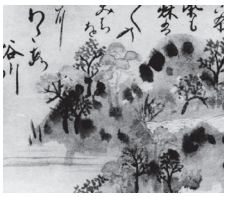
一つに光琳への興味と人気、二つに文化人らの趣味と実技、江戸の乾山は、京都とは異なる歩みに特色をみせる。

絵画

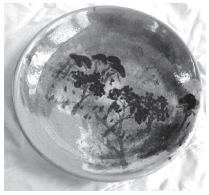
定家和歌四月図

陶

定家和歌四月長方皿

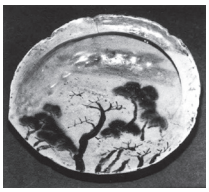


秋山図（部分）



夏木立皿

梅松図



松桜図鮑貝形皿

②絵画・陶における色彩の活かし方

絵画は席画、やきものは席焼が中心である。専門絵師ではない乾山画は、陶器の絵付けを基盤とするが、鳴滝時代の代表作品「定家十二ヵ月和歌花鳥図」は江戸において一二ヵ月の画帖となる。総体として小作品が中心であり、書と画、同じ図様・構成・色彩など、多くは陶からの応用とも云える（上段図）。

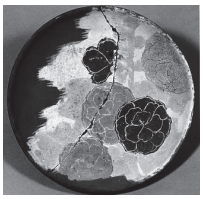
立葵図は光琳画から乾山画、乾山焼の装飾へと繋がるが、席画様式は夕顔図にもみられ、古典『源氏物語』「夕顔巻」茶碗は、和歌を伴い、古典の風趣を捉え、闇夜に緑葉、白絵具による夕顔花を描く。

色彩への関心は、装飾の色調に顕著となるが、文様は簡潔、誇張、最小の描写にして最大限の効果をねらう。素地は入谷村ほか他窯の下地の活用が考えられる。

夕顔図

夕顔図茶碗

立葵図（部分）



立葵図皿

③本所長崎町と佐野越名河岸の作陶

独楽香合には、白化粧地に黄・黒・赤・緑・青絵具を使用。高台底には「於長崎寓居」とあり、地名を記した一例である。長崎町は本所にあるが、乾山は晩年六軒（間）堀筑嶋屋坂本米舟の長屋に独居したとある（『古画備考』）。入谷村はしばしば大火、洪水に見舞われた。本所はその避難先と推定するが、晩年芭蕉の栖となった場所でもあった。

梅蘭水仙図火入は、乾山佐野滞留中、大川顕道庭焼における作品である。白素地上に緑・黒・青・紫絵具、窓絵、縁文様、釘彫りを施すが、京都「平安城・華洛」を出発、江戸入谷村に落ち着き、本所・佐野を巡る。

松尾芭蕉は旅こそ活きる道と定めていたが、年齢とともに人はその終息所を考える。

独楽香合：白化粧上、黄・黒・赤・緑・青絵具による装飾。「於長崎寓居」

梅蘭水仙図火入：白素地上に、緑・黒・青・黄・紫絵具を用いた絵付・装飾。「佐野天明留連日」

陶工のこだわり
白化粧・口縁・縁文様

①白化粧

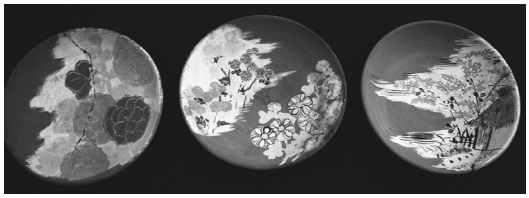
栃木県佐野市越名河岸は、明暦年間の完成という（鈴木泰浩他著『越名西遺跡・越名河岸跡』）。時には二〇〇隻以上の船が停泊した河岸と伝承。大川氏、松村氏とともに乾山を佐野に招いた須藤氏は、古く同所の船代官を勤めた家柄であったという。元文二年（一七三七）乾山の訪問時には酒・醤油の醸造業を営むとあるが、須藤杜川（分家）は乾山から「三十六歌仙和歌集」を贈られた。俳句入りの夏木立図皿他も作製し、ともに庭焼を楽しむが、当地における作品は窯の不具合か、調節の不手際か。焼成に難がみられ、素地は赤色、白化粧を施すが、絵具の発色に不充分さが残る。

未焼成の作品には、白化粧上、苦屋に萩・菊・立葵を描いた皿が伝世する。色絵具は桃・緑・黒・赤・紫色など、図様は京都時代の装飾に重複。が、白化粧に変化があり、月・梅花・山道などに掛け分けた装飾は、惣地塗り・刷毛塗りなどに限定、意匠・文様との繋がりもみられない。

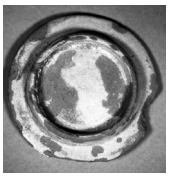
②口縁と縁文様

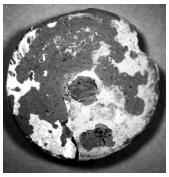
乾山焼か否かは不明であるが、越名河岸跡遺跡からは白惣地塗りに色絵具の残る陶片が出土した。口縁は口紅ともいうが、乾山焼では口縁に黒絵具を塗る。が、釉下ではなく、釉上黒絵具であり、乾山焼の特徴となるが、ここでは素地との密着が悪く剥げが生ずるなど、火の調整に問題のあったことが推測される。

縁文様も、新たに立湧格子文様を加えるが、格子内は梅か楓か、手描きであり、時として土器皿、火入を飾る文様となる。二代仁清、孫兵衛ほどの優れた陶工がおらず、次郎兵衛が居たとして、多くは乾山一人の手に懸かったろう。京都時代の総復習、が、八一歳、最後に残した作品は書が中心、得意の和歌を書した短冊皿であった。



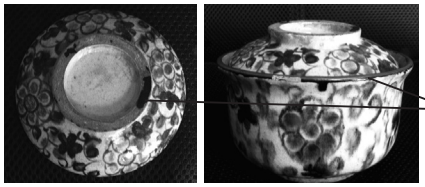
①赤土素地上の白化粧



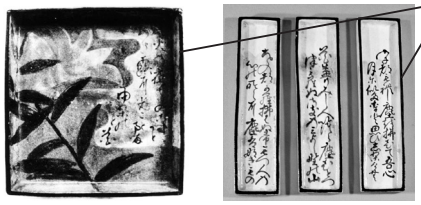


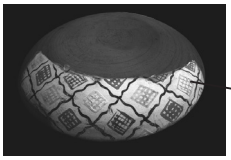
蓋部分（赤土素地に白化粧を施し、上に絵付）栃木県越名河岸跡遺跡

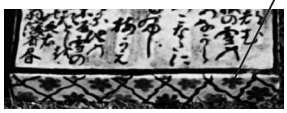
鈴木泰浩他『越名西遺跡・越名河岸跡』栃木県教育委員会一九九六年刊



②「黒上薬」の口縁







③「網目」縁文様

寺院との関わり

乾山自筆書状、その死を伝える上野奥御用人日記のほか、公寛法親王と乾山を直接結びつける資料は見当たらない。が、『浅草寺社書上』には「ケン山焼茶碗九」とあり、また公寛後継者・公遵法親王に関し宝暦一一年（一七六一）三月四日八つ頃浅草寺に御成、御土器師新左衛門ら数人を召して鞠を上覧、夜食後還御したと記録が残る（浅草寺日記）。

薔薇図茶碗は旧毘沙門堂蔵。「於東叡輦寺」とあり、寛永寺、輪王寺宮との関わりを証するが、坊官進藤氏は毘沙門堂坊官も勤める家柄、進藤勝任は印章から「『陶工必用』の受理者と推測、陶芸への興味を考える。

浅草寺には享保年中、乾山造一〇〇個の数茶碗が伝世した（如電箱書）。乾也、乾哉の模作もあるが、詳細は不明である。

薔薇図茶碗　旧毘沙門堂

浅草寺数茶碗
浅草寺

大槻如電箱書
三浦乾也模作

Ⅱ　乾山焼と陶法書（原本に従い旧字はそのまま用いている）

陶法書・伝書の行方

真の意味における乾山焼模倣は困難である。技のみが問題となるのではなく、書を用いたことにより、様式模倣のみに留まらないことが明白になるからである。「書を装飾に活用する」、容易なようで容易ではなく、筆の心得、陶法技術、意匠化するセンスが求められる。書は人間性を如実に表す。試みるほどに困難さに気づき、それ程の技量があれば自らの作陶に専念すればよいのではないか。終局其処に行き当たるが、趣味人は違うのである。過程が愉快、造ることが面白い、結果はそれなりの出来で構わないのである。模倣をする、試みる、秘伝とするものを入手する、そこに密かなよろこびを見い出すのである。

乾山焼陶法の初の伝播、数寄者陶芸を試みた人物は栃木県佐野の素封家大川顕道とその仲間ではなかったか。顕道手控『陶器傳書』には乾山焼の釉薬（上薬）と絵具の調合が記されている。上薬は唐土と日の岡石、絵具は赤・黒・白・紺・緑・黄色・紫・薄赤・藍・濃緑色の一〇色であるが、元文二年秋乾山を佐野に招き、内窯焼成・庭焼を試みる。材料を誂える必要もあり、手控には江戸の絵具・材料店、両国橋吉川町鴻池や吉右衛門、としま町弐丁目北がわ銕ヤ次郎兵ヱ、遠江屋文之丞、びいどろ細工所などの名がある。出版物『楽焼秘嚢』『百工秘術』『和漢諸道具古今知見鈔』などの抜萃書写もみられ、知識を積み上げさらにそれを実践。現存作品は少なく、書を書き入れたものも見当たらないが、巻末「京都本家樂焼黒藥之法」によれば、乾山の避けた黒楽茶碗の陶法を突き止めるほどにやきもの執心、興味の深さが窺われる。佐野の素封家らは乾山陶法を用いた数寄者陶芸家初の人々かと推定する。

陶法書は京都において二代乾山猪八も書き残した。写本『陶器密法書』が伝世し、跋文によれば弟子清吾へ与えたもの。清吾はそれを乞われて萬古焼の創始者沼波弄山に譲渡するが、本焼関連の事項はなく、内窯・楽焼を主体とし、初代乾山の記さなかった成形・寸法・吹子などが語られる。色絵具にビードロを入れることも特色であり、交趾風・惣地塗りの技法が多くみられる。（初代乾山にも内窯用絵具として錦手絵具の改変がある）

乾山関係の陶法書は、大きく初代乾山、二代猪八、その他乾山焼として上薬・絵具を記したもの、乾山名を記さず伝としたものに分別できる。

一、初代乾山系陶法書

江戸後期、文政頃、乾山の内窯陶法は古いものとみなされていた（『樂焼秘傳　好古樂記』他）。伝統的な孫兵衛伝による釉薬・絵具の調合であるが、ビードロを用いないことを古いと表した。古物に見せたい時には好いともあるが（『樂焼藥方』）、のちの乾山風陶器に書のあるものは少なく、絵画的描写も稀である。流れやすく、明度の低い絵具の使いにくさ、即興・即席には不適であったことなどが判断される。時代の需め、江戸という新興都市の風潮、翫ぶ人々の修得困難な技法であったことも関係しよう。

が、一体に乾山の内窯陶法は、好事家・素人陶工には格好の技法であった。低火度焼成、色絵具の新鮮さ、阿蘭陀写しほか異国趣味が興味の対象。乾山は江戸に数寄者陶芸の基盤となる技術、風趣を持ち込んだ最初の人であろうが、流行にはすでに刊行されていた『楽焼秘嚢』に手懸かりがあり、読後にはその実践へと誘導される。材料店には粘土・材料・顔料が揃っていた。問えば手本も、師匠の縁も手に入る。江戸後期は文化、芸術、娯楽が一つに結合、情報網の進歩もあり、居ながらにして欲する事物が手に入る。寄合・集会、多くの同好者が顔を合わせ、彼らは枠を超えて互いに交流、瞬時にして事態は他者へと伝播する。批評眼も旺盛であり、書物に学び、知識も豊富。大名家でも句会・詩会、庭焼・席描などが流行、各々その道の専門家が参上する。余波は全国へと波及するが、西鶴は元禄期に、はや俳諧などは下女にも及ぶと述べている。町人文化は江戸が中心、都市では簡便・簡潔、「手っ取り早い」ことを第一に、やきもの造りも土捏ね・成形・装飾も手間が掛からず、短時間に焼き上がる内窯陶法が求められた。数寄者陶芸は、公家・武家・町人へと及び、秘伝・秘薬として翫び、「極秘」もそれらの娯楽の内に秘められていた。

今日明らかになる陶法書は、寛文八年「上々御薬帳次第」（高取焼）、色絵では元禄三年「酒井田柿右衛門家文書」（有田焼）が早い。乾山陶法はそれに次ぐが、元文二年二冊の陶法書が著された。陶史として京焼の祖押小路焼、その典型を築き上げた仁清焼に遡るが、「みやこ」の陶技陶法を伝え、土・釉薬・絵具の原料・調合・活用方法などを公（おおやけ）にする。趣味者・好事家らは出版物を買い求め、伝書・陶法書を探り、財力は知識の蓄積、技法の伝播に貢献するが、自ら愉しみ、窯を設けて実践する道が開かれる。

乾山の陶法書は久しくひっそりと姿を隠した。が、入谷村には二代乾山次郎兵衛がおり初代の口述を筆記する。数寄者、一方、三代乾山へと渡り、やがて人の知る所となってゆくが、『陶工必用』も趣味人「陶煙居」水上蘆川（みなかみろせん）の蔵書となる。他方、京都でも二代乾山猪八が陶法書を認めた。弟子清吾から萬古焼祖沼波弄山のもと、猪八伝書も江戸へと向かうが、江戸では初代乾山、二代猪八の陶法がともに出廻る。秘書・伝書は自己・自流の正当化には必要であろう。が、内窯陶法は素人間に流通、秘伝は言葉、技は経験、ともに語られるものの一つとなって伝承する。

①『陶工必用』（乾山自筆・大和文華館）：元文二年（一七三七）三月五日成立。乾山自筆。仁清伝本窯・押小路孫兵衛伝内窯・乾山一流の陶法を纏めた一冊。受理者は不明。が、印「勝任」により上野奥御用人輪王寺宮家坊官進藤周防守勝任、同じく印「矢田陪氏」によって同家坊官矢田陪豊前守へ渡ると推考、水上蘆川の所持となったか。

②『陶磁製方』（乾山自筆・鐵竹堂瀧澤記念館）：元文二年九月一一日・一二日成立。乾山自筆。仁清・孫兵衛・乾山一流陶法を纏めた一冊。宛名はないが、同年ともに庭焼を行った佐野の素封家大川顕道へ与えたものと推考。顕道へは享保一七年内窯釉薬・絵具の調合を伝え、庭焼はその五年後のことである。

③『陶器傳書（とうきでんしょ）』（大川顕道筆・鐵竹堂瀧澤記念館）：享保一七年（一七三二）九月廿二日（乾山書状日付）。大川顕道著。武州より届いた乾山の内窯陶法、上薬・絵具の調合を書写した顕道手控。乾山自筆伝書二冊とは同じであるが、分量の配合に微妙な相異。江戸における絵具屋・材料屋の住所、その他出版物からの書写が認められる。

④「内竈秘書」（合冊本『樂焼秘傳・好古樂記』筆者小林源兵衛・「内竈秘書」筆録乾山省古か・近藤安治郎写・東京都立中央図書館加賀文庫）（口絵参照）：合冊本表題は『樂焼秘傳・好古樂記』とある。『樂焼秘傳・好古樂記』・「色藥代銀積」・「智術全書之内磁工門之部土器秘傳書」・「内竈秘書」以上四部から成り、筆者は藤垣爐扇・俗称小林源兵衛。「好古」なる人物に陶法を学び、自ら記して秘書としたが、好古老人は俳諧、書・画の妙手、樂吉左衛門隠宅手代紋右衛門に楽焼陶法を学ぶとして、以下のように記述する。

好古樂記

好古老人ニ道を聞　学ひ　倶ニ焼試たるおもむき左にしるす

好古ハ京都五條烏丸通リ下ル町　樂焼師家元吉左衛門隠宅　手代紋右衛門と申ものより傳を得て焼始　夫ゟさま〳〵工風して妙を得たリ　是を好古釜といふ

最終に編された「内竈秘書」が「初代乾山口述二代筆記」とする陶法書写本である。二代乾山次郎兵衛から三代宮崎富之助、富之助妻はるから酒井抱一、西村藐庵、三浦乾也へと渡り、関東大震災に遭遇、焼失したとされる江戸・乾山焼内窯陶法（上薬・絵薬の調合）を纏めたものである。

末尾に「明和三丙戌年七月廿四日近藤安治郎写之」とあり、明和三年（一七六六）近藤安治郎が書写。後方別紙には「干時宝暦十年（一七六〇）七月乾山省古花押」とある。年紀・筆跡などから推測、二代の筆録と考えるが、内窯掛薬・絵薬は凡そ大川顕道筆③『陶器傳書』に一致。乾山の趣味者向け低火度焼成の秘伝であるが、内容・年代・花押の形状などを『古画備考』、次郎兵衛の名を「乾山世代書」に確認、「乾山省古」とは初代乾山を意識した二代次郎兵衛を表すか。「初代口述二代筆記」の書者と推定、初代乾山の陶法を伝えるものと判断する。

二、二代乾山猪八系陶法書

①『陶器密法書』（萬古堂三世三阿跋文・国立国会図書館）：乾山焼二代猪八陶法書の写本（筆写は喜之か）。寛政四年（一七九二）五月萬古堂三世三阿（生没年不詳）の跋文があり、内窯陶法を中心とし、上薬（釉薬）・絵具、初代乾山の語らなかった成形・寸法・楽焼に関する事項が中心。弟子清吾に与え、清吾から萬古焼沼波弄山、三世三阿へと伝来。猪八は京都聖護院門境に工房を設けていた。清吾は猪八晩年の弟子と推定するが、伝書の内容、説明から陶工ではなく、趣味者に属する人物かと考える。

三阿はやきもの問屋萬古堂三世。萬古焼三代目であったが、陶工、俳人でもあり、俳諧仲間の記録によれば趣味・数寄者の陶器造りが窺われる。安永・天明・寛政頃には隅田川を挟み、小梅村に萬古窯、今戸村浅茅が原に隠士三阿が窯を設けた。三阿は至玄と称し、俳号は梅山居・三阿亭。向島花屋敷・すみだ川焼の佐原菊塢とも知己であり、『墨水遊覧誌』（佐原菊塢著）には三阿のやきもの、浅茅が原に関し、以下のようにある。

安永の頃（略）此となりに萬古焼の三阿住て、風呂の小板を焼て、蓼太へおくる云々（略）。浅茅が原といへる所にて、人めさへかれてさびしきゆふまぐれ、あぢがはらの霜をわけつゝ

三阿から風炉用小板を贈られた大島蓼太は、芭蕉追悼・顕彰などに力を尽くした夏目成美（一七四九―一八一七）の俳諧仲間。成美は「俳諧独行の旅人」を自負、「夏目成美年譜」（石川真弘著）天明・寛政頃に次のように認められる。

浅草末三阿亭に遊ぶ・梅山居にて浙江追善の茶会が催され手向けの吟を寄せる・三阿和上の幽扉をおどろかす・三阿法師のわび住まいに終日遊ぶ

三阿は和上・法師などと呼ばれていた。俗を離れた一面をみせるが、『陶器密法書』跋文にも「浅茅生隠士」とある。

② 『乾山秘書』（筆者不明、推定佐野宗達・針生乾馬家）：成立年代不明。内容は猪八伝書『陶器密法書』に同一。末尾に但書と「佐野宗達真義・花押」。別紙を貼り付け表紙には「他傳不許乾山秘書」、裏表紙内側に「三浦乾也門人杉山陶古千年竈乾馬」とある。両者の筆跡は相違し、表紙・裏表紙内側の書は針生乾馬筆、伝書と但書は佐野宗達筆ではないかと推考する。従来の乾也所持の陶法書とすれば、今回発見した二代次郎兵衛筆記の内容とは同一でなければならない。が、猪八陶法書に同じくし、書写の巻末には佐野宗達真義筆・花押がある。佐野宗達は初め「根津傳心庵」に師事、師の没後、「萬古三阿至玄」に習うとあるが、伝心庵が誰なのかは不明、「三阿」は『陶器密法書』跋文を書した萬古堂三世三阿であろう。地理的にも近接した今戸村浅茅が原に窯を設けており、佐野宗達は「御数寄屋坊主」にその名がみられる（『文化武鑑』六）。同一人物か否かは確認できないが、「宗達」名は初代と子息の二代があり、初代は寛政一一年数寄屋坊主となり万延二年没。二代は嘉永四年数寄屋坊主見習（三六歳「由緒書」）、元治元年（一八六四）まで奉公しその後の消息は不明となる。三阿との関わりは父子ともに可能であるが、「根津」は姓か地名か、地名とすれば下谷の内、三阿とは近在であり、さらに俳諧仲間との関わりも浮上する。針生乾馬（一八二二―九五）との関係では二代宗達ということになろう。御数寄屋坊主は「御城坊主」（幕府の役人）。表向の御用に当たる「表坊主」、奥向「奥坊主」、道具関係・城内、大名の世話に当たる「御数寄屋坊主」、将軍の霊廟管理などを担当する「紅葉山坊主」に分かれていた。身分は武士。法体の必要はなく、制限のある江戸城中を自由に往来。代々の家職、世襲であったが、御数寄屋坊主は茶事関係の専門職。茶道具管理、将軍の飲茶、溜間など大名の詰所における世話・喫茶御用、茶壷道中の責任を負う。大名家への出入りも可能、推定ながら宗達はその一人であり、茶道具類に造詣深く自らも作陶経験を積むなど、当時同じ下谷であった根津に住し、師とした伝心庵の没後は三阿に師事。三阿からは陶法書の書写を許されたものではなかったか。同じく俳諧を趣味とした乾馬はそれを入手。乾也所持の伝書ではないことが判明する。

③ 『乾山樂焼秘書』（筆者不明・国立国会図書館）：成立年代不明。冑山文庫（埼玉県大里郡吉見村字冑山）旧蔵、昭和六年、冑山根岸家から国会図書館に寄贈された。内容は①『陶器密法書』②『乾山秘書』に同一。本文書体も『乾山秘書』に近似し、同手、同時期と推測するが、藐庵筆「乾山世代書」とともに乾也門人乾昇が根岸家に残し、「乾山世代書」は埼玉県史編纂委員稲村担元によって善養寺に寄与されたと伝えられる。

④ 『本竈并内竈乾山秘法』（筆者不明・元東京美術研究所）：成立年代不明。内容は既述の猪八伝書三冊（①『陶器密法書』②『乾山秘書』③『乾山樂焼秘書』）と同一。脇本楽之軒旧蔵、東京芸術大学図書館蔵と伝承。が、同図書館に見つけることが出来ず、原本は未見であるが、蔵書印は「静勝文庫」とあり、文化文政期、掛川藩五代藩主太田備後守資始（一七九九―一八三四）の文庫と推定、が、不明（大名と数寄屋坊主、入手経路は如何か）。

⑤ 「伊八乾山ノ藥法ノ直書」（『すみた川花やしき』）：成立年代、所在ともに不明。佐原菊塢（一七六二―一八三一）所持の陶法書であるが、文政三年（一八二〇）五月、向島「百花園」に隅田川焼を開窯するに当たり、

道具商・目利であった芳村観阿（一七六五―一八四八）から譲られたという。直書であれば『陶器密法書』の原本かとも考えるが、向島は洪水・大震災・空襲に遭遇、陶法書の所在、筆者・内容ともに不明である。隅田川焼に関しては『墨水遊覧誌』に以下のようにある。

小梅村、今戸村、瓦師おほし、瓦の名物也、又寺島村、隅田村の百姓家にて、ほうろく、火鉢のすやきを製し、賣ひろむること年久し、すみだやきといふ。また花屋敷にて、乾山流の陶器を製し、賣ひろむ。都鳥の香合、あるひはさかづき、あるひは茶わん、すみだ川やきといふ。すべて此邊の陶器は、あんこうがまにて製す

隅田川の両岸には瓦師が多く、その一村に「寺島村」「年久し」とある。寺島家は家康時代に大坂から下向した瓦師の一族、村名ともなったか、瓦師業を継続、土着、隅田川沿岸の窯業を支えたことが窺われる。すみだ川やきは商標であった都鳥の香合をはじめ盃・茶碗などを焼成、「あんこう窯」を使用したとあるが、鮟鱇窯は単室、焚き口一つ、天井に煙出しの穴をあけた素焼用の窯とされる。京都に多く、開窯に尽力した尾形周平・清水六兵衛ら五条坂・京焼陶工の協力を示唆するか。

菊塢は剃髪、観阿も三四歳を以って出家をしたが、両者の交わりは文化元年、松平不味（一七五一―一八一八）の茶会に同席（『不味公茶会記抄』）。観阿は浅草に住していた。菊塢に加え、「浅草村末住」であった浅茅が原三阿との関わりは如何であったか。猪八陶法書の入手に何らかの関係はなかったものか。

⑥「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」（『梅屋日記』）：例外であるが、乾山所持とある所から加えている。所在、内容ともに不明であり、文政三年隅田川焼開窯に当たり菊塢が所持。光琳一〇〇回忌に際し抱一の命によって上洛（文政二年）、光琳庶子養子先小西家より受理した一冊である。菊塢は同書を携えて即京焼陶工尾形周平（一七八八―一八三九）の門を潜るが、周平は同書を読み乾山に私淑。高橋姓を尾形に改名、菊塢の帰府とともに江戸へ下向し隅田川焼開窯に尽力する。

三、その他の陶法書

江戸期から明治期まで、手書きの陶法書は数十冊が現存する。年代、筆者不明のものが多く分類はむずかしいが、形式は単冊、単冊を書写し纏めた合冊本に大別。総体として一つに高取焼「上々御薬帳」、有田焼「酒井田柿右衛門家文書」など専門的な内容・知識、地域の窯業者・窯元などに受け継がれた陶法、二つに京焼関係伝書のように陶工らが記録し所持、他所へ伝えた技法・調合書がある。

ここでは乾山関係を基準として披見した陶法書を三系統に分別。

一、楽焼系：『楽焼秘嚢』（元文元年刊・一七三六）など既刊書物を参考に、茶の湯に用いる楽焼茶碗などの製法を主としたもの

二、木米系：中国様式他写し物の製法を主とし、奥村潁川・青木木米・欽古堂亀祐・真葛長造など後期京焼陶工に関係するもの

三、その他：赤膚焼など藩御用などに関係する奥田家の陶法書ほか

内容は重複するが、共有する技術・技法は内窯・錦窯、掛薬（上薬・釉薬）・絵薬（絵具）の調合、器形と色彩・その変化、歴史・背景、賞翫する特色についての興味に絞られる。陶法書を蒐集、書写した人物、茶の湯者・趣味人らの関心事を反映。乾山陶法以外の書にも乾山名は現れ、乾山と称し全く異質のこともあり、どのように乾山焼が理解され、受け入れら

れたか。伝統的な内窯焼成は樂家と乾山家の二系統に絞られる。

楽焼は低火度焼成、軟質の施釉陶器をいう。桃山期、茶の湯の用に適うべく創られた楽茶碗に代表されるが、利休没後に急速な広まりをみせ、焼成方法・陶芸技法の名称ともなる。手捏ね、素地は厚く多孔質、唐土・日ノ岡石・白玉を合わせた釉薬を基本とする。

（一）乾山名のある陶法書

①『錦齊集』（筆者大塚白鷺斎宗貫・書写信政斎信爲か・文政七年一八二四・合冊本の成立明治三〇年・東京国立博物館）：「白鷺斎一流傳、樂焼極みつの法」「樂焼藥秘方」を含む。炭を用いた窯、焚き方、乾山略伝、阿蘭陀様式への興味が示される。

②『樂焼秘傳』（筆者大塚白鷺斎宗貫・成立年代不明・都立中央図書館加賀文庫）：白鷺斎は不明。原本は玉水焼陶法書であるが、玉水焼は樂一入庶子一元に始まり、加賀大樋焼などと同じく脇窯として山城国玉水村に開窯した。当書はその三代任土斎弥兵衛から白鷺斎へと伝えられた陶法を基盤とするが、樂焼窯図、藥法、乾山焼では白絵具に注目。生がけ・素焼後、その他乾山の指摘した「ちぢみ」に関する注意がみられる。

③『樂焼藥秘法』（筆者朝比奈・内一冊は寛保三年銘記・明治二年一八六九・東北大学図書館狩野文庫）：「本竈樂焼之法赤樂」「本焼樂焼上藥合様秘書」「樂焼藥秘法之書」「今焼合藥之次第」を含む。朝比奈氏の詳細は不明。

④『楽焼藥法家々之傳書寫　なんきんいまり焼付繪具藥法集書』（筆者・成立年代不明・東北大学図書館狩野文庫）：「七寶藥傳」「別家之法」「いまりなんきん焼付藥法」「窪田傳上繪藥法」「二俣樂藥別法」「遠山傳」を含む。

⑤『樂焼秘傳全』（筆者難波雑喉場樂焼師杢兵衛・成立年代不明・国立国会図書館）：「難波樂焼秘書」「樂焼口授秘書」を含む。雑喉場は雑魚場・魚市場とされ、堂島米市場・天満青物市場と並び大坂三大市場の一つであったが、雑喉場（誤読か）と楽焼師杢兵衛との関わり、杢兵衛に関してもよく解らない。『楽焼秘嚢』の抜萃書写、楽焼系釉薬とその調合、名家として光悦・乾山・宝山（粟田口焼）。「手紙の写」として作陶者の問いに対する返答を記すが、上絵具、白地と紺絵、雪白などの乾山焼関係、売買されている日ノ岡石に関する注意・見解も示される。

⑥『千家樂焼古實附陶器出処書完』（筆者・成立年代不明・東京国立博物館）：「今焼合藥之次第」「樂焼藥法」「千家樂焼古實」「陶器出処附」「本竈樂焼之法赤樂」「本焼樂焼上藥合様秘書」を含む。窪田助左衛門・小高文貞・小幡佐五郎の名がある。

⑦『樂焼方書完』（筆者・成立年代不明・東京国立博物館）：「樂焼方・圭斎傳」「樂焼之方書・常吉兵衛」『楽焼秘嚢上』（「樂焼藥并諸道具」）抜萃書写を含む。

⑧『繪藥・釉藥配合帳』（筆者・成立年代不明・三田市教育委員会）：『繪手本控』『呉州赤繪下繪帖』とともに三田焼資料の一冊である。乾山焼に関しては釉薬・絵具、その他欽古堂亀祐、尾形周平伝など一二項目から成るが、成立は天保頃か。

⑨『陶工秘嚢』（筆者不明・大正四年刊一九一五・『雑芸叢書』第二所収）：筆者不明。大正四年刊。朝倉無聲・三田村鳶魚編『雑芸叢書』所収。楽焼は茶の湯に必須のやきもの、陶工以外に雅致ある楽焼を志す人のためとある。

（二）乾山名のない陶法書

①『樂焼秘書竈圖附』（筆者飯塚宗助・文化三年一八〇六・ピーボディ・エセックス博物館）：樂吉左衛門判、樂家の秘事・秘伝を記す。赤・黒二法は殊の外秘するべく理を述べるが、押小路伝、樂焼伝は根源を同じくすることも分明する。

②『樂焼諸傳』（筆者渡邊政挙・原本一部松田秀徳・文政六年一八二三・天保七年一八三六・京都府立京都学・歴彩館）：『楽焼秘嚢上』抜萃書写・「尚友斎一心庵樂焼傳法」「樂焼田邊弥三郎傳來藥法」「石野佐次右衛門樂焼法」を含む。

③『樂焼藥方』（筆者・成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館）：小高文貞蔵。江戸川区真言宗光福寺には小高文貞碑がある。文貞は医者、天保八年没。工芸にも長ずるという。楽焼、唐物薬の調合があり、古物の風趣には白玉を入れずとあるなど、乾山焼内窯陶法は古いとみなされていたか。

④『本竈樂焼唐物藥秘方全』（筆者・成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館）：「井上氏傳書」「深川江戸記」「加藤氏書抜」「國勝傳書」「榊原玄順ノ留」を含む。

⑤『秘術巻』（筆者・成立年代不明・京都府立京都学・歴彩館）：「樂焼藥之法傳」「極秘傳」を含む。絵具一色に関し数種の調合例を記載。

⑥『友古樂焼』（筆者友古・成立年代不明・都立中央図書館加賀文庫）：「友古」とあるが、詳細は不明。ふいごを用いた黒楽焼成を基本とする。

⑦『陶器焼附画工秘傳新書全』（筆者江藤時太郎・明治一七年刊一八八四）：維新後西欧を手本として日本には種々の分野に西洋思想・理論・技術が流入。政府は他国の技能・技法を知り、自国の実力を試すべく博覧会への出品を試みるが、パリ（一八七八年）では日本陶器が世界一等の評価を獲得、此一書を学ぶことにより「瀬戸の藤四郎たらん」とある。編者江藤時太郎、叙は作家梅亭鳳叟（金鳶・一八二一―九三）、明治一七年の刊行。

（三）専門陶工による陶法書・その他（乾山名は木米関係にある）

素人陶芸、趣味者・数寄者に伝承した陶法書ではなく、専門陶工の記録である。多くは手控形式であり、製作に関する原料・顔料、それらの試作も含めるが、具体的かつ専門的な内容に特色がある。欽古堂亀祐など指南書として著したものもあり、基本的には筆者の知識、経験を披露。主体は当時流行の煎茶趣味に基づく中国陶磁の製法、居所である京都、京焼の陶法が基盤となる。陶工は求められて江戸、地方へと指導に出向くが、それも特徴の一つであり、陶法書の伝播に大きく関わる。

①『陶器手録』（筆者青木木米・文政元年―同七年一八一八―二四・神奈川県立歴史博物館）：青木木米（一七六七―一八三三）著、真葛家に伝来した木米陶法書（手控）であり、同家における加筆、封印の跡があるという。木米には古器を模写した図帖、刊本（『天工開物』『佩文斎書画譜』など）を書写した抄録なども残るが、真葛長造（一七九七―一八六八）は真葛焼の創始者。木米窯の陶工としても活動し、知恩院宮門跡から「香山」号を受理、同号は長造四男虎之助が継承し明治期横浜に香山窯を開く。

当書は木米の伝える所、異国・和物写しに関する土、釉薬、絵薬の調合例が中心、原料の製造方法、型物成形に関する技法を記述する。乾山関係では「乾山青花畫釉日本乾山明爐所焼倣西祥之畫釉」「赤繪釉仁清乾山」他、罫紙欄外に「乾山黒藥」「仁清乾山所焼之紅色釉法」「乾山生瀬石云々」などとあり、京焼仁清、乾山に触れる。木米は「僕モト陶人ニ非ズ」と述べ

る。南画も描き、中国初の陶磁専門書『陶説』(朱琰著)を読み陶工を志したと伝聞。中国陶磁器・知識に刺激を受けて陶への道を進むとされるが、高芙蓉、寶山文蔵、京焼磁器の祖奥田頴川(一七五三―一八一一)との子弟関係が伝承。文化二年(一八〇五)青蓮院宮御用を勤めて「粟田陶工」となり、紀州、翌三、四年、加賀藩の招請を受け、春日山中卯辰山に窯を築き作陶指導に当たる。金沢では大火が起こり、窯は藩営から民営へ移行するが、木米は帰京、春日山では陶工松田平四郎(元寧・馬宋)が窯主となり青磁・染付・赤絵・色絵などを製作。平四郎は木米陶法を『陶器總録』に纏め、文政年間には、木米も陶法を集成、『陶法手録』はその一部である。

②『陶器總録』(筆者松田元寧・文化五年一八〇八・追加同一一年一八一四・『平安名陶伝木米』所収)：表紙に「文化五年戊辰中夏改控」、裏表紙に「金陵陶工松田元寧懐書」とある。木米門下松田元寧(天保五年没)著、元寧は字、名を平四郎、号を馬宋・帝慶斎と称し、本来の職業は筆屋であったという(脇本十九郎著『平安名陶伝』)。金沢城二の丸を焼く大火に遭遇、民営となった同窯元として活躍するが、文政初年頃には廃窯。当書は松田家伝来、写し物の調合を中心とし、「古赤繪九谷之方」「金窰イマリ寫赤繪ノ方」「火ニ入ル心得之事」他、「乾山」「仁清」の窯詰め、乾山の白・紺青絵具に関する事項がある。

③『陶器指南』(著者欽古堂亀祐・文政一三年刊一八三〇)：欽古堂亀祐(一七六五―一八三七)は文化・文政期の京焼陶工。本名中村亀助、伏見人形を造る「丹波屋」に生まれ、奥田頴川に師事。摂津三田焼・丹波篠山藩王地山焼・南紀男山焼・瑞石焼などにおき作陶指導に当たる。「楽焼を試みるものゝその精を得る者少なし」(可亭道人識)とあり『陶器指南』を刊行するが、自らの体験を集成。盛行していた中国文化、文人趣味に鑑み、中国磁器を中心に土・絵薬・釉薬、形状・装飾、窯と窯入、用具に関し具体例を図に表し解説をする。『茶道指南』を書写したものに『陶器樂草』(茶顛庵主人)がある。

④『陶器樂草』(原本黒川県・茶顛庵・筆者義方・天保三年一八三二・嘉永元年一八四八・国立国会図書館榊原文庫)：原本は天保三年(一八三二)、書写は嘉永元年(一八四八)。著者茶顛庵・黒川県、友人馬淵市右衛門所持の写本『陶器指南』を借りてそれを書写。亀祐・仁阿弥(二代高橋道八)・木米に学び、当書には「予が力に非ず。秘して家蔵とするべきもの」とある。幕末の国学者雨森(榊原)芳野家蔵、蔵書印「榊原家蔵」は雨森芳野家、写者の義方は不明である。

⑤『彩色繪具皆傳』(『尾形空仲子相傳』尾形周平伝・加集家・天保五年一八三四)：著者尾形周平(一七八八―一八三九)は空仲(中)を号とした。文政三年(一八二〇)、佐原菊塢の江戸向島隅田川焼開窯に尽力するが、菊塢所持の二冊の伝書「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」「伊八乾山ノ薬法ノ直書」を承知。尾形姓は尾形乾山、号空仲は本阿弥空中を心を留めた故の号であったか。が、珉平への陶法伝授は清水焼五条坂の彩色絵具である。珉平(一七九六―一八七一)は文政六年島内池之内村に白土を発見、珉平焼を創始。やがて周平を招き作陶訓練、周平より「平」の一字、及び「彩色繪具皆傳」を伝授された。

⑥『本多佐兵衛所持日記』(筆者本多佐兵衛・天保七年一八三六頃・『京焼百年の歩み』所収)：本多佐平(佐兵衛)は五条坂の陶工。天保年間の活動が知られる。五条坂は粟田口と並び当時京焼様式を二分する窯場であった

が、同記には木米古赤画・周平古赤画・道八仁清黒など、清水周辺五条坂の陶工名がみられ、周平が珉平に伝授した彩色絵具も五条坂の陶法である。佐平、周平は同時期の陶工である。

⑦『樂焼之口傳控帳并ニ石焼』（筆者奥田木白・天保六未五月ヨリ同八酉五月改）・『家傳覚書』（木白口述子息佐平衛筆記・嘉永三年一八五〇―慶応元年一八六五頃まで）：『樂焼之口傳控帳并ニ石焼』は天保六年（一八三五）・同八年改。奥田木白の自筆陶法書（縦二〇、二センチ・横一六、二センチ）である。釉薬の調合、土の配分、焼成方法などを具体的に記すが（高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」）、嘉永三年から慶応元年頃（一八五〇―六五頃）にはそれを原本とし、木白口述、子息佐兵衛筆記『家傳覚書』が纏められた。

木白（一八〇〇―七一）は屋号柏屋から「木」「白」、炭問屋・質屋を業とした大和郡山藩の御用達商人であった。名は武兵衛、天保六年（一八三五）頃から楽焼を始め、幕末から明治初期にかけて赤膚焼の陶工として活躍する。

赤膚焼は遠州七窯の一つと伝承。奈良市西郊五条山に始まり、鎌倉末期には土器火鉢を生産。南都興福寺を中心に、火鉢座・土器座・瓦座が結成されていたという（『多聞院日記』）。今日の赤膚焼は、寛政年間（一七八九―一八〇一）京都から移住した京焼陶工治兵衛らの陶法を基盤とするが、京焼風趣を継承、能楽の舞手を図柄とした奈良人形絵（奈良絵）が評判を得る。

⑧『赤繪師南』（著作・筆画福原揺舟・天保五年刊一八三四）：筆者福原揺舟は俳人と推定。内窯陶法・楽焼に関する釉薬・絵具、絵付の手本を掲載する。

⑨『南條治郎左衛門相傳陶器秘傳』（『陶器秘傳考録』）：筆者不明。

むすび

近世日本の陶磁器は、生産の拡張ばかりではなく、関係する情報を拡大させたことにも特色がある。一つに陶法書・伝書の広がりがあり、陶家はもとより広く素人陶芸家・趣味者の興味を呼び起こす。

陶法書・伝書は陶家に伝承するものを基本とする。早い例では一七世紀、陶家による「上々御薬帳」（高取焼）、「酒井田柿右衛門家文書」（有田焼）があり、技術と知識を中心に父より子へ、師から弟子へと相承される。殖産事業、藩による規制も厳しく、他者に洩れることを恐れるなど、家伝を守ることは必須のことであった。一八世紀頃から情報は専門家・陶工以外にも広まり始める。近世社会では「知識」も商品である。公家は権威・名誉・学問を売り、武家は武芸、寺社は神仏を売る。師匠が出現、茶の湯、能・謡、書・画、詩・歌などの文化・芸能も趣味として広められるが、やきもの造りもその一つ。専門陶工から素人作陶家へ、陶器製作のための粘土・釉薬・絵具の調合や配合法などが呈示される。

作陶法は一八世紀から広まり始める。手引書として『百工秘術』（一七二四）・『楽焼秘嚢』（一七三六）が出版された。私的には手書陶法書、尾形乾山の『陶工必用』『陶磁製方』があり、刊本、乾山陶法書ともに対象者を部外の人物、趣味者・素人においたことに共通性がある。『百工秘術』は江戸、『楽焼秘嚢』は大坂において出版。乾山陶法は江戸、佐野において纏められ、各々同地における趣味人らの手へと渡された。京都では二代猪八も陶法書を著すが、手書の陶法書は、

仁清家秘伝　：二代仁清から乾山（『陶工必用』）

『陶工必用』　：乾山から進藤勝任・矢田陪（推定）・水上蘆川

『陶磁製方』：乾山から大川顕道（推定）
『内竈秘書』：乾山から二代次郎兵衛・三代宮崎富之助・酒井抱一・西村藐庵・三浦乾也
『陶器密法書』：猪八から清吾・沼波弄山・萬古堂三阿
『樂焼秘書竈圖附』：樂吉左衛門（九代了入）から飯塚宗助常秀
『樂焼秘傳』『錦齋集』：玉水焼三代任土斎から大塚白鷺齋宗貫

など、各々以上のような経路を辿る。基本的には陶工から部外者、素人作陶家へと伝承するが、他方、窯業地京焼陶工から地方の陶工へと伝播した道程もあり、背景には文化・文政期における藩窯・御庭焼の広がりがある。一例として、

『陶器手録』：京焼陶工青木木米の加賀国春日山行と陶法
『陶器指南』：京焼陶工欽古堂亀祐の摂津国三田行と陶法

など、京都粟田口、五条坂に青木木米、欽古堂亀祐が現れた。御庭焼、藩窯拡大、煎茶ブームなどに起因、陶工から陶工へと技術の情報が伝播する。木米著『陶器手録』は上薬・絵具の調合が主体、亀祐著『陶器指南』は挿図を活用、明確な陶法情報を組み込むなど、窯業地から地方窯・地方の陶工へと作陶秘伝が伝えられる。時代の需めもあり、趣きは煎茶趣味、中国明末清初期の陶磁器へと移行するが、一九世紀、江戸には独自の変化が認められる。

文芸の風潮に連動するが、文学は通俗性、滑稽味を軸として韻文に流れる。全国的に俳諧が流行。門流として貞門・談林・蕉門などが生じ、俳人たちは「系譜と組」、属する系統と同好会を形成する。絵師酒井抱一も俳諧に執心、生涯俳諧を伴侶とするが、光琳顕彰・光琳画を江戸に復興、弟乾山に関しても墓所の発見、記念碑設立、『乾山遺墨』の刊行など、伝書・書物・作品類を蒐集、乾山系譜作成の糸口をつくる。吉原の名主西村藐庵はそれを継承、相伝の一部として陶法書「初代口述二代筆記」を加え、「乾山世代書」を著した。一方、やきものを主題として俳句・漢詩を添えた『赤繪指南』なども刊行、情報の集積を主体として、「相伝」の意識は徐々に遠ざかる。

幕末・明治期には複合書、単冊を独自に集成するなど合冊本が多くなる。陶法書は手控形式、情報は内容より量を重視する傾向に転化するが、素人から素人へと「素人伝」が始まり、資料の収集には江戸後期の「好古家」活動の影響を推測。好古家は古い器物、事物に関心を寄せる武家・町人、国学者らの集まりであった。使用如何に関わらず、珍しく興味深い調合・配合（かやり・キズ隠し）他を収集。伝書からは「伝」とする陶工・作陶者の名は消え、代わってブランド銘、樂家歴代・光悦・仁清・乾山などの名が現れる。専ら素人間では楽焼製作、専門陶工らは中国陶磁器・交趾焼など、内窯用絵具に白玉（ビードロ）を入れ、それらの調合・配合を記した陶法書が流通。明治期は海外との比較によって技術・様式を顧みるなど『陶器焼附画工秘傳新書全』が一例となる。大正期は個人主義の萌芽もあり、伝統芸能の復活とともに再度素人陶芸が注目、近代陶芸の先駆者バーナード・リーチ、富本憲吉らが活躍する。

陶法書に共通する内容は、本窯・内窯釉薬、限定された上薬・絵薬の種類と調合である。技術は単純。何ゆえ多くの同類書が書かれたのであろう。価値は技術のみにあるのではないことに気づくが、一八世紀、やき

もの造りは陶工ではなく部外者である著者から、読者・素人へと技術の「報道」が活字化された。窯業地ではなく、江戸、大坂からの刊行に示唆があり、楽茶碗に心を寄せる多く茶の湯者らの関心が呼び起こされた。

乾山の陶法書は、専門陶工から素人へと向けられた初の陶法書である。

一つに京焼本流を受け継いだ乾山焼、二つに尾形乾山個人の表現とその陶法を完成させたこと。職人として、数寄者として、その両域に旗印を掲げるが、提供された情報は多く後世の作陶者らの指針となり、併せて二代乾山猪八も陶法書を著すなど、乾山焼の内窯陶法は趣味者・素人間へ大きな一歩を提供する。江戸後期、武家、富裕町人らは、京都、陶業地から専門陶工を招き、数寄者・素人陶芸を愉(たの)しみとした。乾山は仁清とともに京焼の代表者となるが、陶器に絵画的表現を可能にし、創案した色絵具の活用を第一として、白絵具こそが彼らの興味の対象となる。白・黒・青絵具、様式では阿蘭陀模倣が注目されるが、

（一）乾山の白絵具（白絵土・白泥）は、良質白土の入手困難な状況下、素地の色調を変える・陶面及び絵付面の調整・装飾の効果を上げる・絵具として使用するなど、絵付・装飾において如何に白色が重要であるかを呈示した。技術面でも焼成における白絵具の盛り上がり、素地との剝離を防ぐ工夫、着色顔料を混合しブレンド色を考案するなど、のちに作陶者らは乾山名を冠する否に関わらず、これらの調合・配合、活用・塗り方までを相承、乾山焼の大きな遺産の一つとして残る。

（二）黒絵具も同様である。留薬(とめくすり)（釉薬）を用いずして直接器面に書・画を描き入れることを可能にしたが、青・二藍・緑色絵具にも独自の試み。気づかずして後世の作陶者は多用するなど、これも乾山焼の遺産である。

（三）日本の阿蘭陀様式は有田焼が早く、陶器は乾山創案、二代猪八が継承する。白絵具を基調として多彩な色調・意匠様式・形状他に乾山焼の特異性が発揮される。

一流として錦手絵具の改変もあるが、乾山は内窯絵具にビードロを用いることは白・黒絵具を専らとした。基本の調合は孫兵衛伝、伝統的な上薬・色絵具に限定。絵画的風趣とそれに適した絵具の調整、乾山考案の書・陶・画一体の陶法は後世の作陶者らの注目を集める。

「乾山焼」には初代、二代猪八の陶法がある。

初代乾山は茶の湯に親しむ時代、伝統的な大和絵・和歌の風趣、水墨画・漢詩の世界を描き出す。古典の風趣を意匠とし、色彩の変化と図柄の意外性、兄光琳の創り出した光琳様式を陶器に表現。本窯・内窯、両陶法を駆使、中国・朝鮮・阿蘭陀他の写しものなど、日本に新たな装飾陶器の風致を伝える。一方、猪八も乾山様式を踏襲する。が、多くは工芸意匠の域に留まり、楽焼などの手捏陶芸の台頭する折、楽焼に白・青絵具を入れる装飾を考案。色彩に興味の示された時代、鮮やかな青絵具を強調、阿蘭陀様式、惣地塗りの交趾様式に独自の工夫を試みる。

晩年の乾山は江戸に住まいし兄光琳を強く意識。色彩に対する関心も高く、内窯陶器を主体として絵画用顔料にも巾を広げる。人々の交流・交歓も活発な折、集会・宴会・席描・席焼など、ともに造り、ともに鑑賞。芸と遊との領域がしだいに狭まる。専門陶工としてのプロ意識、が、心は数寄者。乾山の陶芸はこれらが一つとなった風趣を伝える。

素人作陶家の先達(せんだち)、美の創造を志す陶芸家らの先駆者ともいえる。

Ⅲ　陶法書の調査と新資料

陶法書・伝書の理解は、実地経験のない場合はむずかしい。

使用、鑑賞、やがて興味は製作・造り方へと移行するが、やきものは筆一本、用紙一枚には終わらない。製作道具・場所・焼成のための窯も必要であり、それらの準備にはそれ相応の知識、経験が求められる。

やきものは、生まれるために各々条件を背負っている。

土・砂・石には個々の素質があり、形造るためには土の可塑性（粘土質）、熱によって焼しまり、硝子質を造る性質がなければならない。

手捏ねは多く楽焼の意に用いられるが、日本では桃山時代に茶の湯が大成、茶を喫するための茶碗として楽焼茶碗が造られた。茶筅を用いて茶が点て易く、手に取り扱い易いことを始めとして、色・形・焼成の折の変化など、茶の湯者らはそれらの一つ一つに心を向けた。

楽焼は中国明代に造られた華南三彩を基盤とする。日本では押小路焼、樂家に始まり、押小路焼は京焼に吸収されるが、樂家は今日までも継続。ざっくりとした土を用い、鉛質（炭酸鉛）と珪石質を混合した釉薬をかける。鉛質は珪石（石英）を溶かし硝子化させるが、光沢を与えるなどの役割を果たし、乾山は、鉛質は唐土または白粉、珪石質は日ノ岡石と記している。内窯焼成は上薬（透明釉薬）、絵薬（絵具）ともにすべてこれを基本とするが、上薬に着色顔料を加えて色絵具を作る。江戸後期にはそれにビードロ（白玉・硝子粉）を入れ、光沢を工夫、絵具の密着、安定度を高めるなどの技法に執心、素人間には必須の絵具として重用された。

陶法書によれば、押小路焼孫兵衛伝・乾山焼内窯絵具は古式とある。使いこなす能力の不足、装飾に絵画的要素を必要としないことなどが考えられるが、伝書類には古物、古く見せたい時にはよろしいとあり、乾山の真意、陶器に絵画的な表現を試みることのむずかしさを反映する。

乾山焼は、様式・陶法ともに従来の技術技法、工芸意匠をのり超える。火気の試練をくぐり抜け、和漢の画讃様式、装飾陶磁器・古陶磁模写、琳派意匠の一般化にも力を入れるが、晩年には絵画活動にも執心、作陶にも色彩への関心が強くみられる。

「顔料」は顔に塗る材。原始日本の先祖たちは顔に色を塗っていたという（鶴田榮一著「顔料の歴史」）。顔料の始まりであるが、古来人類のはじめに意識した色は赤色とされる。縄文時代の土器に始まり、『魏志倭人伝』には大人も子供も顔・体に入れ墨をしていたとあるが、赤色はべんがら（良質の丹土）、青色は墨・藍、黄色は薑（はじかみ）を使用したと伝承。色料は土からの土壌採取、植物からの草木採取が主体となるが、八世紀になり銅系顔料が現れる。江戸期使用の顔料は大方平安初期には揃うとされるが（鶴田榮一）、桃山時代の濃絵・紺碧画には紺青・緑青を多用。顔料は海外貿易に頼り、大坂道修町には輸入品を扱った絵具屋、薬種屋が集合。『樂焼秘傳』（白鷺斎）にも道修町三丁目小西与兵衛などの名が認められる。

乾山も銀のカラミを求め多田銀山を訪れるが、そこでは土・石、丹土

も扱うなど、鉱物を産する地域ではともに顔料になる土石が産出。丹土は当時日本においては輸入禁止の一品であったという。

顔料は絵具として『倭名類聚集』に「圖繪具」とある。「染繪具」とある染料とは別であるが、赤絵具は赤土が原料、黄土を用いる。焼いて丹土、インド・ベンガラから輸入した弁柄丹土、乾山使用の緑礬を焼き返した絳礬もまた同じ役割であるが、白色顔料は鉛白（白粉）が基本。足利時代に明人に学び鉛白・鉛丹などが作られたという。元和年間（一六一五―二四）、需要に伴い長吉丹・勝吉丹・乗久丹などの区別も生じ、「内竈秘書」（二代筆記）には乾山焼カボチャ色として長吉丹の使用が認められる。白粉は奈良朝以来使用された鉛粉である。中国より渡来、唐土とも呼ばれていた。

―乾山以後の陶法書の特徴―

乾山の陶法は京都と江戸・佐野に伝播した。京都では猪八、江戸では次郎兵衛、佐野では大川顕道へと伝承するが、猪八伝『陶器密法書』は清吾から萬古焼、江戸の小梅・浅茅が原へと波及。陶法は内窯焼に絞られるが、初代伝、二代猪八伝ともに江戸へ向かう。のちに両者は混同、多く楽焼陶法の範疇に入れられる。披見した陶法書からは以下が分明。

（一）陶法書・伝書の内容は楽焼主体

江戸中期から後期にかけて素人間に親しまれた陶法は楽焼である。

後世、伝統的な内窯陶法は樂家、乾山焼の二流に限定。素人間の楽焼は作陶すること、個人の愉しみが第一であった。『百工秘術』には「慰焼」とある。同書、又『楽焼秘嚢』は貴重な手本・手引書となるが、やがて素人陶芸間には銘柄意識（ブランド）が成立、一つは釉薬、二つは作者・作風への拘り（樂家代々・光悦・空中など）となり、秘伝・陶法書の入手に腐心する。単冊から合冊本へ、作陶の愉しみは知識の蒐集へと移行。絵具一色に対して種々の異なる配合・調合が述べられるなど、根源には絵具屋・材料屋の存在を認めるが、原料・顔料、やがて手本・指導者・専門家の紹介へと及ぶなど、組織・人脈の強さを発揮。寄合、趣味会などを媒介として領域を超えて相互の交流が保たれる。

（二）専門陶工と地方の関わり

陶工はそれを以って生業とする。常に世上の需要に応ずる姿勢が求められる。仁清伝にも呈示されたが、陶法書の前半は時の茶の湯者らの嗜好に随い、高麗茶碗・茶入製作など、写しものの技法に尽くされる。木米・亀祐時代も同様に文人趣味と煎茶の流行、時代を反映、明・清代の写しものや阿蘭陀様式などが専らとなる。有田焼の磁器生産も追風となるが、仁清焼、乾山焼は一時的にせよ時代遅れの道に入る。

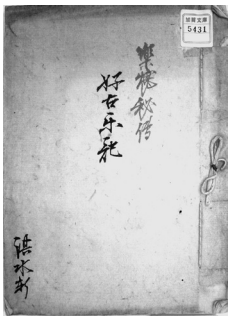
（三）磁器の発展

当時白く軽く創意ある意匠の有田焼は京焼を凌ぐ勢いとなる。陶工らの移動もあり、京焼技法は地方に分派、しだいにその銘柄は稀薄となり、やがて京都も磁器生産へと転換する。乾山も磁器製作を試みた。比良の白土を活用したが、京都における本格的な磁器生産は文化年間頃、奥田顕川まで待つことになる。

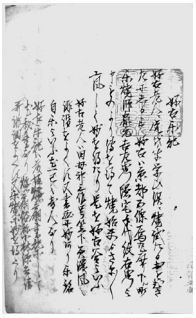
陶工の陶法書は「素人の心得に見るにはうとし」（『本朝陶器攷証』）とした言がある。陶家の家伝・秘伝は専門陶工の生きるための術であった。趣味者の翫びごととは一線を画す。

一、初代乾山系陶法書（『樂焼秘傳 好古樂記』中「内竈秘書」―「初代乾山口述二代筆記」―）都立中央図書館加賀文庫

新資料「内竈秘書」
『樂焼秘傳 好古樂記 淇水軒』

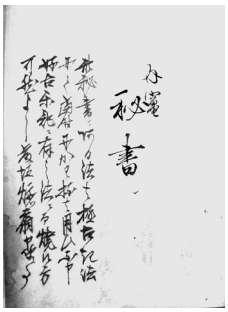


『樂焼秘傳　好古樂記　淇水軒』①
合冊本表紙

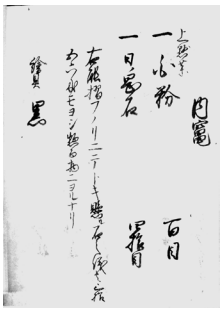


『好古樂記』冒頭・末部三行は朱字

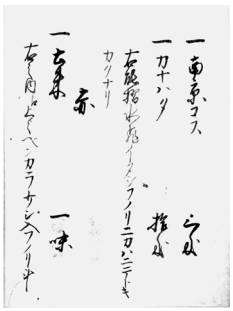
「内竈秘書」（合冊本表題と同筆）



②



③



④

⑤

「好古樂記
好古老人ニ道を聞　学ひ　倶ニ焼試たるおもむき左にしるす
　好古ハ京都五條烏丸通リ下ル町　樂焼師家元吉左衛門隠宅手代紋右衛門と申ものより傳を得て焼始　夫ゟさま〳〵工風して妙を得たり　是を好古釜といふ
　好古老人ハ田母神三作号笠下

「内竈秘書」―「初代乾山口述二代筆記」―

① 『樂焼秘傳　好古樂記　淇水軒』

② ―「内竈秘書」―

此秘書ニある法は　極古記法にて　當時にかく様は用ひ不申　好古樂記ニ有之法ニ而焼候方　可然よし　藤垣爐扇申付候事

③ 内竈

上懸藥*
一　白粉　百目
一　日ノ岡石　四拾目
右能摺（よくすり）フノリニテトキ懸（かけ）ル石（いし）の儀（ぎ）は三拾五六匁モヨシ　惣而（そうして）物ニヨルナリ

繪具黒*
一　南京コス　三匁
一　カナハタ　拾匁
右能摺　水飛（すいひ）イタシ　フノリニカハニテトキカクナリ

赤*
一　土朱　一味
右之内江（じょうこう）上々ベンカラ少シ入　フノリ斗（ばかり）

萌黄*
一　白粉　拾匁
一　日ノ岡石　四匁
一　録（緑）青　弐匁五分余
右フノリ　ニカハニテトキ　カクナリ

紺*
一　白粉　拾匁

初代乾山には江戸で認めた『陶工必用』、佐野において著した『陶磁製方』がある。

さらにここに初代乾山の陶法を伝える一冊（写本。宝暦一〇年一七六〇・明和三年一七六六）を見い出したが、江戸入谷村において乾山を支え、その死を輪王寺宮坊官進藤周防守（すおうのかみ）に伝えた（推定）二代乾山次郎兵衛の著した陶法書の写本である。乾山口述を筆記、「初代口述二代筆記」として記録されたが、このたび加賀文庫（都立中央図書館）にその写本を発見。内容、奥書、年紀・書者の花押型などから二代筆記の写本であると判断した。合冊本『樂焼秘傳』中、楽焼陶法・色薬代銀積・『百工秘術・磁工門』抜萃書写の後に編され、素人陶芸楽焼陶法に加えたものと推考する。

冒頭、乾山伝は「極古記法」と記されている。乾山伝は京都押小路焼孫兵衛伝の内窯釉薬・色絵具である。それには媒溶剤（ばいようざい）として白玉・ビードロが入らない。上薬（うわぐすり）を薄く掛けるなど、乾山の目指した絵画的表現を巧みに彩った釉下色絵具であるが、使いこなせる者は孫兵衛・初代乾山迄のこと、二代猪八も凡そ半分の色絵具にビードロを加えている。仁清伝錦手絵具、乾山一流白・黒絵具及び錦手絵具の改変、白絵具を合わせたブレンド色にはビードロが交じるが、孫兵衛伝の釉下色絵具に用いることはなく、やまと絵調の陶器絵付けも江戸では時代遅れの感があった。

絵具の溶解を助け、耐火度を高めるビードロは、江戸後期の趣味者陶芸・陶法書類に現れる特徴である。絵具の安定、素焼素地にも無理なく密着、失敗を防ぐためには楽焼、アマチュア陶芸には必要不可欠の顔料であった。

員濃風之俳諧をよくす　又書画に妙あり　樂銘自樂といふ　尤一己之奇人なり

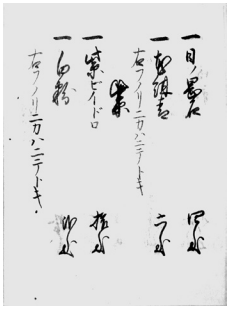
（朱字）好古樂記ハ藤垣爐扇書記にして尤秘書なり　爐扇俗称小林源兵衛　哥詠□をよくす　又樂焼に妙を得たり」

以上は『好古樂記』冒頭の言である。筆者爐扇は姓藤垣、俗名小林源兵衛、天保時代の俳諧人か。

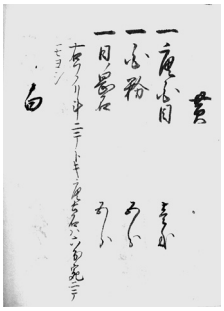
好古老人は樂吉左衛門隠宅手代紋右衛門から楽焼技術を習得、書・画・俳諧（関西俳壇笠下風）に妙ありという。「自樂と称し一己之奇人なり」とあり、ともに楽焼を娯しみ、同書を纏めたものと推考する。乾山焼に関し、「内竈秘書」冒頭には朱字にて次のような爐扇の言がある（本文とは異筆）。

「此秘書ニある法は極古記法にて　當時にかく様は用ひ不申　好古樂記ニ有之法ニ而焼候方　可然よし　藤垣爐扇申付候事」

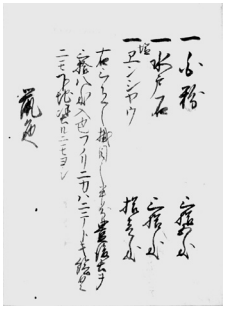
此の秘伝は極めて古く、今日用いることはない。代わって当『樂焼秘傳・好古樂記』に記載した別法を勧めるとした意であるが、乾山焼内窯絵具は押小路焼孫兵衛から伝授された調合が基本である。媒溶剤に白玉・



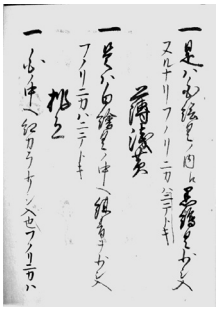
⑥



⑦



⑧



⑨

一　日ノ岡石　四匁
一　花紺青　六匁
右フノリ ニカハニテトキ

紫*

一　紫ビイドロ　拾匁
一　白粉　弐匁
右フノリ ニカハニテトキ

黄*

一　唐白目　壱匁
一　白粉　五分
一　日ノ岡石　五分
右フノリ斗ニテトキ唐土石ハ六分宛ニテモヨシ

白*

一　白粉　三拾五匁
一　水戸石　三拾匁
一　塩エンシヤウ　拾壱匁
右三色の掛目の半分豊後土ヲ三拾八匁入也
フノリ ニカハニテトキ　繪具ニモ　下地塗ルニモヨシ

鼠色*

一　是ハ白繪具ノ内江黒繪具少シ入
ヌルナリ フノリ ニカハニテトキ

薄浅黄*

一　是ハ白繪具ノ中へ　紺青ヲ少シ入
フノリ ニカハニテトキ

桃色*

一　白ノ中へ紅カラ少シ入也
フノリニカワハ

江戸における乾山の陶法は、二冊の自筆書、佐野大川顕道『陶器傳書』が伝える。「内竈秘書」は大方それらに一致するが、厳密には孫兵衛伝と乾山一流陶法を合わせた調合であり、一つに江戸における入手可能な原料・顔料、二つに次郎兵衛による工夫も加えられたものと推考する。

＊上懸薬：懸薬は掛薬、白薬ともいうが、上薬・透明釉薬のことである。『陶工必用』『陶器傳書』（大川顕道手控）ともほぼ一致。なかでも顕道手控「日岡石三十五匁より三十七八匁迄」とは同じである。

＊黒：『陶工必用』とはほぼ同じ。とくに『陶器傳書』黒絵薬の調合とは全く一致。

＊赤：『陶工必用』『陶器傳書』と同一。「土朱」は黄土と同じ役割であるが、色深紅朱ともあり、赤土の意、絵画でも陶磁器でも用いるとある（『本朝画法大伝』一六九〇刊）。

＊萌黄：「緑」に代わり「萌黄」とある。調合は『陶工必用』『陶器傳書』「緑」の調合とほぼ同じ。

＊紺：『陶工必用』『陶器傳書』の「緑」の調合とほぼ同一。乾山は「唐紺青」を用いるが、当書及び『陶器傳書』は「花紺青」とする。両者は同じものである。

＊紫：『陶工必用』に「白粉十匁　日岡石四匁呉洲薬の内色赤ク見ヘ候ヲかけめ五分」とある。

＊黄：調合の割合に関し表示の分と匁が反対か。

＊白：『陶工必用』白絵具略方に「水戸ゟ出候火打石三十め・白粉三十五匁・ゑんせう十一匁」とある。当書と全く同一である。

＊鼠色：『陶磁製方』に「白ゑのく薬へ黒ノ合ゑのくヲ交候・フノリ・ニカワ等分」とある。

＊薄浅黄：『陶磁製方』に「白ゑのぐニ紺ノ合ゑのくヲ少交申候・フノリ・ニカワ等分」。

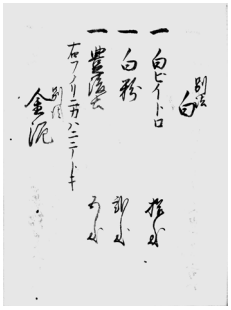
＊桃色：『陶磁製方』に「白ゑのぐニ弁柄丹土ノ上々ヲ少交申候・フノリ・ニカワ等分」。

＊別法白：『陶工必用』白絵具とほぼ同一。白絵具（白絵土）において豊後土を扱う調合は乾山の切り札であ

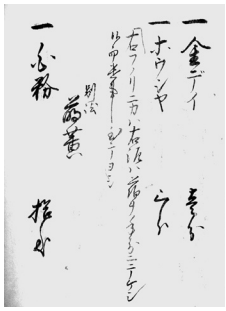
ビードロを用いない方であるが、これは最早古式とされたことが知られる。時代とともに技術、装飾様式は変化をする。やきものは席焼などの影響もあり、素人陶芸が流行。ガラス玉・ビードロを入れ、絵薬を素焼・素地に楽に密着させるなど、絵具の安定、失敗の少ない技法・調合が盛行する。

内窯陶法は、低火度焼成。素焼の素地と絵具、上薬さえあれば、持ち運び可能な小窯を用いて難なく作陶。本焼素地に絵付けを施す錦手絵具の智慧を融合、簡便な製陶方法が工夫されたが、釉薬・土の調合を記した秘書・伝書などが盛行。作陶上のレシピ（技法・陶法など）が寄せ集められた。繰り返し同じことを記録。実際に造るか否かは別として、人から人へ、素人陶芸はその知識を愉しむとした傾向が示される。

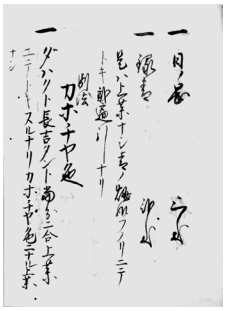
乾山自身、江戸では数寄者の一人であった。調合書は秘伝としながら、乾山焼陶法は秘伝とすること無用也と考えていたことが分明する。



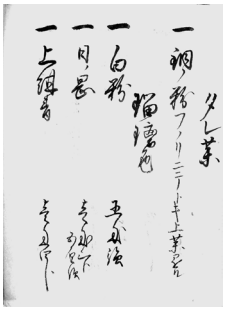
⑩



⑪



⑫



⑬

⑩

別法 白*
一 白ビイトロ　拾匁
一 白粉　弐匁
一 豊後土　五匁
右フノリ ニカハニテトキ

別法 金泥*
一 金デイ　壱分
一 ホウシヤ　三分
右フノリ ニカハ 右泥ハ 箔ヲ手前ニテケシ候而遣事　至テヨシ

別法 萌黄*
一 白粉　拾匁
一 日ノ岡　三匁
一 録（緑）青　弐匁
是ハ上薬ナシ 青ノ焼如 フノリニテトキ貳遍引ナリ

別法 カホチャ色*
一 ダハクト長吉タント 当分二合 上薬ニテトキヌルナリ カホチャ色ニナル 上薬ナシ

タレ薬*
一 銅ノ粉 フノリニテトキ 上薬懸ル

瑠璃色*
一 白粉　五匁強
一 日ノ岡　壱匁三分五厘強
一 上紺青　壱匁四分

るが、江戸では豊後土の入手は困難。そこでここに「別法」と記したか。

＊別法金泥：『陶工必用』では「金泥一匁　ほうしゃ弐分」。『陶磁製方』では「金の消泥壱分　上々透ホウシヤ三厘」とある。

＊別法萌黄：先の「萌黄」と大方同割合であるが、石・緑青がやや少ない。「上薬ナシ」、「貳遍引」とあり、これは素地塗りの調合か。

＊別法カホチャ色：『陶磁製方』に「又カバ色トも可申候歟　白粉五匁　日岡石弐匁七分　弁柄丹土三匁」とあり、カボチャ色の調合をいうか。

＊ダハク：「打白」か。打白粉はおしろい。奈良朝以来使用された鉛粉。唐土ともいう。

＊長吉タン：鉛に硫黄・硝石を加えて焼いたもの（『天工開物』）。鉛の酸化物で鉛丹ともいうが、黄色を帯びた赤色。絵具、また薬用とされる。応永二年（一三九五）堺の鉛屋市兵衛が明人より製法を学び、一七世紀頃から分類が始まり、絵具類の種別品目（品位）に長吉・勝吉・乗久・市兵衛・勝久・正兵衛・光明・菊丹などの銘があったという（「顔料の歴史」他）。「長吉」は人物名、菊丹は菊印があったところからの銘であるが、泉州堺で産する長吉丹は上等とされ、伏見人形の製造法を記した文献によれば、所用の絵具としては「丹、長吉丹か勝吉丹を用うべし」とある（『日本地誌略物産弁』巻四）。

＊タレ薬：還元焼成であれば含まれる銅粉は赤色になる。この現象は黒楽茶碗など釉薬の二重掛けにみられる。

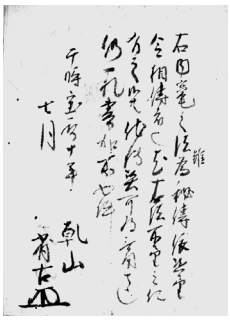
＊瑠璃：孫兵衛伝「紺」である。「白粉十匁　日岡石四匁　唐紺青六匁」とあるが、乾山も瑠璃色とはせず、仁清伝・本窯に「るり薬」とある。

＊交知（趾）青：青というが、緑色の調合。文化文政時代頃から多く使われるが、緑青と青ビードロを混入、素地塗りを行う。日本では青と緑色の呼称が混同。

＊赤繪具：『陶工必用』『陶磁製方』では山黄土に緑礬の焼返し絳礬を少し加えるとある。

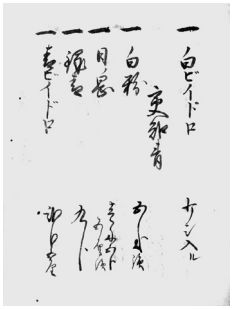
＊京土物：京焼陶器、粟田口・清水焼などのやきものをいう。

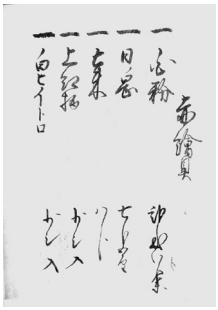
⑱右内竈之法　雖為秘傳
依懇望　令相傳者也　尤
右法所望之仁有之候共
作傳　堅可為無用者也
仍一札書加所如件
干時　宝暦十年 七月
乾山省古（花押）

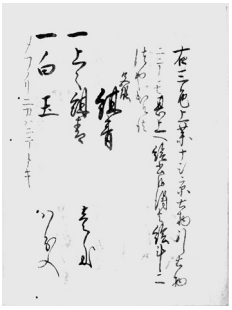

⑱

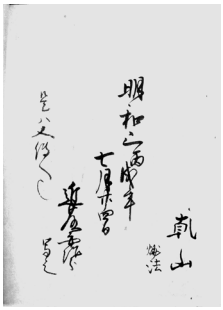
『古画備考』二代目乾山花押
（弟子宮崎富之助殿）

『古画備考』には、
「右之通我等江 末期ニ相送候處 紛無之者也 依之貴方儀 右流レ 御懇望ニ付 右逸々相譲者也 爲後證添書加へ候處 仍如件
明和三年戌三日
二代目乾山（花押）
弟子宮崎冨之助殿」
とある。二代目乾山の花押型、弟子宮崎富之助が確認される。


⑭


⑮


⑯


⑰

⑭
一　白ビイドロ　少シ入ル
交知（趾）青
一　白粉　五匁強
一　日ノ岡　壱匁五分五厘強
一　録（緑）青　九分
一　青ビイドロ　弐分五厘
赤繪具

⑮
一　白粉　弐匁八分余
一　日ノ岡　七分五厘
一　土朱　八分
一　上紅柄　少シ入
一　白ヒイトロ　少シ入

⑯
右三色 上藥ナシ 京土物引土物ニテモ 其上ヘ
繪書候得は 繪斗ニつや出ル法
色能
紺青
一　上々紺青　壱匁
一　白玉　八分入
〆フノリ ニカハニテトキ

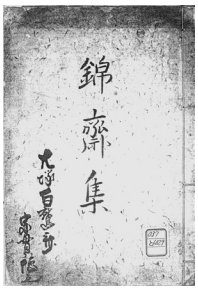
⑰
乾山
燒法
明和三丙戌年　七月廿四日
近藤安治郎写之
是ハ又傳之也

＊引土物：本焼、装飾を施す前の素地をいうか。
＊色能紺青：紺青・白玉の割合は約一対一。『陶器總録』（松田元寧著）では紺青十匁対白玉十匁。三浦乾也伝『陶術秘法書』（井伊直弼著）では花紺青一匁対白玉一匁・唐土五分五厘とあり、調合は『陶術秘法書』に近い。
＊近藤安治郎：浅草駒形絵具問屋に近藤氏の名がある（『本竈樂燒唐物藥秘方全』）。同一人物かは不明。

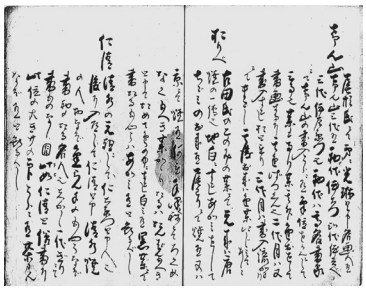
当書「内竈秘書」（「初代口述二代筆記」）は、
1、乾山自筆の二冊『陶工必用』『陶磁製方』
2、大川手控『陶器傳書』の孫兵衛の内窯陶法
3、『陶磁製方』の惣地塗りの一部
以上の各分野から抽出、構成されている。
長吉丹、朱土などは絵画に使用する絵具にみられ、これらの調合から推測し、やきものは楽焼、写しものというよりは、色彩を楽しむ「アマチュア」陶芸の感を深くする。
末尾に、伝となすこと、堅く無用とあるが、乾山はもとよりこれらの陶法書を伝書とすることは念頭になかったものと推察する。それも初代乾山伝とする理由であるが、「乾山省古」とあるところから初代乾山の陶法、それに二代次郎兵衛の工夫も混入するか。初代門人絵師立林何帛らの存在もあり、推測として次郎兵衛からは一つに趣味人、二つに陶工ら三代宮崎富之助、酒井抱一、やがて西村藐庵を通じ三浦乾也の陶術へと伝播。一方、『陶工必用』も進藤周防守勝任、矢田陪氏・矢田陪（部）豊前守、水上蘆川へと伝承、蘆川も俳人であったと推定するが、陶法はこちらからの流出も想定。江戸における初代乾山の陶法は拡散したかと考える。

二、乾山名のある陶法書（乾山焼関係事項を抜萃）

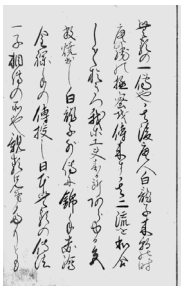
①『錦齋集』：「白鷺齋一流傳」「樂焼藥秘方」
筆者大塚白鷺齋宗貫・書写信政齋為政か・文政七年（一八二四）合冊本の成立明治三〇年か　東京国立博物館



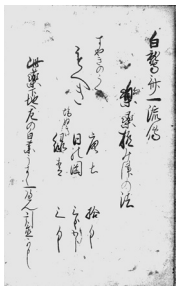
『錦齋集　大塚白鷺齋宗貫博之』①表紙



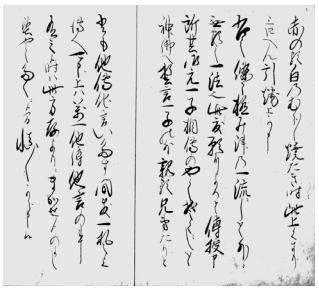
けん山・おりべ・仁清　②



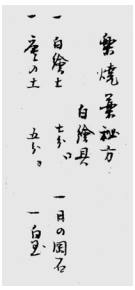
任土齋戚彌兵衛より傳來　③



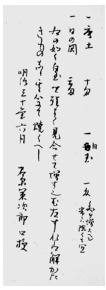
白鷺齋一流傳樂焼極みつの法　④



秘伝の約定（奥書）文政七申暦　⑤
五月晴日傳之　大塚白鷺齋宗貫



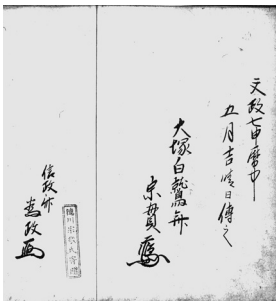
樂焼藥秘方　⑦
明治三十年六月石原策次郎口授⑧



①―『錦齋集』　大塚白鷺齋宗貫傳之―
樂家略史
②　けん山
尾形氏ニて弟ニ光琳と申名画人有　けん山三代有　初代伊エ門　弐代伊兵へ　三代伊左衛門也　初代ハ高名書家ニて　けん山の書入とうニ有　筆位さかんニしてミ事也　藥もるり藥　其外色おさして書画するに　其色ばつくん也　二代目ハ又書入すこしおとれリ　三代目ハ書入流かわりニてま□し　其後出來ハ色藥にじミてあしゝ
おりべ
古田氏のこのみの藥ニて　元來ハ唐焼の一傳也　地白ニすこしあかミさしてちゞミの出来有　尾わりニて焼有又ハ京ニて焼有　何れ手づくねとてろくめなく　もへき藥かゝりたるハ　たんばんもへきト申て　ためて色の中ニすこし白ミ有　黒藥ニて書たるもやうハ　あかミ有と知るべし
仁清
清水の元祖ニして仁右衛門と申人也　後に入道して仁清と申　清水焼の人物なぞ　金らん手のもやうなぞ書初メたる名人也　しかし一代ぎりニて書ものなし（仁清印）此如仁清と俗書に此位の大きサの印とうニ有　茶わんなぞ有と知るへし
③　任土齋
任土齋殿彌兵衛より傳來する所　他家無類の一傳也　其後唐人白龍子來朝の時　唐焼の極密を傳來す　其三流を和合しておきつ　我等工夫する所あらゆる色数焼出し　白龍子外傳に錦手赤繪金襴手の傳授し　日本無類の傳法一子相傳の所也　親類兄弟たりとも一子の外無傳の晴流たり　此度段々の頼によって神佛誓言の上　傳授する所也　穴賢　一書之表堅相守つゝしミ可申之所也
④　―「白鷺齋一流傳」樂藥極みつの法―
すやきのうへ
もへぎ　唐土拾匁　日の岡三匁五分　塩ぬき緑青三匁
此藥下地へ左の白藥うすく一遍引置可申候（略）
⑤　右の條々極みつの一流ニして外ニ無類の一法也　此度願によって傳授申所　其御元一子相傳のやくそくにして神佛へ誓言　一子の外親類兄弟たりととも他傳他言いたす間敷　一札の上傳へ可申上ハ　萬一他傳他言の事有之候時ハ　此方存よりニまかせ候のよし　堅やくたくニ候間　慎〳〵可上申候
⑥（下段図）文政七申暦中　五月晴日傳之
大塚白鷺齋宗貫蔵（花押）信政齋　爲政（花押）
⑦　―樂焼藥秘方―
白繪具・赤繪具・黒絵具・青繪具・黄繪具　以上五種（略）
⑧　明治三十年六月　石原策次郎口授

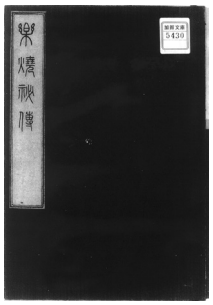
『錦齋集』は「白鷺齋一流傳」（文政七年信政齋為政写）、「樂焼藥秘方」（明治三〇年石原策次郎口授）の二部から成る。玉水焼伝来の陶法、唐人白龍子の伝える薬法の二流を融合、日本無類の伝法とあるが、同書に記された赤絵金襴手の伝授、唐人白龍子とは誰なのか。乾山焼も三代続くとあるが、初代は伊エ門・二代伊兵へ・三代伊左衛門、光琳は乾山の弟。乾山は書に高名ともあるなど、真否が混淆、出処はいずれにあったものか。伝承とすることの不確実性が認められる。
1、文化文政期、京焼清水・粟田口は清水焼と総称。織部焼も尾張、清水両所で作陶、京焼に於ける模倣が知られる。
2、仁清は清水の元祖、名人とあるが、仁右衛門と称するなどの誤りがみられる。

③（最上段の続き）
すミ焼釜の圖

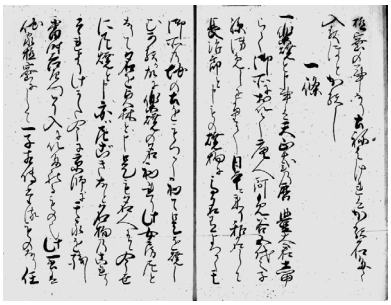


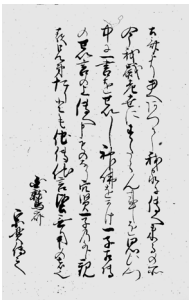
⑥文政七申暦中五月吉晴日傳之
大塚白鷺齋宗貫
（花押）
信政齋爲政（花押）

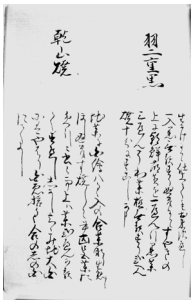
②『樂焼秘傳』：
筆者大塚白鷺斎宗貫・成立年代不明（文政時代か）　都立中央図書館加賀文庫

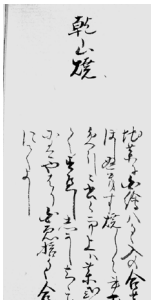

①『樂焼秘傳』表紙

②樂焼窯図


③一條・その他


④白鷺斎宗貫博之・薬法など


⑤羽二重黒・乾山焼


左図は右拡大図

①　―『樂焼秘傳』　大塚白鷺齋宗貫―
白鷺齋宗貫傳之
（『樂焼秘嚢』手本。上部印章「武田正遍」）

②　樂焼窯図
かま寸法・焼かけん仕懸之法・薬仕懸之法・つちのすいひ

③　一條
一樂焼と申事は　天正十弐の暦　豊太君しゅらく御所において　唐人あめや五代の子孫　御免しによりて日本ニ来り和名して長治郎ト申もの　焼物に高名有　よって其御所の土をもって初て是を焼しむかるが故に　樂焼の名初れり　此女房尼となりて名を貞林と申　是も名人にて今世に尼焼と申亦ハ尼ごきなと名物のこれり　それより此かた今に京師に其家を残し　當時吉左衛門了入にいたれるもの也　此一書は他家極密にして　一子相傳たるものなり（任）

④　任土齋よりゆへあって我家に傳へ來るの所　今我歳老世にすたらん事を思ひ　門中に一書をせいし神佛をかけ　一子相傳のせい言の上　傳へ申ものなり　穴賢　一子の外　親類兄弟たりとも他傳他言堅無用の者也　白鷺齋宗貫傳之

薬法
こうちもへき・しの白・藤四郎写黄瀬戸・宗入黒・一入黒・きい・赤・同光悦・なミ黒・うわ薬・薬買所　吟味之上直段下直ニ定るなり　大坂道修町三丁目小西与兵衛・京烏丸松原下ル所吉野屋正兵衛・薬直段いろ〳〵
大かま寸法の事・小竈寸法の事・火仕懸の事・薬製法の事・土のすいひの事・南京染附の法

極蜜もの傳
朝鮮萌黄・尼くすり・鹿子赤・青山黒・火焼時きひしく大心黒・極之蜜るり薬
南京極蜜金襴手之事
あか・もへき・きい・むらさき・くろ・るり・金・銀・こうちあめ薬・うわむら薬・おりへ薬・極密火長焼田中黒・羽二重黒

⑤　乾山焼
地薬に白繪八匁入の合薬なり　生懸し　ほしぬき　す焼して
書畫色薬ため引ニ書候而　上ハ薬弐遍んかるくすへし　しかしちぢみ地　大白には　やはり白ゑ拾匁合のしの白にてよし（略）
焼つき薬の法・同筋引薬の法・たき竈の法・本竈薬の法
右は清水 瀬戸ニ而焼本竈ノ法なり

『樂焼秘傳』は窯図に始まり、かま寸法・焼加減仕懸之法・薬仕懸の法・つちのすいひ・一條とした項目に分かれ、白鷺斎宗貫とある。

白鷺斎（生没年不詳）は、大塚白鷺斎宗貫、文化・文政時代の人と推定するが、当伝書の原本は、玉水焼三代「任土斎」弥平衛の陶法書である。「ゆへあって我家に傳へ來るの所」とあり、白鷺斎へ伝えられたが、白鷺斎老世に至りそれを門弟に相伝すべく纏めたものと推考される。

が、如何なる理由、経緯によって白鷺斎へ伝承したのか、白鷺斎に関しても詳しいことは不明である。

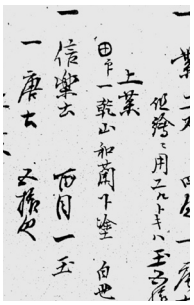
玉水焼は、加賀大樋焼と同じく楽焼脇窯の一つである。樂家四代一入（一六四〇―九六）庶子一元（？―一七二二）の創始であるが、一入は二七歳の折、乾山従兄弟尾形平四郎を養子に迎える。のちの宗入であるが、乾山も『陶磁製方』に樂家は一入と申す者より懇意と述べており、長じて一元、平四郎（宗入）は家督争いとなる。元禄九年一入没後一元は綴喜郡井出玉水村へと移転するが、樂を名のれず、玉水焼を興し、一入伝の朱薬を継承、光悦写、織部黒写などを得意とした。

二代一空は早世、弟任土斎（？―一七六三）が三代を継承。が、妻なく子なく血脈は絶え、一元母方の親族伊縫甚兵衛が樂翁浄心を名のり四代を継承。伊縫家菩提寺西福教寺過去帳には「当家樂根本ノ人」とあるという。

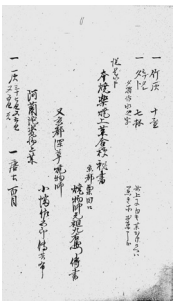
同書には薬法のほか、薬買所として大坂道修町三丁目小西与兵衛、京烏丸松原下ル所吉野や正兵衛の名がみられる。（内容には一部重複がある）

③『樂燒藥秘法』：「本竈樂燒之法赤樂」「本燒樂燒上藥合様秘書」「樂燒藥秘法之書」「今燒合藥之次第」筆者小幡佐五郎・杉弥左衛門・窪田助左衛門他・元治二年（一八六五）成立　朝比奈書写　東北大学図書館狩野文庫

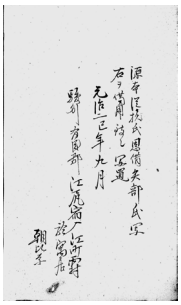
『樂燒藥秘法不許他見朝比奈蔵本』①



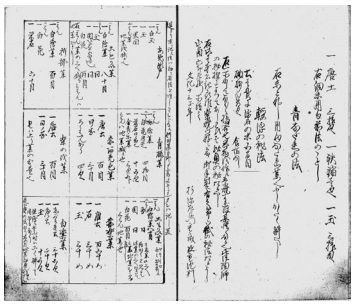
乾山和蘭下塗　②



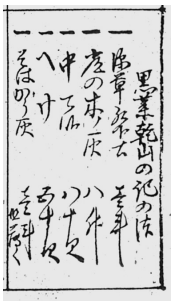
京都深草燒物師木幡佐五郎傳　③



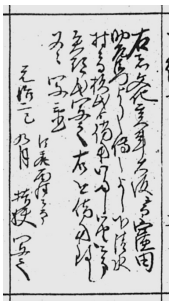
矢部氏写・元治二年九月朝比奈　⑦



杉弥左右衛門・河田甚太郎　④



黒藥乾山の記の法　⑤



文化亥年窪田助左衛門傳　⑥

①　―『樂燒藥秘法』（不許他見　朝比奈蔵本）―

―「本竈樂燒之法赤樂」―

一炭燒にても出来候赤樂之法

一上藥一唐土百目　一日ノ岡石四拾目・一青一唐土百目

一日ノ岡卅二目一緑青卅目　但上藥唐土百目（略）

一紫藥　大坂屋村田宗清

一紫ゴス四匁一唐土百目一日ノ岡卅匁

但繪ニ用ユルトキハ玉五拾目加候也　玉ハ硝子也

②

一上藥　一乾山和蘭下塗　白也

一絵の具調所ハ　京からす丸竹屋町下ル西入わた屋徳兵衛むこふ白粉屋求馬・二条通本明院百足屋小兵衛・五条通伏見海道西へ入伊世屋出雲

文化十三子年在□之節杉承り置候（略）

③

―「本燒樂燒上藥合様秘書」―

京都粟田口　燒物師元祖九右衛門傳書

又京都深草燒物師　小幡佐五郎傳共有り

（次頁）寛保癸亥秋（寛保三年・一七四三）

京深草燒物師　小幡左五郎正供判

―「樂燒藥秘法之書」―地藥之法秘事

④　右此壱本は紀州□樂燒御好ミニ而御手製有之節御蔵の秘法たるよし　山角六郎左衛門所持之

文化十三子年（文化丙子・一八一六）

杉弥左衛門重成改重澄判

是ヨリ末ニ記ス法ハ初ニ有法と同しきも有ル　河田甚太郎ち書又キコシタレハ記し置

―「今燒合藥之次第」―

⑤　黒藥乾山の記の法

一　深草水下土壱斗　一　常の木ノ灰八升

一　中てい八十匁　一　へけ（鉄）五十匁

一　そはから灰壱斗　但薄く（竹灰の替り）

⑥　右は文化亥年大坂ニ而窪田助左衛門より之傳之よし　下清水村ニ而杉氏ち借用いたし候由ニ而　矢部氏写之　右を借用致し又々写之書　元治二乙九月　江尻西村ニ而　□□写之

⑦　源本従杉氏恩借矢部氏写　右ヲ借用致し写置　元治二已（乙）年九月

駿州有渡郡江尻宿入江町西村　於寓居　朝比奈

当書は「本竈樂燒之法赤樂」「本燒樂燒上藥合様秘書」「樂燒藥秘法之書」「今燒合藥之次第」以上の四部から成る。

――――――

＊百足屋小兵衛：「京都二條東洞院東入萬繪具所畫筆書刷毛品」とある（『絵具染料商工史』）。

＊「本燒樂燒上藥合様秘書」：小幡佐五郎伝は阿蘭陀様式を主体とするが、寛保三年とあり、乾山燒では当時活躍していた猪八の時代、猪八得意の陶法であり、その折の流行でもあった。赤絵具では金朱とあるが、仁清は極上の弁柄丹土・金珠を用い、乾山は多く緑礬を燒返し礬絳と為して使用、猪八は弁柄を工夫し用いるとある。赤絵具には乾山も苦心、今以って定まった作り方はないと述べる。

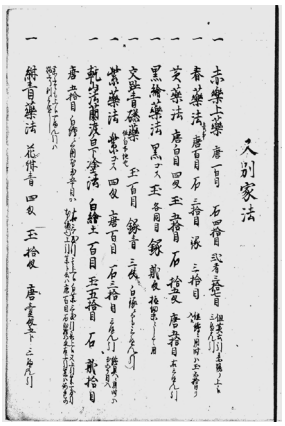
＊是ヨリ末ニ記ス法ハ初ニ有法と同しきも有ル　河田甚太郎ち書　又キコシタレハ記し置：表に纏めて「あめ瀬戸・青磁藥・こもかい藥・赤あめ色藥・赤樂藥・折部藥・白樂藥・光悦藥・留利色藥・青葉色・浅黄色・白繪・黒繪」とあり、硯石之燒法などの記載もある。

＊今燒合藥之次第：表に六六種の今燒とする絵具の調合を纏めているが、末尾に、

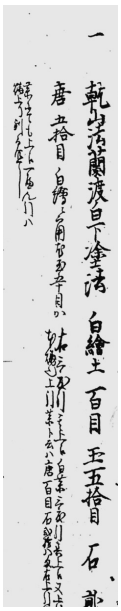
「右は文化亥年大坂ニ而窪田助左衛門よりの傳のよし　下清水村ニ而　杉氏ち借用いたし候由ニ而　矢部氏写之　右を借用致し　又々写之書　元治二乙九月　江尻西村ニ而□□写之」

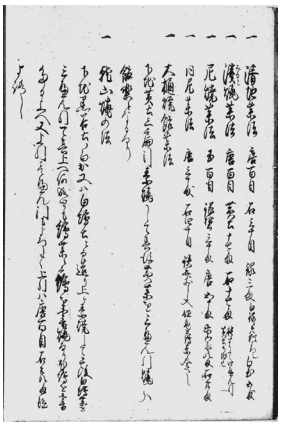
とある。文化亥年は一二年（一八一五）。が、元治二年（一八六五）は四月七日以降慶応となり、九月はないが、明治維新の三年前である。

④『樂焼藥法家々之傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』：「七寶藥傳」「又別家之法」「いまり南京焼付藥法」「窪田傳上繪藥法」「二保（ママ）樂藥別法」「遠山傳」
筆者・年代不明　東北大学図書館狩野文庫

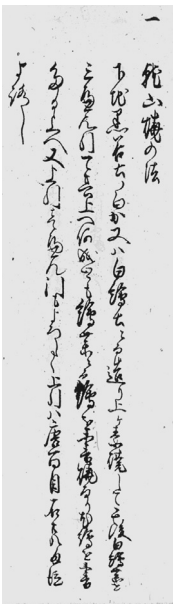


③　又別家法
乾山法蘭渡白下塗法　左図は拡大図





④　又別家法
乾山焼の法
左図は拡大図



①②　―『樂焼藥法家々之傳書寫
なんきんいまり焼付繪具藥法集書』―

―「七寶藥傳」―

③　―「又別家之法」―

一　赤樂上藥　唐百目　石四拾目　弐者（又は）三拾七目
一　青藥法　青ノ事　唐百目　石三拾目　録三拾目
一　黄藥法　唐白目四匁　玉五拾目　石拾五匁　唐五拾目
一　黒繪藥法　黒ゴス　玉各同目　録貳匁
一　交趾青磁藥　但白下地也　玉百目　録青三匁
一　紫藥法　紫ゴス四匁　唐百目　石三拾目
一　乾山法蘭渡白下塗ノ法（らんわたりしたぬり）　白繪土百目
　　玉五拾目　石貳拾目　唐五拾目
　白繪ニ而用　尤玉五十目か　右三度引　其上へ白藥三度引
其上へ又上引藥一度引　本焼也　上引藥ト云ハ　唐百目　石
弐拾八匁　右上引藥ハ何れの藥にても上へ一遍ん引ハ　焼上
リ別而宜候
―「又別家之法」―

④
一　清地藥法　唐百目　石三十目　録三匁
一　湊焼（みなと）藥法　唐百目　黄土十七匁　石十七匁
一　尼焼藥法　玉百目　録礬三十匁　唐五十匁
　　ホウシャ八匁　石廿匁
一　同尼藥法　唐三十匁　石四十目　鉄弁少し入（略）
一　大樋焼飴藥法　下地黄土三扁引　素焼して其後黄
　　藥を三扁ん引焼ハ飴藥となるなり
一　乾山焼の法
　下地黒谷土ノ白か　又ハ白繪土ニ而造リ上ケ　素焼して
其後白繪藥を三扁ん引て　其上へ何成とも繪藥ニ而繪を書焼
なり　尤　繪を書たる上へ　又上引壱扁ん引もよろしく　上
引ハ唐百目石廿八匁位よろし
―「又別家之法」―
―いまりなんきん焼付藥法―
　赤繪法拾色・鉄皮製法・同焼付藥法　黒藥繪具合方法・黒
藥法八色・同焼付黄繪藥之法・同焼付繪藥法・金合様法・銀
合方法・いまりなんきん焼付藥法　繪藥法
―「窪田傳上繪藥法」但焼付藥也―
　右はたき釜なり　炭釜之節ハ石をひかへてよろしく候
―「二保（ママ）樂藥別法」（薪窯と炭窯）―
―「遠山傳」―
　白下引藥（白地塗り）・白下引ノ上へ・青・黄・紫・青磁（略）

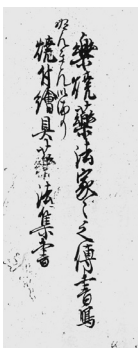
乾山焼には画讃・琳派・古陶磁模写の三つの基本様式がある。これは阿蘭陀様式の模倣であるが、『陶工必用』には「異域本邦ニ不依其國々所々ノ土ヲ取寄」とあり、以下の作品が伝世する。内窯土はいずれの土も可と述べる。国内陶磁器・志野焼・織部焼・唐津焼・有田焼・京焼異国陶磁器：絵高麗・古染付・南京赤絵・呉須赤絵・安南・宋胡録・高麗茶碗・阿蘭陀様式藍絵・色絵

陶法書中「窪田傳上繪藥法」は『千家樂焼古實附陶器出処書』「今焼合藥之次第」と同じく大坂の窪田（くぼた）助左衛門の伝えるところ、乾山の阿蘭陀様式を主体とする。

「二保樂藥別法」は、薪（まき）窯と炭（すみ）窯。薪窯は薪、炭窯は炭を燃料に用いる内窯であるが、炭は山の如く丸く盛るとあり、炭窯は多く京焼・九谷焼、絵薬の調合において日の岡石を控えて良いとある。薪窯は有田焼にみられる。

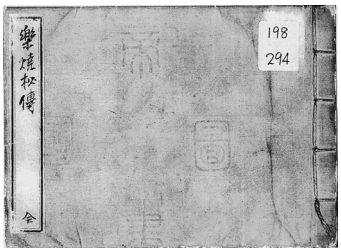
「遠山傳」に関してはよく解らない。

①　『樂焼藥法家々之傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』表紙

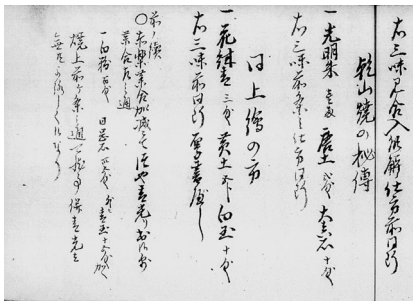


②　『樂焼藥法家々之傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』表題

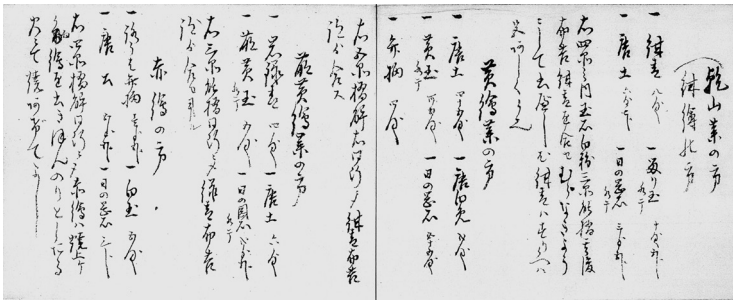
⑤『樂燒秘傳 全』：「難波樂燒秘書」「樂燒口授秘書」
筆者雑喉場樂燒師杢兵衛・成立年代不明　国立国会図書館



『樂燒秘傳　全』表紙　①

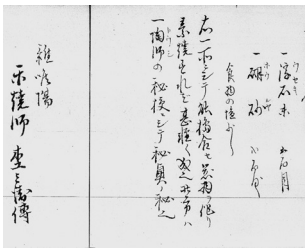


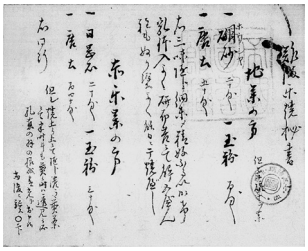
乾山燒の秘傳　⑩



乾山藥の方・黄繪藥の方・萌黄繪藥の方・赤繪の方　⑮

（下段上）雑喉場　樂燒師杢兵衛傳①の内
（下）「難波樂燒秘書」⑩の内





①　―『樂燒秘傳　全』―
薄黄・しの玉・一入・黄瀬戸・黄・赤・同さひ・古御瀬戸・左入黒・尼藥霜降・あめ色・紅梅赤・長入黒（略）
雑喉場　樂燒師杢兵衛傳
―「難波樂燒秘書」―
地藥の方・赤樂藥の方・黒樂藥の方・淺黄藥の方・くわんにうの方・紺繪の方・赤繪の方・白繪の方・黄繪の方・黒なだれの方・青なだれの方・白なだれの方・黒柿の方・金燒の方

⑩　乾山燒の秘傳
一　光*明朱壱匁　唐土弐匁　大*真石十匁
右三味前条之仕方同断
同上繪の方
一　花紺青三匁　黄土五分　白玉十匁
右三味前同断　厚書べし
前ノ續
○赤樂藥合加減ニて　つや青光リ出候處　藥合左之通
一　白粉百匁　日岡石卅五匁　升ニ青玉十五匁加へ燒上
前ヶ条之通可然事　併青光在無共よろしく候なり（略）
青樂丹礬藥
一　上白粉百匁　一　緑青三十匁
一　青玉十五匁　一　日岡石卅弐匁
右四味の内緑青ハすれ兼候故　緑青丈ケ一味能々摺　水少入練り　三味入能すり濃き布苔入　はちみつのようニして壱へんぬり乾し　二へん塗乾し　三へんぬり徳と乾し　其後二味の上藥壱へんかけ　よく乾し候而燒べし
尤素燒の上に乾山下塗藥二へん下塗りいたし候而よろし下地土色赤ク候而ハ　青色よろしからず

『樂燒秘傳』奥書には「雑喉場樂燒師杢平衛傳」とある。「難波樂燒秘書」「樂燒口授秘書」を含む三部から成る合冊本であるが、大坂伝であり、『樂燒秘嚢』の影響が考えられる。雑喉場、樂燒師杢兵衛、難波など、それらの関係、詳しいことは不明である。

『樂燒秘傳』には「薄黄・志の玉・一入黒・黄瀬戸・黄・赤・丼ニ上藥・同さひ（鏽）・古御瀬戸・左入黒・尼藥霜降・あめ色・紅梅赤・長入黒・折部黒・同白・同薄黄・金合方・同銀合・瑠璃・薄黄・黄・赤・紫・樂淺黄・羽二重黒・上藥・□黒樂・あめ色黒樂・口授・器物軽拵方秘物」とある。

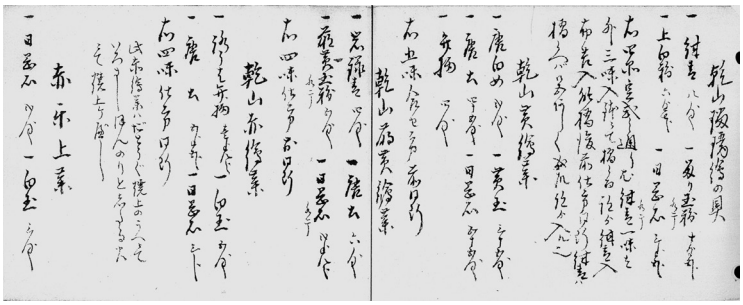
「口授」には「尼燒藥をかけ　その上へ黒藥を掛け燒候へバ　霜降り黒又胡少黒トモ云黒出來申候」、「□藥之中へアンズヲ少シ入候得ハ　□シッカリト留ル也口傳」。「器物軽拵方秘物」には、白土・赤土いずれにてもそれに浮石・硼砂、食塩少し加え、成形、素燒をすれば器物の手取りが軽くなるなど、これは陶師秘奥の秘也とある。

「難波樂燒秘書」は乾山燒の秘伝を掲載。赤絵・紺絵・瑠璃絵・黄絵・萌黄薬などの色絵具の調合、「光悦藥」「宝山燒の事」、「手紙の写」として乾山白絵具・「雪白」に関する事項を記す。

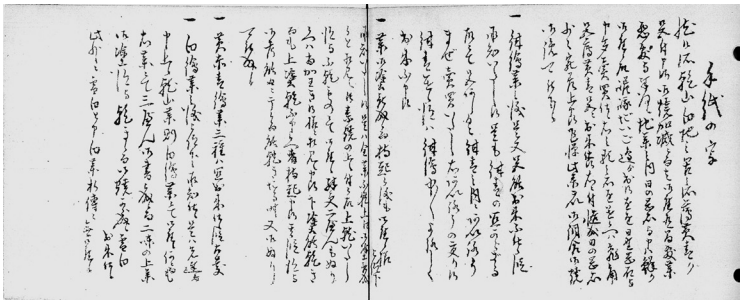
乾山白色地に関しても、売買されている「日野岡石」を使用すれば、結果、薄黄青色を呈するとあり、それ故、所持する慥かなる「日の岡石」を差し上げるとある。紺絵具も然り、顔料に関する注意、素人陶芸への教示が記されている。

『楽燒秘嚢』を手本としたか。

＊光明朱：丹の一種。長吉丹・菊丹などがある。
＊大真石：不明。白玉をいうか。



乾山瑠璃繪の具・乾山黄繪藥・乾山萌黄繪藥・乾山赤繪藥・赤樂上藥⑯



手紙の写⑰

⑮　乾山藥の方　紺繪の方

一　紺青八匁　一　留り玉水テ十匁五分
一　唐土六匁七分　一　日の岡石水テ三匁五分
右品々之内　玉　石　白粉三品能摺　其後布苔　紺青を合せむらなきようニして書べし　尤　紺青ハすり候へハ　色あしく候也

黄繪藥の方・萌黄繪藥の方・赤繪藥の方（略）

⑯　乾山瑠璃繪の具（左記の紺繪の方と同一である）

一　紺青八匁　一　留り玉粉水テ十匁五分
一　上白粉六匁七分　一　日岡石水テ三匁五分
右四品定式の通り　尤　紺青一味を升三味入　鉢ニて摺候而跡（後）ゟ紺青入　布苔入　能摺後前仕方同断　紺青ハ摺候へバ色アシク成故　跡ゟ入ル也

乾山黄繪藥

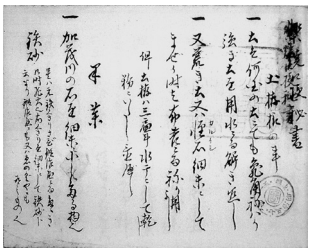
一　唐白め弐分　一　黄玉三十五匁
一　唐土四十五匁　一　日岡石五十五匁
一　弁柄四匁
右五味合セ方　前同断

乾山萌黄繪藥

一　岩録青四匁　一　唐土六匁
一　萌黄玉粉水テ　五匁　一　日岡石水テ弐匁八分
右四味仕方前同断

乾山赤繪藥

一　ろうは弁柄壱匁八分　一　白玉五匁
一　唐土五匁五分　一　日岡石三分（匁か）
右四味仕方前同断



「樂燒口授秘書」⑱

此赤繪藥ハ口とうぐ燒上のうへニていろよし　ほんのりとしたる火ニて燒上ケべし（略）

⑰　手紙の写

然ル所　乾山白地之筈の所　薄黄青ク色付申所　御燒加減ニては御座有間敷　藥悪敷と筆取候　地藥の内日の岡石と申ハ口ク御座候故　嗜啄だいご邊ゟ出候を（ママ）を　日野岡石と申多賣買仕候　右の類の石を遣候へハ　兎角色薄黄青色ニ出来仕候　右ニ付槌成（たしかなる）日の岡石少々宛差上申候　乍憚　此藥ヲ以　御調合　御燒　御續可被下候

一　紺繪藥之儀　是又色能出来不仕候段　承知いたし候　是も紺青の宜（よろし）からざる故ニて　色あしく　紺青の内ニ何いろかまぜ賣買いたし　右何いろかの交り候紺青遣い候得ハ　紺繪中〳〵よろしく出来不申候

一　藥御塗被成ニ而　指起候儀も御座候様被仰下　承知いたし候　是ハ金藥不乾上へ御塗被成候と拝見し候　素燒の上へ付候故　上乾いたし徳と不乾ものにて御座候　殊更ニへんもぬり候へハ口かわき候様と相見へ申候　下塗能乾き而も上塗乾不申候へは指起申候　其段徳と御考能々ニテ候而　能乾きたる時　又御ぬり可被成候

一　黄赤青繪藥三種ハ宜出来仕段大慶

一　白繪藥之儀被仰下承知仕候　是ハ先達而申上候乾山藥　則白繪藥ニて御座候　何ニ而も右藥ニて三べん御書被成候而　二味の上藥御塗　徳と乾き候而御燒可成候　雪白出来仕候　此外ニ雪白と申　白藥相傳ニ無御座候

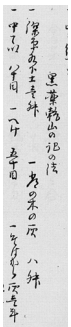
⑱　―「樂燒口授秘書」―

土拵様の事・黒藥・赤藥・上藥・白藥・地藥上藥之事・燒用傳・北久寶寺町*繪具屋吉兵衛藥よし・傳授・地藥傳・上藥傳・布苔傳・澄泥硯（チョウデイケン）の法（此傳唐もの也）・燒従之傳・同法

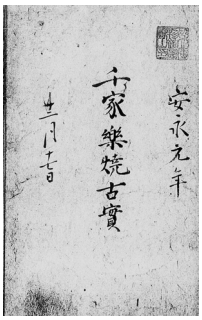
＊北久寶寺町繪具屋吉兵衛：現大阪市中央区北久宝寺町一―四丁目。小間物屋が密集、堺筋には絵具屋・紙屋・木綿屋などの商人がいたとされる。

⑥『千家樂燒古實附陶器出処書 完』：「今燒合藥之次第」「樂燒藥法」「千家樂燒古實」「陶器出処附」「本竈樂燒之法赤樂」「本燒樂燒上藥合様秘書」筆者・成立年代不明　寛保三年（一七四三）・安永元年・文化一二年・同一三年・文政元年（一八一八）　東京国立博物館

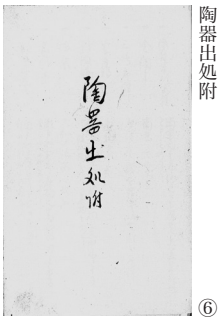
『千家樂燒古實附陶器出処書 完』①



黒藥乾山の記の法　②

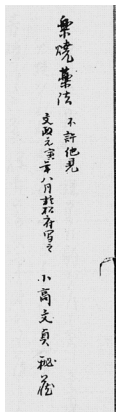


窪田助左衛門より借写之　③

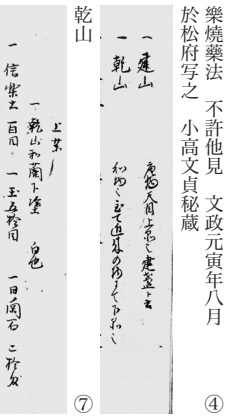


安永元年千家樂燒古實十二月十七日　⑤

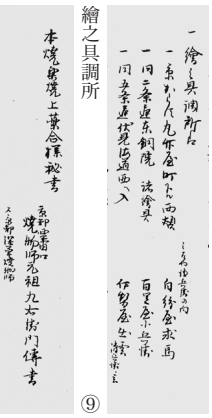
陶器出処附　⑥



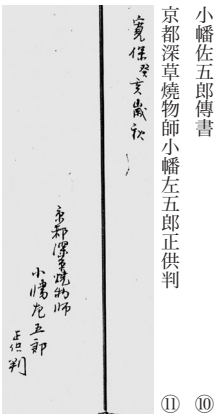
樂燒藥法　不許他見　文政元寅年八月於松府写之　小高文貞秘蔵　④



乾山　⑦



乾山和蘭下塗　⑧



繪之具調所　⑨

小幡佐五郎傳書　⑩

京都深草燒物師小幡左五郎正供判　⑪

① ―『千家樂燒古實 附陶器出処書 完』―
―「今燒合藥之次第（窪田助左衛門伝）」―
古代白ノ上薬也　キツツクロイニモ用（略）
萌黄藥・黄藥・黒藥之法・赤藥・紫藥・金の合・銀の合・赤繪藥・青藥・黄繪藥（略）
② 黒藥乾山の記の法
一深草水下土壱升　一常の木の灰八升
一中てい八十目　一へけ五十目
一そはから灰壱斗 但しうすく（略）
③ 右は文化亥年大坂にて窪田助左衛門より借写之　又同子年京都にて拝借之写添之書也　猶秘法共書添可申事（略）
④ ―「樂燒藥法」―
不許他見　文政元寅年八月於松府写之
小高文貞秘蔵
―「樂燒藥法」（小高文貞蔵とは別本）―
都而艶藥・地藥・黄・青・黒・青磁・萌黄・ゴス黒・白緑青青磁・釜の圖（藥スリ棒・ニウ鉢）
⑤ ―安永元年「千家樂燒古實」十二月十七日―
尼燒ト云ハ初代長次郎母也　至テ古キ物（略）
初代朝次郎ト云此ヲ朝鮮ノ人ト云 千利休時代
二代尼燒ト云　朝次郎母也（以下三代道入から歴代へと続き、名物利休七種茶碗「早船・検校・臨済・大黒・東陽坊・鉢開・木守」）
⑥ ―「陶器出処附」―
染付芋頭水指・金襴手・三嶋唐津・雲鶴・丹波焼・信楽・青江手（略）
⑦一乾山　和物也至て近來の物にて下品也（略）
一仁清　京御室の里ニてやく近代もの也下品
―「本竈樂燒之法赤樂」―（上薬など古法含）
大坂屋村田宗清
一紫ゴス四匁　一唐土百目　一日ノ岡石卅匁　但
繪ニ用ユルトキハ玉五拾目加ル也（略）
⑧ 上藥　一乾山阿蘭陀下塗　白也
一信楽土百目　一玉五拾目
一日ノ岡石二拾匁　一唐土五十匁
上藥　上々唐燒白繪正味
一唐土百目　一日ノ岡四拾目
⑨ 繪之具調所は
一京からす丸竹屋町下ル西入　わたや徳兵衛の向白粉屋求馬・一同二条通東銅院（本明院）諸繪具　百足屋小兵衛・一同五条通伏見海道西へ入伊勢屋出雲清兵衛こと
（別記に京五條通橋東弐丁目御用達伊勢屋清兵衛）
⑩ ―「本燒樂燒上藥合様秘書」―
京都粟田口燒物師元祖　九右衛門傳書
又京都深草燒物師　小幡佐五郎傳書ニアリ
（これは『樂燒藥秘法』朝比奈本に同じ）
⑪ 寛保癸亥歳秋
京都深草燒物師　小幡左五郎正供判

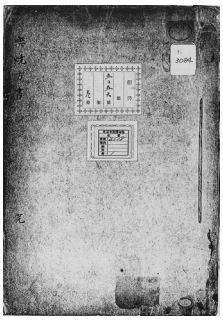
『樂燒藥方』（皿頁小高文貞蔵本）と同一内容を含む。寛保三年（一七四三）安永元年（一七七二）文化亥年（一二年）同子年（一三年）文政元年（一八一八）の紀銘がある。乾山・仁清焼ともに近代もの・下品とあるが、文化・文政期の煎茶趣味・中国志向を伝えるなど、古代中国では舜帝が川浜に陶する、日本では聖徳太子が深草の里に薬を興すとした逸話を掲載。織部・遠州、紹鷗・利休翫びのみち、千家と茶人名を記すが、京都深草燒物師小幡佐五郎は寛保癸亥年秋『本燒樂燒上藥合様秘書』を著し、

「清水粟田口の偶に選出　黒藥を修練して家々の産となし　好む者多しと雖も容易にこれを許さず　秘したる故　人もこれを伺うことあたわず　問答のことあるを梓するところなく　崇伝を著す」

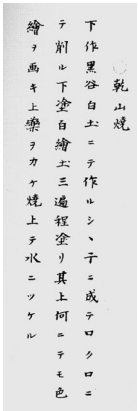
と述べる。単冊の陶法書を集成、合冊本は内容・伝者・年紀も類似、重複・誤認なども多く、確たる資料に基づくか否かは疑問である。

絵具屋に大坂屋村田宗清の名がある（『本竈樂燒之法赤樂』）。

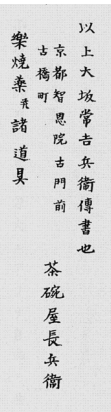
⑦『樂焼方書 完』：「樂焼方」「樂焼之方書」「樂焼藥并諸道具」筆者・成立年代不明　東京国立博物館



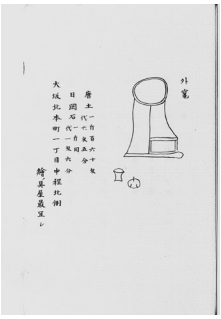
『樂焼方書 完』表紙　①



乾山焼　②



大坂常吉兵衛傳書　樂焼藥并諸道具
茶碗屋長兵衛　③



大坂北本町一丁目中程北側
繪ノ具屋最宜シ　④

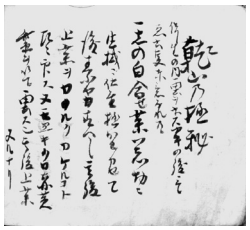
① ―『樂焼方書 完』―
―樂焼方・圭齋傳―
黒早焼（緑青七匁・鉄皮二匁・長吉丹十四匁・真鍮泥十五匁）・別方・瑠璃焼・青磁・赤樂法・上藥・地藥・青藥・白藥・黄藥・黒藥・幕藥・乾山焼。

② 乾山焼
下作黒谷白土ニテ作ル　シラ干ニ成テロクロニテ削ル　下塗白繪土三遍程塗リ　其上何ニテモ色繪ヲ画キ　上藥ヲカケ　焼上テ　水ニツケル
交趾焼・三島焼・瀬土焼・白繪藥・茶繪藥・瑠璃繪藥・錦手ノ赤繪藥・鳶色繪藥・赤繪藥・黒繪藥・青繪藥・淺黄繪藥・紫繪藥・樂藥早藥赤・輕石其外土カタメノ法
以上圭齋傳ナリ

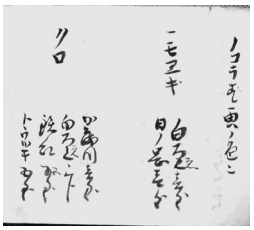
―樂焼之方書・常吉兵衛―
赤樂之法・黒樂之法・白樂之法・繪画之法・形入之法・再ヒ竈ニ入ル法・ヒスミヲ直ス法・黒樂掛目之法・黒樂ニ白画ヲ上ル法・銘印ニ藥ヲ不掛法（略）
焼物画ヲ写ス法
紙ハ西ノ内カ又杉原カ宇田紙　先ス紙ヲヨクモミ板ニヒロケ刷毛ニテ左ノ水ヲ引　日ニ干シハラエハ荒キ粉落ナリ
③ 以上大坂常吉兵衛傳書也
京都智恩院古門前古橋町　茶碗屋長兵衛
―樂焼藥并諸道具（『樂焼秘嚢』）―
④（製土之法以下内窯陶法・藥・窯図）
大坂北本町一丁目中程北側　繪ノ具屋最宜シ

楽焼方圭斎伝、大坂常吉兵衛伝である。
絵具・諸道具商茶碗屋長兵衛は真葛長兵衛であり、「石野佐次衛門樂焼法」にも現れる。黒楽に白画を入れる法は、乾山焼二代猪八工夫の陶法。「珉山焼青藥」。黒早焼薬は合黒楽釉、黒色顔料に加茂川石を使わない黒楽釉。

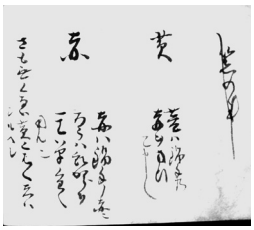
⑧『繪藥・釉藥配合帳』：筆者・成立年代不明　三田市教育委員会



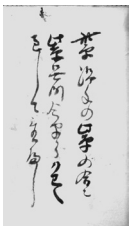
「乾山の極秘」　①



モエギ・クロ（絵具）　②



黄・赤（絵具）　③



紫（絵具）　④

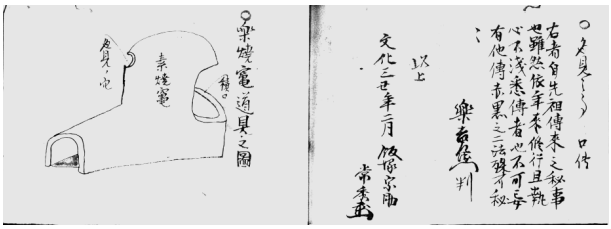
① 乾山の極秘
但し生の内 画ヲ書　スヤキの後ニて ゑ書夏東然なれ共
一しの白合せ藥　器物ニ生掛ニ仕置　極かわカセて後　素ヤキすべし　其後上藥ヲカルクカケルコト
左ニ印ス　又モエキ　クロ　赤　黄　紫ヲ以て画ス也
其後上藥スルナリ
② ノコラす画ノ色也
モエギ　白ろク壱匁　日ノ岡壱匁
クロ　加茂川壱匁　白ろク三分　鉄紅五匁　トウツチ五匁
③ 黄　黄ハ錦手の赤ヲ用ひと申也
赤　赤ハ錦手ノ赤ニ　ろうハ紅からト天草くわへ用也　さも無く而ハ黄ニむくゑトシルヘシ
④ 紫　錦手の紫の合也　紫呉州合やふ分色々過して置へし

『繪藥・釉藥配合帳』は、「金焼附傳」「金古堂口傳写」「大西友三良デン」「樂焼藥傳」「本窯藥」「樂焼藥調合」「本窯藥」「乾山の極秘」「石焼キクスリ」「土焼調合」「尾賀田周平傳」「今里相傳」以上、一二篇によって成立。乾山に関しては極秘とあるが、絵具の調合を中心に生素地上・素焼上、白下地は「しの白合せ藥」、上藥は軽く掛けるとある。欽古堂亀祐口伝、尾形周平伝などを含み、成立は文政・天保以後と推定される。三田焼は兵庫県三田市のやきものである。宝暦年間（一七五一―六四）小西金兵衛が開窯、白化粧を用いた製品に始まり、内田忠兵衛創始の青磁が知られる。文化末・天保年間を最盛期とし、京都から欽古堂亀祐も指導に訪れ、型物製作にすぐれる。

三、乾山名のない陶法書

①『樂燒秘書 竈圖附』：筆者飯塚宗助・文化三年（一八〇六）ピーボディ・エセックス博物館

『樂燒秘書竈圖附』表紙　①



樂吉左衛門判　文化三丑（二年）年二月　飯塚宗助常秀（花押）　②

①　―『樂燒秘書　竈圖附』―

樂燒藥方之書

○彩色藥

青藥之方　緑青八拾目　石二百目　唐土五百目
　右調合メ用ユ　緑ハ松印ニテも板流ニテモ吉
塗上六反程ヨシ　緑減スレハ交趾藥トナル也
紫藥之方　紫胡須弐分　石参匁　唐拾匁
　右調合メ色薄時ハ胡須加ル　色見シテ可用
胡須ニ口傳有
黄藥之方　唐白目三分　石三匁　唐土拾匁
　右調合シテ弁柄少加ル　白目ハ極細末ニテ可用
瑠璃藥之方　紺青五匁　石壱匁五分　唐土五匁
　右紺青ハ花紺青宜シ　極細末ニスヘシ
黄瀬戸藥之方　弁柄二匁五分　日野拾五匁　唐五拾匁　右調合メ若色悪キトキハ弁柄ヲ減ス
赤藥之方　辨柄三匁　信樂拾匁　日山三匁弐分
　唐土五匁　右調合メ色悪キトキハ信樂減ス
黒藥之方　岩白緑三拾目　日野岡三拾目　唐百目
右ハ白緑ニ口傳アリ　是ハ本竈ノ黒藥ナリ
飴色藥之方　加茂川石弐拾五匁　唐百匁
　右調合メ三へん塗　上エ三拾目ノ留藥
　濃く壱へん塗テ吉
茶藥之方　信樂土・弁柄當分ニ入見合　緑青
　石三拾匁　唐土百匁　右調合シテ色合工夫
桃色藥之方　信樂土壱匁　辨柄五リン　石弐分
　唐土三分　右之割合調合也　悪時ハ信（信樂）
　減ス
浅黄藥之方　信樂土五分　紺青三分　山（大日山）
四分　唐壱匁　右調合色見シテ用　留藥懸
　ル事法ナリ　以上
　右は畫ノ彩色藥ニ用ルナリ　何邊も色見して
　相用　留ヲ懸て色出ル法ナリ

○地藥

　白地藥之方　信樂土百匁　石三拾匁　唐土八拾匁
右調合シテコシテ相用ル　信樂ハ赤ミ無
　處ヲ用
青磁地藥之方　緑青五匁　石三拾匁　信樂土百
　匁　唐土八拾匁　右地色薄時ハ緑青相増ス
赤地藥方　黄土水ひ　右は下地ニカヽハラス
　赤ニ焼上ルニハ　下地乾タル時分　二反ス
　リテス焼ス　下地赤也トナルナリ
黒地藥之方　白緑四匁　弁柄五匁五分　石六分
　唐土五分　右は厚ク三反塗　焼上ノ火強ス
　右地藥ハ繪ヲ畫ても亦はハ無ても留藥ハ三
　反ツヽ塗焼上ル

○秘傳五箇之方

赤畫　水テ黄土
　右は彩色用ル朱ノ如ニ相成　素焼之節エ（繪）
　ハ　下ニ白繪ヲ用ル
黒畫　紫胡須　右極細末シテ　随分濃ク用
本竈赤繪之方　弁柄三拾匁　白玉百匁　唐土
　三拾匁　右ハ極細末ニスリ用　玉ハ極白吉
青磁藥　紺青六匁　岩白緑壱匁　石二百匁
　唐土五百匁
　右は調合シテ七反塗也　下地ニヨリ地藥懸
　ル　亦上エ彩色も相成ル口傳有
金焼付　金泥　硼砂二味
　右焼付後　ハウノハカマニテ光澤出ス

○極秘傳

赤樂藥　石三拾五匁　唐土百匁
　右二味　是ヲ合セテ留藥ト云　元來光澤藥なり
　此藥ヲ塗テ焼時ハ　光澤出スコト妙也
　下地ニ画ヲ書　是ヲ上エ（ハ）塗リテ
　地色迄も引出　諸色藥ヲ押テ落サス故　留
　藥ト云　此一方ヲ以テ　諸色ノ藥加減シテ　出タ
　ル者也　諸藥之根本也　可秘々々
黒藥之秘方　加茂川百匁　白玉五拾匁ち八拾
　匁迄入六十匁吉　硼砂拾五匁　是ハ不入トも吉
右赤黒之二法ハ　樂家相傳之秘法なり　樂焼根本之
藥ニテ　極口ノ秘トスル処なり古來名物ハ皆此二法
ニテ焼タル者なり　代々ノ藥是ニ少々加減ノ已也
可秘々々

○火加減之事　口傳

○色見之事　口傳

②　右は自先祖傳來之秘事也　雖然依年來修業不可妄有他傳　赤黒之二法　殊可秘　々々
　以上　　樂吉左衛門判
　文化三丑年二月　飯塚宗助　常秀（花押）

○樂燒竈道具之圖

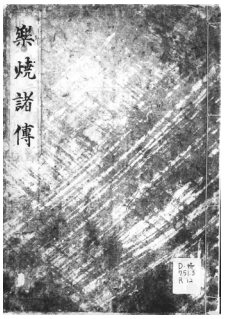
素燒竈　積口・色見ノ穴
火掻　挟　竈ニヨリ長短アリ　柄長三尺・三尺
五寸　柄長壱尺五寸・二尺五寸
樂燒外竈、此竈ヲ金竈ニ云　色燒カマ也
方形内窯　蓋　トチン　長トチン　隔小板
席竈ノ外カマ・内カマ　蓋　色見穴
五徳（土ニテ作）居轆轤　臺ロクロ　同標本

当書はエドワード・モース蒐集の一冊である。英字の書き込みがあり、モースは京都において陶工より受理したものと推測。

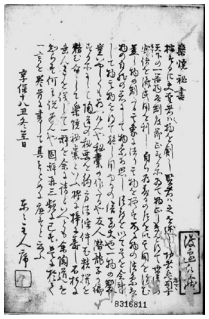
陶法を伝えた樂吉左衛門は樂家九代了入（一七五六―一八三四）と推考する。了入は七代長入の二男惣次郎、兄得入が若くして隠居。一五歳で当主となり、以後六〇年に及ぶ作陶が知られる。表千家了々斎より「了」を得るが、号は翫土老人。天明大火に罹災。陶土・印章、多くのものを失うという。樂家秘伝の伝授背景には諸々の事情が考えられる。冒頭「彩色藥・青藥之方」では緑青を減らせば交趾になるとあるが、「反」は「返」、繰り返す意である。

一九八五年一〇月二四日、翌一九八六年五月一日、ボストン郊外セーラム、ピーボディ・エセックス博物館を訪れた。晩秋の当地は冷たく、同地の魔女伝説を彷彿させる靄に包まれていた。作品調査の思い出である。

②『樂燒諸傳』：『樂燒秘囊 上』「尚友齋一心庵樂燒傳法」「樂燒田邊弥三郎傳來藥法」「石野佐次右衛門樂燒法」筆者渡辺政挙・原本松田秀徳・文政六年（一八二三）・天保七年（一八三六）京都府立京都学・歴彩館

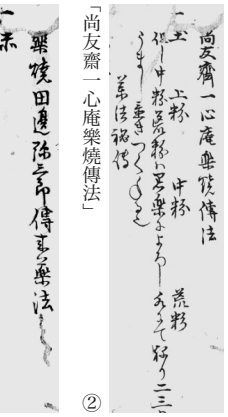


『樂燒諸傳』表紙　①

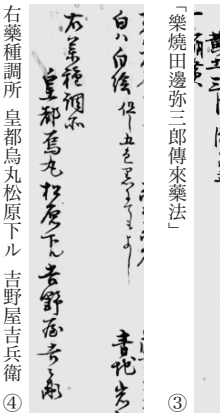


『樂燒秘囊』序文「樂燒秘書」享保十八丑冬至日　東々主人席（印）　①

『樂燒秘囊』竈を作る法　外竈の圖・外竈寸法・内釜寸法・内釜蓋の圖　①



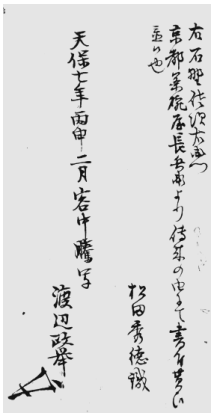
「尚友齋一心庵樂燒傳法」　②



「樂燒田邊弥三郎傳來藥法」　③

右藥種調所　皇都烏丸松原下ル　吉野屋吉兵衛　④

「石野佐次右衛門燒法」　⑤



松田秀徳識　天保七年丙申二月　客中謄写　渡辺政挙（花押）　⑥

① ―『樂燒諸傳』―
―『樂燒秘囊 上』―
樂燒秘書・享保十八丑冬至日　東々主人序
樂燒秘囊目録・器物作り様・削道具の圖・素燒の仕やう・数燒釜の圖・本燒赤樂の法・土を製する法・竈を作る法・火の色見様の法・地藥秘傳の法・紅梅手の秘法・白絵藥の法・赤絵藥の方・萌黄藥の方・黒絵藥の方・瑠璃絵藥の方・柿色絵藥の方・黄絵藥の方・箔黄絵の方・黒絵藥を製する方・渋紙手藥の方・雲屯の法・玉虫色の燒やう・黒樂藥の方（略）
右樂燒秘囊陶師何某より松田秀徳傳來
干時文政六年（一八二三）癸未春

② ―「尚友齋一心庵樂燒傳法」―
土・藥法秘傳（赤楽・白樂・一法白樂）・上藥の法・黒樂・青藥・黄藥・一法黄絵藥・一法黄藥・渋紙色・瑠璃藥・松葉傳赤・繪の具・なだれ・大の水指一ッ分上藥・茶碗一ッ分上藥
一心庵口傳筆記
水藥随珠法・又法氷海玲瓏・赤色の法・黒色上藥の法・又法・本燒藥・クハンニウ・繪具
右の法ハ大樋傳の由にて證明寺老僧一心庵より傳來（證明寺は不明。若狭にあるが）

③ ―『燒田邊弥三郎傳來藥法』―
赤・萌黄・あめ色・黒・梨子地・燒継（略）

④ 右藥種調所
皇都烏丸松原下ル吉野屋吉兵衛（『樂燒秘傳』白鷺斎には吉野屋正兵衛とある）

⑤ ―「石野佐次右衛門樂燒法」―
上藥の法・下塗藥・萌黄藥・黄藥・紫藥・瑠璃藥・解水の法

⑥ 右石野佐次右衛門
京都茶碗屋長兵衛より傳來の由にて書付貰ひ置候也
松田秀徳識
天保七年丙申（一八三六）二月客中謄写
渡邊政挙（花押）

刊本『樂燒秘囊』は享保一八年（一七三三）東々主人序、元文元年（一七三六）に出版された樂燒関係初の書物である。著者は浪速の中田潜龍子（せんりゅうし）、が、作者に関する詳しいことは不明である。

土の拵え方から器物の作り方、削り方、釉藥・絵藥、その種類に至る記録があり、窯に関しては内窯・外窯、その構築、素燒の仕様、各種燒き方なども記されている。陶芸に興味をもつ人々には指導書・手引書・参考書となり、陶法書・伝書作成には指針となるなど、のちの陶法書は多く『樂燒秘囊』を念頭に組み立てられる。内容は樂燒、釉藥・絵藥の調合が中心、庭内に築くことのできる内窯構築を基軸とする。

『樂燒諸傳』は『樂燒秘囊 上』書写・「尚友斎一心庵樂燒傳法」「樂燒田邊弥三郎傳來藥法」「石野佐次右衛門樂燒法」の四部から成る合冊本である。原本は松田秀徳伝、筆者は渡邊政挙とあるが、両者に関する詳しいことは解らない。

「尚友齋一心庵樂燒傳法」は大樋伝、證明寺老僧一心の伝えるところ、

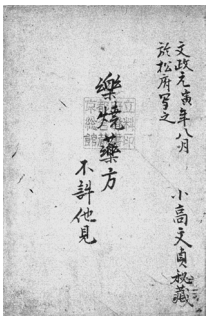
「樂燒田邊弥三郎傳來藥法」は皇都烏丸松原下ル吉野屋吉兵衛の茶種調所、

「石野佐次右衛門樂燒法」は京都茶碗屋長兵衛より伝来の由を記載。茶碗屋長兵衛は真葛燒の創始者真葛長造の父宮川長兵衛であるが、樂家も京都、発信元も多く京都、翫ぶのは主として江戸の趣味人・数寄者仲間であったと考える。

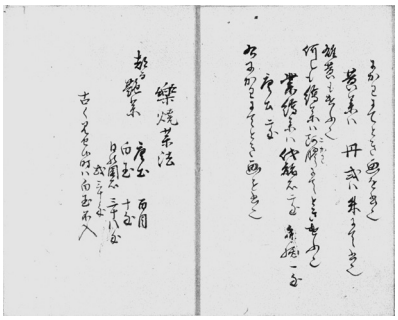
調合に白玉を入れることは一八世紀以後一九世紀における陶法書の特徴である。

③『樂焼藥方』：小高文貞蔵・文政元年（一八一八）・成立年代不明　京都府立京都学・歴彩館

『樂焼藥方』表紙　①



文政元寅年八月於松府写之　②
小高文貞秘蔵　樂焼藥方　不許他見



樂焼藥法　③

①　―『樂焼藥方』―

②　文政元寅年（一八一八）八月於松府写之
小高文貞秘蔵　樂焼藥方　不許他見

焼もの藥遣ふ品々

唐土・白玉・日の岡石・豊後土・緑青・丹・朱・鉄粉・代赭石（酸化第二鉄）・雄黄・白緑青・黄土・加茂川石・花紺青・蓬砂・弁柄

唐藥ハ：黒ゴス・青ゴス・紫ゴス・鼠ゴス・黄ゴス・白ゴス　この外何色にても色よき石ハ一遍良く焼き粉にいたし候へは藥に相成候　然とも何藥にても唐土を和し不申候へは　藥に流れ不申候　此御心得第一に御座候

樂焼之方：青磁之方・黄色藥の方・同黄藥の方・赤藥の方・飴色藥・黒藥の方・本黒藥の方・白藥の方・艶藥の方

繪藥の方：赤繪藥ハ弁柄二匁　唐土五分　阿膠・青繪藥ハ岩緑青とにかわ・黒藥ハ黒コスとにかわ又鉄粉・白藥ハ地藥　又浮出しには日の岡石一匁　唐土一匁にかわ・黄藥ハ丹　朱　雄黄・紫繪藥ハ代赭石二匁　弁柄一匁　唐土二匁（略）

③　樂焼藥法
都而艶藥　唐土百目　白玉十匁　日の岡石三十八匁或三十匁　古く見せ候時ハ白玉不入
地藥・赤下地・黄・青・黒・青磁・萌黄・ゴス黒・白緑青青磁・土ノ煉様・釜ノ圖（略）

―――――

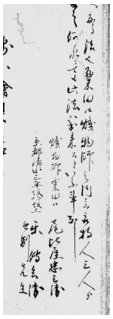
小高文貞秘蔵とあり、全文は『千家樂焼古實附陶器出処書』に同一。江戸川区真言宗光福寺には小高文貞の碑がある。天保八年没。医師。

乾山工夫の豊後土の使用を記述。江戸に於ける初代陶法の活用には二代次郎兵衛伝書の流布などを推定。「古く見せ候時ハ白玉不入」とあり、古物の風趣には白玉を用いないことが知られる。

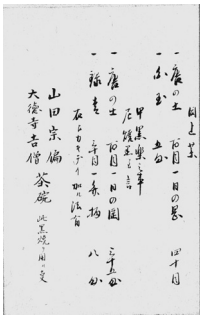
乾山・孫兵衛、伝統的な京焼内窯絵具は、文政期、はや古式の釉法とみられていた。唐土・白粉は釉藥の流れを促進。活用には心得が必要である。

④『本竈樂焼唐物藥秘方 全』：「井上傳」「深川江戸記」「加藤傳」「國勝傳」「阿蘭陀裂蜜陀僧油」筆者・成立年代不明　京都府立京都学・歴彩館

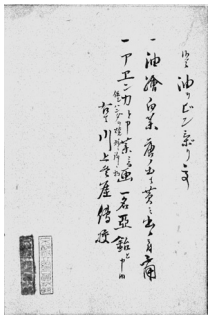
『本竈樂焼唐物藥秘方 全』表紙　①



粟田口・三年坂八つ坂上　②



山田宗偏・大徳寺吉僧　③



川上冬崖傳授　④

①　―『本竈樂焼唐物藥秘方 全』―

本竈并樂焼唐物二番竈焼付藥秘法

―南京土・井上氏傳書―

南京土是は作土なり・白藥下地引（略）

②　此焼物の法は先年御同連之御茶碗師九右衛門と云者拵らへたる法也　粟田口焼物師之内ニ而取持人三人方外ニ無之　何れニても此法ハ

焼物師粟田口　尾比屋忠兵衛

京都清水三年坂八つ坂上樂傳兵衛無別先生（略）

―別法樂焼五色繪の具の法・深川江戸記―

別法樂焼五色繪の具の法（略）

③　甲黒樂之事　尼焼黒とも言（加茂川石無）（略）

山田宗偏　大徳寺吉僧茶碗　此黒焼ヲ用ル叟

―樂別法色繪藥合方・加藤氏より書抜おくる―

青・黄・赤・白・黒・萌黄・紫・白地藥（略）

―白キヂ焼付繪具・國勝傳書―

猪口・茶碗・トクリ・小皿の類

覺：とうかん堀越前守中屋敷焼物師粉裂所小川子平・麻布廣ろふ焼物竈師　今井焼物師ニ而モ造る竈（略）・浅草駒形繪具問屋近藤・今戸すへ物土・今戸土器師一瓶・通油町南新道伊勢屋吉兵衛（えのぐ問屋・繪具染艸和漢御画筆墨所）

―阿蘭陀裂蜜陀僧油・榊原玄順ノ留―

別法蜜陀僧　同裂法・蒔繪の法（略）油繪油法

④　一油繪　白藥　唐ノ土も黄ミ出候ニ付不用

一アエンカと申藥ニ而画　一亞鉛（すず）ト申候但シハンダヲ焼様ニ致し候物　右ハ川上冬崖傳授

―――――

茶碗師九右衛門・尾比屋忠兵衛・樂伝兵衛は不明。

＊山田宗偏（一六二七―一七〇八）：宗旦門下の茶匠、元禄一二年から江戸深川に住す。

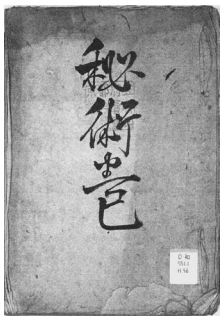
＊大徳寺吉僧：宗偏懇意大徳寺一九五世翠巌宗珉（一六〇七―六四）と推定。翠巌は津田宗及息江月宗玩甥、大徳寺寸松庵に住した。

＊榊原玄順：江戸の蘭方医。

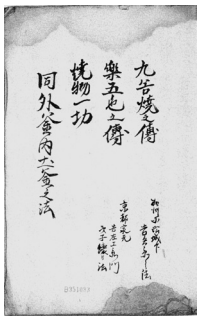
＊川上冬崖：画家。南画も描くが洋画の普及に尽力、下谷の文人らとの交流が知られる。

⑤『秘術巻』：「樂焼藥之法傳」「極秘傳」

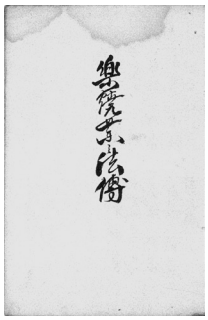
筆者・成立年代不明　「樂焼藥之法傳」に明治廿年二月紀銘　京都府立京都学・歴彩館



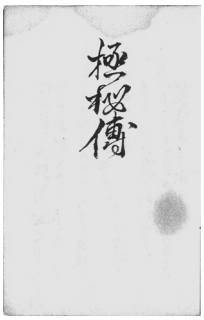
①『秘術巻』表紙



②九谷焼之傳・樂五色之傳云々



③『樂焼藥之法傳』



④『極秘傳』

① ―『秘術巻』―

② 九谷焼之傳　加州小松城下吉兵衛*之法
　樂五色之傳　京都家元吉左衛門弟子譲り法
　焼物一切　同外釜内土釜之法
加賀国九谷焼之法
　同國小松城下ハシハタ町吉兵衛ト申ス者ニ受
青之法・紫之法・赤七蔵傳・焼接藥之法傳・同アトヒキ藥・平助傳・鬼手赤傳・地赤之法・樂焼之法　黒之法・赤之法・青之法・黄之法・紫之法・白之法・九谷赤之法・飴青之法・紫之法・黄之法・青之法・茶碗早接之法・樂焼カノ村々傳有之法　紫之法・白色之法・青地之法・地ニ黄土ヲ引テ・焼接ノ傳・諸色早接ノ法
　右之品々ハ京都松原御幸町西へ入ル所　大和屋六兵衛ト申所ニ有之候　藥何テモアリ
樂焼藥口傳法　黒樂之法・檜葉茶之法（略）

③ ―「樂焼藥之法傳」―
　紺青法・青之法・又青之法・黄之法・紫之法・赤之法・上引藥之法・白繪下地之法（略）
　明治廿年二月本改之合シ分
上藥・又法・又法

④ ―「極秘傳」―
　陶器本焼上藥之法・繪藥之法・又法・又法・上藥之法・樂焼藥之法　艶□藥之法・青藥の法（略）

「秘術巻」「樂焼藥之法傳」「極秘傳」の三部から成る合冊本。乾山名はみられない。

一つの色絵薬に対し、数種の調合例を記述。江戸幕末期の特徴の一つ。明治二〇年頃の成立か。

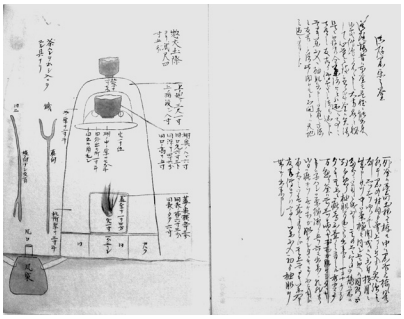
＊吉兵衛：青木木米に従い加賀春日山窯、のち若杉窯へ移動した本多貞吉門弟、小松城下ハシハタ町住鶴屋吉兵衛であろう（『九谷陶磁史鑑』）。

---

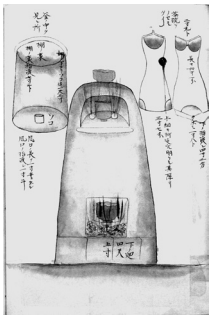
⑥『友古樂焼』：

筆者友古・成立年代不明　都立中央図書館加賀文庫

①『友古樂焼』表紙



②御庭黒樂之釜



③窯と窯底から窯内を見る図

① ―『友古樂焼』―
外之釜内釜図

② 御庭黒樂之釜
　御庭焼　昔ハ本釜モ是程ニ能出来候處　傳統と見へ申候　大方名々秘して　心覚ニ致置候第　釜ハ矢張是ニ候得共　金藥法々とハ違候事ニて有べし　友古ゟ傳處之法モ違申候　高キ藥不入ニ　柚肌出申候
　御□（遣・達か）之御法も　友古之法　此開ケルト　不開トハ天地之違ニ有之候
一外釜ハ　臺　町土様ニて拵ル　中ハ黒谷ニて拵候
同形　若干黒めニ　村内ゟ御買上ケニ候へ共　更ニ強□なし　二ツ三ツ吹候で開　或ハ□付損用ニ成申廿ツ中　御茶碗モ同シ上ニ候へハ　同断ニ而多分ニ御用ニ成不申　其の上ニ今の御焼ハ　黒ハ前而懸リ柚肌間違ニも出来申候　十カ十ケシタゝキ　其上ニ疵旁不益ノミ有之候　右カマニテ百懸リ釜ハ二ツ三ツそ吹キ。
　○子ハシ御茶碗漸ク五ツ六モ出来候歟　然共昏疵キツ無キ所ガ　肌ケシタゝキニテ　不ヒ用候　□太之御無益ニ有之候　其上高キ藥入申候　友古傳ニテハ　高キ藥不入　初ゟ柚肌ヲ帯テ出来申候
③ 黒樂焼成の窯と窯底から窯内側を見る図。

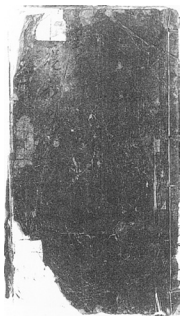
「友古」とは誰であるのか、不明である。

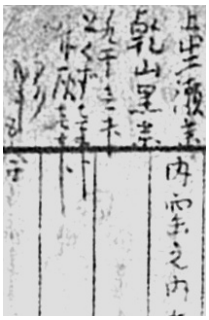
『陶器考』著者田内梅軒は「友古」と称したが、ここでは楽焼焼法を心得た人物である。

ふいごを用いた炭窯における黒楽茶碗の焼成を図示・解説。文中、柚肌を帯びるか否かの問いに応え、友古の法を以ってすれば高価な釉薬を用いずして柚肌の生ずることを説く。柚肌とは焼成によって陶器面に柚の実の表皮に似た細かな凹凸の現れることをいうが、楽焼など、やきもの鑑定の見所として珍重される。

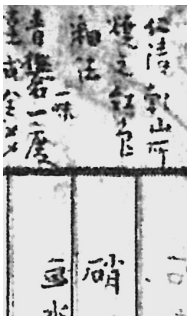
四、専門陶工による陶法書・その他

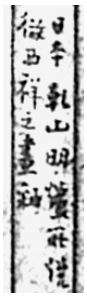
①『陶法手録』（仮題）（用箋に「米家調書」）：
筆者青木木米・文政元年―七年（一八一八―二四）頃　神奈川県立歴史博物館　二階堂充著「真葛伝来青木木米の「陶法手録」『横浜美術館研究紀要』第五号（二〇〇三）所収


『陶器手録』表紙（仮題）①


乾山黒薬②

乾山黒・左図は全頁図③


仁清　乾山所焼之紅色釉法④


西祥青花畫釉　日本乾山云々⑤

赤繪釉　仁清　乾山⑥

乾山　生瀬石十　樫灰十　餅灰か三⑦

乾山雪　生瀬七　神部三　樫十⑧

乾山青花畫釉⑨

①―『陶法手録』（『米家調書』）―
（用箋折口下部には「米家調書」とある）

欄外書込
乾山黒薬　水下壱升　□くず（鉄屑か）□
竹灰壱升　アク弐升五合
（仁清伝来瀬戸釉薬・鉄釉）

③乾山黒　柿*十はい　白薬十はい
萩薬　藁十はい　アク七はい　石五はい
白薬　柿十はい　アク十はい　青薬（略）

④仁清　乾山所焼之紅色釉法
*青礬一味一度焼成金ハタ（か）紫紅二両
鉛粉二両五銭　共合成錬之法
其製如礬紅（乾山の云う絳礬）

⑤西祥青花畫釉　日本乾山明爐所焼倣西祥之畫釉
杯上塗白土方
白土百目　俗云白繪土　産江州神樂江田郷　鉛粉百目
未*焼ル成生杯　上以羊毛筆白泥三四邊塗　而後□明爐其上*單釉
白釉法　紅毛銹
○鉛粉五両　硝*粉五両　石*粉二両
又方
鉛粉三銭　硝粉一両三銭　石粉一銭
書画而單釉者　諸器　陶冶之法也　西祥之於焼様　限單白釉而釉上以五彩　畫山水人物花鳥獣焼成

⑥赤繪釉　仁清　乾山

⑦乾山　生瀬石十　樫灰十　餅灰（か）三（透明釉薬）

⑧乾山雪　生瀬七　神部三　樫十（高火度焼成極白繪薬）
（『難波樂焼秘書』「手紙の写」に乾山白絵薬に「雪白」とある）

⑨乾山青花畫釉
石青（呉須）一両　硝粉同絶釉未（フリット・未だ玉になっていない）一両五銭
二味共施礌鉢之内　輕研不可　ヲモク研　硝用極艶釉
青用生研　以二味相交　星攷キュルヲ爲度久研　爲艶釉
則出火後得曇色

---

*竹灰：珪石　*アク：木灰　*柿：柿土、黄土のこと
*鉛粉：唐土・白粉　*硝粉：白玉
*石粉：日の岡石・流れ難い堅めの釉薬を作る
*単釉：中国では単色釉薬、ここでは上薬・白釉をいう

『陶法手録』（縦二二、一㌢・横一二、三㌢）は文化・文政期、青木木米著の陶法書。「戊寅秋日」（文政元年一八一八）・「甲申年五月試」（文政七年一八二四）・「文久二年（一八六二）夏改調合也」（別筆）とあり、上絵具の調合とその原料、製法、技法、名物香合などの模写を記録。

乾山焼に関しては白・黒・色絵具、阿蘭陀、画讃様式に興味が示された。阿蘭陀様式は本来白さと光沢を出すため錫釉に浸し、それに色彩を施すデルフト様式・スペイン伝承のイスラム系錫釉色絵陶器が基盤である。

木米には自叙伝『上奥殿侯書』が残る。奥殿は三州岡崎松田乗羨とされ、二条城勤番中木米との出会いがあったものと推測（脇本楽之軒）。

同書には仁清に関し「陶車を能くするが釉曇りて光なく、乾山に関し「学西洋器之釉法不能成而纔得作杯躰而已」「雖然此等數人皆可稱名工」とある。

乾山焼の異国様式には中国・朝鮮・阿蘭陀・安南・宋胡録などがある。阿蘭陀様式は二代猪八も得意とした技法であるが、白塗り・青・黄絵具などに特色があり、当時の流行を加味、文人趣味、異国趣味に乗じて造られた。木米は『陶説』（朱笠亭著）を読み作陶の道に入るという。異国文化摂取の盛んな折、中国陶磁器焼成の工程、変化、原料にも興味を示すが、晩年、京焼陶工のちに真葛焼を興す真葛長造（一七九七―一八六八）を弟子とした。『陶法手録』は横浜住長造四男宮川香山へと渡り、同所空襲によって焼失したと考えられていた陶法書である（二階堂充著「真葛伝来青木木米「陶法手録」について」二〇〇三年）。真葛家による封印跡、書き込みもあり、同家には木米遺品が多く伝世。他の陶法書数冊、香合土型三〇〇余、『陶説』版木もあったと伝えられる。

―『聾米古瓷譜』（『古器勸圖帖』）―

青木木米模写本の写本・大正一〇年刊（一九二一）　都立中央図書館加賀文庫他

『聾米古瓷譜』表紙　①
古瓷譜　鉢・碗・皿など　②

① ―『聾米古瓷譜』―

『聾米古瓷譜』は青木木米の中国古陶磁器臨写集の複製本である。『古器勸圖帖』（出光美術館）と題し富岡鉄斎の模本の附属した帖もあるが、木米の中国陶磁への関心を伝える資料として掲載した。

当書序文（今泉雄作）には、原本は角倉氏一方堂旧蔵、大正一〇年その写本を刊行。「聾米」は木米の号、窯焚きによって耳が不自由になった故と伝承する。木米窯には轆轤師岡田久太の名が知られる。

② 同書掲載の鉢・碗・皿・壷・火入他の臨写図である。山水・人物・禽獣画がみられ、「永樂年製・大明嘉靖年製・大明成化年製」などの紀銘、「五良大甫呉祥瑞造」など作者名、「百子堂・壽・福」などの文字や漢詩が認められる。『平安名陶伝』（脇本十九郎著・大正一〇年刊）によれば同譜は『古器觀』とある。『陶法手録』と同じく文化五年頃からの模写と推定されているが、加賀春日山滞在中に始まると推測、古器・名器を目にする機会に恵まれたことに関係するかと考えられる。

中国古陶磁器模写の画帖のほか、『天工開物』『佩文斎書画譜』などの出版物を書写した抄録も伝承。調合における原料の試作、宗教・医学・窯業を一つのユニットと考える道教などにも興味を示す。

春日山窯時代、同窯陶工のちの窯主松田平四郎（元寧）による木米陶法『陶器總録』（下段）も現存するが、詳細は『平安名陶伝』（脇本楽之軒著）に掲載されている。

② 『陶器總録』（青木木米陶法）：筆者松田元寧（馬宋）・文化五年（文化五年戊辰中夏改控）・同一〇年・一一年戊年（一八一四）　脇本楽之軒『平安名陶伝・木米』大正一〇年刊所収

―『陶器總録』―

日本記神代巻　和名鈔　延喜式　陶字
土之部：一京三條雑記　岡崎ノ土壱斗　大日交四升　一同南京物　一南蠻土（略）
一仁清土
　セキノ一斗　山ノ上一斗　二俣石四升
　クワンニウ入ルモノニ妙ナリ（略）
釉之部：青磁釉・人形手・瀬戸釉・澀紙・瑠璃南京釉・紫口俗ニ云口紅・瀬戸青釉（略）
金竈（錦窯）：赤繪・金・魁手ノ青緑・萌黄（略）
一仁清黒上釉　光リ押ニハ日ノ丘壹匁増
　唐土拾匁　白玉五匁　呉ス壹匁　日丘貳匁　已上
火ニ入ル心得之事：交趾・青磁土窯ニテノ焼方
一乾山仁清ハ　押エカケサヤ（略）
　文化十年酉六月窯甚宜布出來ノ加減也
藥ノ法：釉百目懸切茶碗・黒釉百六拾目（略）
三段藥：（窯積の場所に従い釉薬の調合変化）
一赤　高タイ唐土拾匁　日丘四匁三分
　トウ土拾匁　丘四匁
　裏土拾匁　丘三匁七分
一黒　高タイ白玉拾匁　カモ六匁五分
　トウ玉拾匁　カモ六拾匁
　ウチ玉拾匁　カモ五十五匁
一白エ　白エ百目　白玉八十目　唐土廿五匁
　一方唐土五十匁トアリ
　右藥乾山ノ白ニ用ル也　金窯モノ又法
　白エ一升　玉七合　日丘貳合
一白エ上薬　白粉十匁　丘三匁五分　玉三匁五分
一乾山紺青（本窯用調合。内窯は相異する）
　紺青十匁　摺事無用　白玉十匁　ヨクスル事
（略）
樂窯寸法：
ウチ窯　金サシウチノリ口五寸　立四寸五分
外窯　内ノリ八寸五分　立九寸五分

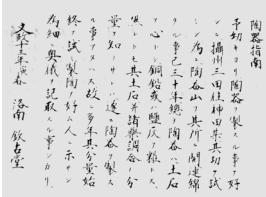
金陵陶工松田元寧懐書

『陶器總録』（脇本楽之軒著『平安名陶伝・木米』大正一〇年刊一九二一）、表紙には「文化五年戊辰中夏改控」裏表紙に「金陵陶工松田元寧懐書」とある。加賀・春日山において作陶指導に当たった木米の陶技・陶法を、弟子（窯主）であった松田元寧が記録（文化一〇年酉六月改て文化一一年戊の年より）。同家蔵とした陶法書である。

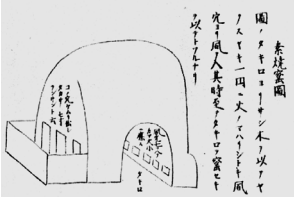
土、釉薬の調合、楽焼・肥前焼、窯と窯入、寸法が中心。京焼の特質、仁清・乾山の作陶・釉薬に触れるが、仁清に関しては土・金竈（錦窯）・窯入れのサヤ、乾山に関しては絵薬中、白絵・紺絵・サヤについての記述があり、素材・調合の多くは京焼主体。南京・交趾・高麗・南蛮・宋胡録などの記載がある。

松田元寧は松田平四郎、馬宋・帝慶斎と号し、俳諧を嗜み、九谷、春日山窯の陶工のち窯主となる。文化三年、木米は殖産興業の一環として加賀藩に招かれた。翌年本多貞吉を伴い再度訪れ、金沢卯辰山麓に廃絶中の窯を改良、作陶を始めるが、初窯の後金沢城二の丸を焼く大火に遭遇。窯は藩営から民営へと切り換わり、木米は帰京。貞吉らは残り木米様式の青磁・絵高麗・交趾写などを製作。が、同八年貞吉も若杉窯へと移動。文政初年頃には春日山窯は廃窯となる。黄・紫・緑・上薬は押小路焼に近く、未だビードロ不使用の調合がみられる。原料は全国共通、が、木米には自らの試作・試用などの原料もある。

③『陶器指南』：筆者欽古堂亀祐・文政一一年序（一八二八）・一三年刊（一八三〇）



『陶器指南』文政十三年寅春洛南欽古堂　①



素焼窯圖　②

本窯内積様畧圖　③

① ―『陶器指南』―

欽古堂亀祐（一七六五―一八三七）の著した陶法書である。「文政戊子夏日可亭道人信識」「文政十三年寅春洛南欽古堂」、奥書に「諸焼物薬繪具合所平安城伏見街道一ノ橋下ル 欽古堂亀祐 文政十三年庚寅仲秋癸刻」とあり、序文は可亭道人、文政一三年に刊行された。

作陶には、素材となる土・石、諸薬の調合・分量を知る必要があり、製陶を志す者の手引書となるが、極めて専門的な要素を含み、五〇項目に分別、地土・絵具・窯と窯積などを図示・解説をする。素人陶芸を対象としながら窯と窯道具、その調整など専門陶工の必須とする内容であり、筆者亀祐の知識・智慧が披露される。文政一一年可亭道人（伏見稲荷社司）は序に、焼法のみならず諸陶器の製悉に盡し、作陶者の黄金の竿と述べる。

同一三年自序には、「予幼キヨリ陶器ヲ製スル事ヲ好シニ攝州三田住神田某　其功ヲ試ミン爲ニ陶器山ヲ其所ニ開　連綿タル事已三十年　総テ陶器ハ土石ヲ心トシ銅鉛或ハ塩灰ヲ糂トス　然レトモ　其土石幷諸薬調合ノ分量ヲ知ラサレハ　遂ニ陶器ヲ製スル事アタハス　故ニ多年其分量始終ヲ試ミ　製陶ヲ好ム人ニ示サン爲　細ニ奥儀ヲ記取スル事シカリ　文政十三年寅春　洛南　欽古堂」とある。内窯の材料・絵具・窯図・交趾、本窯の地土・上薬・窯図・陶法、素焼と窯図・陶法が記述された。

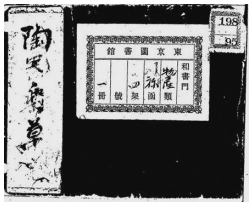
② 素焼窯圖：圖ノタキ口ヨリサシ木ヲ以テヤク　スヤキ一円ニ火ノマハリシトキ　凪穴ヨリ凪ヲ入　其時至テタキ口ヲ　窯セキヲ以テトツルナリ　凪穴七ツ八ツカマ大小ニ応ス　タキ口　コノ穴ケムリ出シ　タカサ七寸　（略）

③ 本窯内積様畧圖：奥天・中天・火天・シノ・大ヌケ・中ヌケ・火小・火中・火地・中地　云々

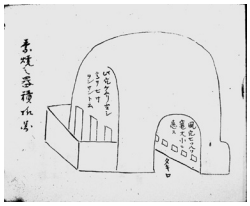
＊可亭道人（一七九九―一八八七）は羽倉可亭、京都伏見稲荷社司。江戸下向、大窪詩仏の門下となる。

④『陶器樂草』：原本筆者茶顛庵・天保三年（一八三二）・写本義方筆・嘉永元年（一八四八）

国立国会図書館榊原文庫

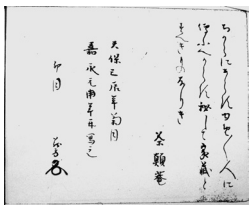


『陶器樂草』　①

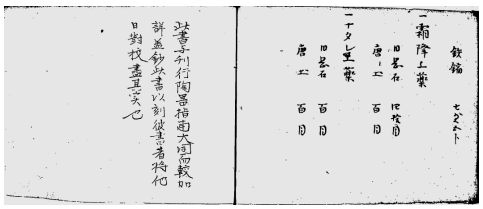


素焼窯圖　③

本窯内積様略圖　④



茶顛庵　天保三辰年菊月・嘉永元申年再寫之・卯月義方花押　②



此書与刊行陶器指南　云々　⑤

① ―『陶器樂草』―

『陶器樂草』は、著者茶顛庵・黒川県、写本義方、昭和四年『随筆文学選集』に公刊された。図書館へは明治一六年（一八八三）国学者榊原（雨森）芳野が寄贈。同家蔵書印「榊原家蔵」が認められる。

村田珠光・千利休を挙げて茶の湯の創始、風流を語り、楽焼は交趾焼の写しに始まるとし、玉水焼一元・一空・任土斎にも触れるが、陶技、釉薬の配合・調合は陶工の秘事である。容易に他者の知り得る所ではない。が、幸いにも筆者は伏見に勤務中馬術の友人松下堂（馬淵市右衛門）所持『陶器指南』の写本を借り、書写をする。次いで伏見住欽古堂亀祐に便りをし指南を受けるが、興味は増すなどさらに五条通建仁寺東に入る仁阿弥（二代高橋道八）、四条川東大和橋上ル処木左（青木木米）の門を叩き、技を磨き師伝を得る。

② （当一冊は予が）「ちからにあらす　ゆめゆめ人に傳ふへからす　秘して家蔵とすへきものなりき　茶顛庵　天保三辰年菊月　嘉永元申年再寫之　卯月義方（花押）」

③④ 素焼窯図、本窯内積様略図。亀祐著『陶器指南』の写しである。

⑤ 此書与刊行陶器指南　大同而較加　詳蓋鈔此書以刻彼書者将他日對校盡其実也

同書を所持した榊原・雨森芳野は通称鬲蔵、号琴州・鬲斎・櫻舎。江戸末期の国学者。

⑤『彩色繪具皆傳』：筆者尾形周平・天保五年（一八三四）　賀集珉平家

『珉平焼とその系譜　賀集珉平から忘吾園窯まで』淡路島美術館

―『彩色繪具皆傳』*―

尾形空仲子相傳

赤繪具皆傳

赤　弁柄壱匁弐分　白玉拾文目（ママ）
　唐土弐文目
萌黄　白玉拾文目　唐土同断　石壱匁
　ロク青三文目
紫　唐土十文目　白玉同断　石三文目
　唐呉州三分
ルリ　コン青七文目　白玉拾文目
　唐土四拾目
黄　白玉拾文目　唐土同断　石弐分五リン
　唐シロメ三分
黒骨書　呉州拾文目　唐土弐匁五分
草柳　モヘキ合セ五匁　キ弐拾匁　合法
浅黄　ルリ十匁目　モヘキ弐文目　合法
金　泥壱分　ホウシャ弐厘五毛
箔　上消　ホウシャナシ　消様口伝
　右何れも極こしさらし
　煎皮を入候而相用候事
振紺青　紺拾匁　唐五匁
　ウルシ油差
　唐少入
甲午秋良日陶工　尾形空仲子（印）
南御氏江

＊空仲子：尾形周平。摂津桜井里（さくらいのさと）焼、江戸向島隅田川焼、和泉貝塚願泉寺焼、播磨東山（とうざん）焼、淡路へ渡り加集珉平（かしゅうみんぺい）焼の指導に当たるが、珉平に授与した『彩色繪具皆傳』は京焼清水五条坂の陶法であり、多くは錦手絵具の調合である。

『彩色繪具皆傳』は京都五条坂陶工尾形周平（一七八八―一八三九）の著した絵具の調合秘伝書である。「甲午秋良日陶工尾形空仲子（印）南御氏江」とあり、「空仲子」は周平の号、「南御氏」は賀集分家珉平（みんぺい）家を表す（『賀集珉平と珉平焼』）。京焼陶工尾形周平より、淡路島珉平焼創始者賀集珉平が受理した伝法であるが、天保五年（一八三四）、周平は阿波藩（蜂須賀藩）伊賀野村の陶工賀集珉平の依頼を受けて阿波に渡る。一年半を滞在、作陶指導に当たるが、珉平には陶技を伝授、それを証して「平」の一字、秘伝とする調合書を伝授する。

珉平（一七九六―一八七一）は、幼名を豊七、のち三郎右衛門を名のり、学問を修得、芸能に親しみ、殖産興業・淡路の開発に努めた人物と伝承。文政六年（一八二三）島内池之内村（洲本）に粘土を発見。珉平焼を創始するが、没後は、珉平弟恒左衛門二男三平（？―一九〇九）が継承。仁清・道八ら京焼様式、交趾・金襴手・染付・青磁他の中国様式、絵高麗・安南・阿蘭陀様式など、多種多様な作品が伝世する。

『彩色繪具皆傳』は、周平の伝えた調合書である。五条坂窯『本多佐平所持日記』の調合にほぼ同一、佐平は同日記に「周平古赤画」と記しており、五条坂の陶工仲間、その往来を推測する。周平は江戸向島佐原菊塢開窯の隅田川焼に関与。尾形乾山から「尾形」姓、伝書「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」より「空仲子」を号としたと推測。ともに乾山に関わりをもつが、授与した調合は五条坂陶家の陶法である。

⑥『本多佐兵衛所持日記』：筆者二代本多佐兵衛（佐平）・天保七年（一八三六）頃

『京焼百年の歩み』藤岡幸二編・一九六二年所収

―『本多佐兵衛所持日記』―

○「天保七年申林鐘吉伴」
「丸屋佐兵衛所持　天保九年戊戌歳林鐘吉抄」
「謡曲扣帳」

○絵具の調合
　赤画・青・紫・紺青・木米古赤画・周平古赤画・紅赤画・黄・黒骨書・ルリ・盛上ケ・白絵・黄（二種）・青・鶯・水色紺青・キビ色・トケ黒・赤楽吉左衛門（下地・上薬）・道八上薬・黄瀬戸・五合紫・熊川上薬・道仁清黒・道黒楽・美の勘・江戸紫・桃色下白・白画合・青磁・土焼黒薬・萩・青磁・錆薬・瀬戸黒・朝鮮薬・人形手青磁・南蛮ノ内の薬・同南蛮外の薬・松本萩・古萩・真伊羅保薬・真井戸薬・本窯赤画・黄伊羅保・かわけ魚屋・青井戸・道八古萩タレ薬・るり本窯・黒薬・八寸・青薬（二種）・青磁土・仁清土・南蛮土・古刷毛目土・魚屋土・画唐津・真伊羅保・南蛮土・魚屋（ととや）・御本半洲・朝鮮唐津・真井戸・青井ふるい粉・絵フゴ・熊川・金海・古萩・古三島ふるいこ

○焼附諸色伝書
　赤絵・紫・モヘギ・同（モヘギ）・ルリ・黄・黒・モヘギ・紫・赤絵（二種）・桃色合方（二種）・右盛上ケ薬・紫・青・黄・ルリ・黒絵

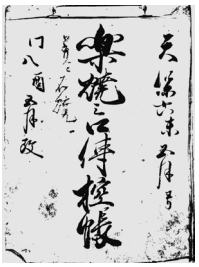
○本窯薬伝書
　青磁七貫之手　一播陽姫路家御領・同法同領岡村之産（略）

『本多佐兵衛所持日記』の筆者本多佐兵衛（丸屋佐平）は京都五条坂の陶工。同書は天保七年頃に纏められたが、遡り寛永一八年（一六四一）清水・五条坂では丸屋庄兵衛が音羽屋惣左衛門の名跡を継承。が、丸屋は二代目にして没落、門人であった本多佐平が相承し、屋号丸屋を名のると伝承。

京都では寛文年間（一六六一―七三）茶の湯が盛行、高麗（こうらい）茶碗とその模倣が評価を得るが、貞享年間（一六八四―八八）『京羽二重』にも山城国名産品として名を連ね、茶器の使用は『隔蓂記（かくめいき）』にも記録が残る。五条坂は粟田口焼とともに京焼主要の窯場であった。高橋道八・仁阿弥道八・尾形周平など、のちには清水六兵衛・和気亀亭・水越与三兵衛らが活躍。文化年間には磁器製作にも力を入れる。

当日記は（縦八、〇（セン）×横一五、〇（セン））、本多家二代佐平（佐兵衛）所持の手控帳である。天保年間（一八三〇―四四）の活躍が知られ、金襴手、色絵などの茶道具類を製作。「諸事控」「謡曲扣帳」なども残すが、手控には陶工の一日の製作量・手間のこと、勘定書、暮らしを伝える献立などを記録。乾山名はないが、絵薬に関して赤色には木米古赤画・周平古赤画・赤楽吉左衛門、黒色では道八黒楽・道八仁清黒・土焼黒薬・瀬戸黒などがあり、「焼附諸色伝書」には桃色の合方、「本窯薬伝書」には青磁七官手など、陶家・陶工の秘伝が記録。数寄者・素人陶芸家のために記されたものではない。

⑦『樂燒之口傳控帳』：筆者奥田木白・天保六年（一八三五）・同八年改『家傳覚書』初代木白口述・二代奥田佐兵衛筆記（『郡山町史』）



天保六未五月ヨリ　表紙①
樂燒之口傳控帳并ニ石燒・同八酉五月改

黄いらほ藥云々　②

赤別色・萩藥り・青磁人形手・青磁藥り・光悦白云々　③

冠山・奥田武兵衛　裏表紙④
三十八才　陶器異銘　木々斎・木白（印）

高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」所収

①

―『樂燒之口傳控帳』―

天保六未五月ヨリ
樂燒之口傳控帳　并ニ石燒
同八酉五月改

②

一黄いらほ藥　日の岡弐匁　飴四匁　唐土八匁
上塗調合
一飴いらほ藥　日の岡弐匁　飴八匁　唐土八匁
塗方同断
一大樋飴　日の岡三匁　唐土拾匁　飴拾五匁
〆右同断
但し素燒迄ニ黄土こゆく塗事
一白樂　石弐匁　唐拾匁
〆上塗方同断
但し素燒迄ニ白繪藥り又白地藥り塗り
素燒する事
茶碗壱ツニ付

③

一赤別色　黄土弐匁　赤繪藥り五分　〆
上塗藥り前同断
一萩藥り　下塗り
白地藥り壱匁　赤々藥り五リン
但白壱匁拾分色用ル
但シ上塗リ　唐土拾匁　石三匁
赤ミ
一青磁人形手　下塗り飴三匁　青繪藥り五リン　〆
但シ上塗右同断
一青磁藥り　上塗り青繪壱分　唐拾匁　〆
但シ本青磁　唐拾匁　青三分　〆　右同断
一光悦白　唐拾匁　石九匁
但シ地黄土赤樂也
薄白光悦　唐拾匁　石七匁　〆右同断
但シ外
黄土はけめ之方こゆき分壱度塗
同　薄き色薄く解三度塗

④（裏表紙）

木白・木白造（印）
冠山　奥田武兵衛　三十八歳
陶器異銘　木々斎　木白（木白印）

『樂燒之口傳控帳』（縦二〇、二㌢×横一六、二㌢）は、赤膚焼陶工奥田木白（一八〇〇―七一）の著した自筆陶法書である。表紙に「天保六年未五月ヨリ樂燒之口傳控帳并ニ石燒同八酉五月改」。裏面に「冠山奥田武兵衛三十八才陶器異銘木々斎木白」（印）とある。

天保元年から同八年までの記録であるが、「子十一月四日赤膚山において」とあることから、覚書・手控の類と推定される（高橋隆博著「赤膚焼奥田木白の陶法書」）。釉薬・絵具の調合・粘土・焼成方法などを纏めたものであり、樂家歴代由緒書・周斎傳・奉納茶碗図・注文表・五条山赤膚焼薬方・御用付入用・瓦屋安伝などの記載がみられる。別書『家傳覚書』の原本となったことが知られ、『家傳覚書』は嘉永三年七月頃から慶応元年頃の成立、木白口述、子息佐兵衛筆記と伝えられる。

赤膚山、五条山には良質粘土が出土した。やきもの産地として古くから瓦・土器を生産。鎌倉末期には火鉢などを造り、室町期には座を設けるなど、南都寺院、その他界隈に製品を納めたという。江戸期には茶の湯が流行、奈良土風炉が求められ、西ノ京には春日神社の御用を勤めた西村善五郎代々の名が残る。その後の窯業は不明となるが、転換期は寛政頃と推測され、藩主柳沢保光（尭山）の時代を迎える。京都清水からは京焼陶工が移住、治兵衛ほか三軒のやきもの師の活躍が伝承。赤膚焼の再興に努め、同地に京焼様式、色絵陶器の技術が伝播されるが、木白の作品にも仁清様式・楽茶碗、阿蘭陀・異国物様式などの作品が伝世する。木白は、幼名亀松、のち佐兵衛、武兵衛を名のる。先代以来、質・炭問屋「柏屋」を営む郡山藩御用達商人の出自であったが、「木白」は屋号の「柏」に因み、俳号、陶器の異銘として使用した。天保六年楽焼を始めとし、樂家歴代、光悦への興味が窺われるが、色絵陶では仁清・萬古、赤絵様式、さらに萩焼のほか唐津・織部・瀬戸・備前焼など多彩な製品が伝世。乳白色の萩釉に、興福寺の薪能など能絵を描いた奈良絵の装飾は赤膚焼を代表する図様となる。

⑧『赤絵師南』：筆者（書画を含む）福原揺舟・天保五年刊（一八三四）国立国会図書館他

①『赤絵師南』表紙

②描杯中赤繪の圖

（上図）③焼成図：常定貫兩直焼贈太白杯

④繪之具製法の圖

⑤金箔解し法并ニ圖

⑥金口鑄かけの圖

―『赤絵（繪）師南』―

目録

繪の具制法の圖　ニウボウの圖
黒薬の法　蒼薬の法
紺青薬の法　黄薬の法
紫薬の法　光澤薬の法
光澤置揚薬の法　光澤無置揚薬法
赤薬の法　水晶ニウ棒の圖
草色大赭の法　金箔解法并ニ圖
金口鑄懸の法并ニ圖　釜焼方并ニ圖　以上

○黒薬（くろくすり）　青呉州壹匁　繪の具屋にあり　白玉六分　唐の土七分　是は井上印か高松印がよろし
右三種を圖のごとくにして製し　水を入て　又能摺り　極細末に成たる時　膠水を入れ遣ふべし
○蒼薬（あおくすり）　唐の土二匁五分　緑青七匁　板ながしと云がよろし　日の岡六分　是ハ火打石の類なり
白玉二匁
右の四種を前のごとく製し　水を入てすり　又ふのりを入て遣ふべし　尤ドロリとするくらいにときて彩しくべし
○紺青薬（こんじょうくすり）　花紺青壹匁　白玉同　唐の土弐分
右製方蒼薬の如くふのりを入てドロリと解て彩色べし　焼あがりて　本色をあらハすなり
○黄薬（きぐすり）　唐の土弐分　唐目目六匁六分　白玉五匁六分
右製し方　とき方　前におなじ
○紫薬（むらさきぐすり）　紫呉州壹分　日の岡七分　唐の土弐匁五分
しら玉壹匁六分　右まへに同じ
○光澤薬（つやぐすり）　此薬を黒かきの上へぬりて焼ば　うるしにて塗りたる如く　つやいづるなり
唐の土貳匁五分　緑青弐分　日のおか七分
白玉壹匁八分　右まへにおなじ
○光澤置揚薬（つやおきあげぐすり）　白玉弐匁　とうの土五分　日の岡弐分
右まへにおなじ
○光澤無置揚（つやなしおきあげぐすり）　しら玉三匁　唐の土二分　日の岡四分
信樂土五匁又しらゑともいふ　右前におなじ

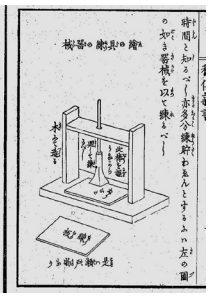
○赤薬（あかぐすり）　弁柄四分　是ハ光明印ト云がよろし　唐の土六分　白玉壹匁　日の岡弐分
右是ハ黒薬と解方同じ　膠水にてとき　ふのりハ入れべからず
○草色（くさいろ）　是ハ蒼薬と黄くすりヲ合せて用ゆべし
○大しゃ薬（たぐすり）　是ハ赤薬と黒薬とを合せて用ゆべし
○金箔解し法并ニ圖
我ものにして樂ん雪月花
そのいろ〳〵は　唐にしきともたとふへき　まゝにこさむのつとに流たや山もみち
常定貫兩直焼贈太白杯　予としころニ此道の金境に入ければ　よき程にとけて目出たし春の雪
倣土佐持監鐵人尽圖并賛
○繪の具製法の圖　并にうぼうの圖　圖のごとくしてくすりをこなすべし　茶椀ハあつでの方よろし
金箔ハ　はたと云て丸箔のたち落しを買べし　目方は壱匁にて大我四拾目位也
○如圖中指にてけすべし　圖のごとく一しつくづつ　中指の先にてしたむべし　尤氣を長くすべし
金口いかけの圖

『赤絵（繪）師南』（縦一八、三センチ×横一二、七センチ）は、福原揺舟（ようしゅう）書画による陶法書。巻末には甥嘯月（しょうげつ）の跋がある。天保甲午（五年・一八三四）刊。内窯陶器・楽焼関係の絵付と様式、釉薬・絵具、金箔と解し方などを記し、俳句・漢詩他の書が添えられている。緑青に関しては井上印・高松印・板流しなど、『樂焼秘書竈圖附』に同じくする内容を確認。乾山の指摘した仁清の黒薬、葉を描いて上を絵具で留めるとした絵薬の記述もみられる。

別書であるが、年代・行方ともに不明『南條治郎左衛門相伝陶器秘傳』（「陶器錦繪焼付極秘傳」「樂焼秘傳」「南京和物古物極秘傳」を含む）と題した薩摩平佐焼に関係する伝書も残るという（『絵具染料商工史』）。

⑨『陶器焼附画工秘傳新書 全』：江藤時太郎編・明治一七年刊（一八八四）

明治時代



①『陶器焼付画工秘傳新書 全』

②

外釜図とかわらけの素焼図
墨釜を用いての焼成図

叙

陶器は人の世帯に一日も欠べからざるの物なり因て各國僉之を用い　質をえらみ　美を求め　其製に勉強せざるハ無し　曩ニ仏国巴里斯博覧會　以後諸方の博覧會場へ出品中　陶器は獨り日本に製する物を以て　世界第一等との決定を得たり　茲に於て弥その國産を富し　盛大ならしめんとして今度江藤氏が陶器を作り出すの始より　模様の書方、焼付の薬製法　何くれとなく此事業に関せしことを掲げ秘傳新書と題し一冊子とハ做しぬ　之を見て之を製せば　苦まずして忽に瀬戸の藤四郎たらん　嗚呼　世は開けるかな

梅亭鶯叟識

① 繪の具練の器械　亦多分練貯わるんとするにハ左の圖の如き器械を以て練るべし

筆ノ用法　陶器ニ書画を爲さんと欲せバ　圖の如く筆を堅く握りて書べし　若輕く持ちて画かく際ハ其筆の毛烈しく當リ　筆に付いたる繪の具を引に自在を得ず　故に堅く握りて遣ふべし

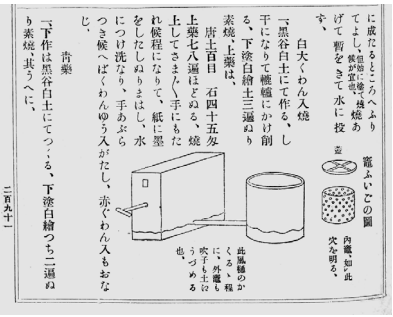
② 右内釜を外釜へ入れて焼なり　其圖左の如しかわらけの圖　外釜の圖

此圖ハ前に著したる内釜へ入たる圖にて　已に外釜の下の五徳の上に備廻り　中へ松墨を詰　是れを火に起し　如圖く　い印よりろ印（略）

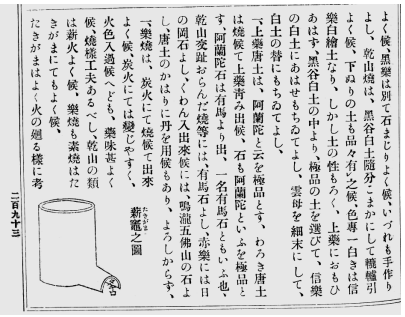
1、調合において第一の有用品は白玉である。陶器の元素にして緊要。練り加減、煮皮（膠）の解き方が重要とある。白玉はビードロである。
2、絵具は鉢・乳棒をもって一五日間、試みに練る場合は一〇時間ほどとある。
3、花瓶の絵付けは口を機械に差し込み描き、大皿の場合には板を口縁に差し渡しにして描く。
4、焼成は墨窯では松墨を使用し約四時間。焚窯では松薪を用いて五時間とある。

⑩『陶工祕嚢』（『雑芸叢書』第二）：国書刊行会編・大正四年刊（一九一五）

大正時代



①



②

乾山焼・交趾・青磁・桃色など
絵薬の原料・調合ほかを記述。巻末「樂焼記」（山田安榮蔵）には歴代樂家系譜がある。

陶工祕嚢一名樂焼製方傳

① 赤樂土拵下作并樂調合是法：（概略）下地は黒谷赤土。しら干後削り、黄土を二度下塗り（黄土が濃いほど赤味が増す）。上薬を掛け焼成、水につける。

黒樂作様并薬調合：下地は黒谷赤土。下塗りなし、賀茂河黒石百五十匁硝子百目　焔硝五匁　火勢強くせねば焼き上がらない。為にふいごを用いる。

白大くわん入焼：白絵土を塗り素焼。上薬を掛けて焼成、紙に墨を浸しそれを塗り、水に浸し洗う。

青樂：下作は黒谷白土。下塗白絵つち二遍塗り素焼。次に「緑青四十匁　唐土吉目　石三十五匁」合わせ二、三遍塗り、上薬を三遍ほど掛けて焼成する。

② 乾山焼

下作りは黒谷白土にてつくる、しら干になりてろくろに掛け削る、下塗白繪土三べんぬり素焼、其上になにても色繪をつける也、色繪薬は別に出す、上薬は唐土百目　石三十五匁　焼あげて水につけず

乾山焼は黒谷白土随分こまかにして轆轤引（略）

上薬唐土は阿蘭陀と云を極品とす、わろき唐土は焼候て上薬青み出候、石も阿蘭陀といふを極品とす、阿蘭陀石は有馬より出、一名有馬石ともいふ也

乾山交趾おらんだ焼等には、有馬石よし、赤樂には日の岡石よし、くわん入出來候には、鳴瀧五佛山の石よし、唐土のかはりに丹を用候もあり、よろしからず、

樂焼は、炭火にて焼候て出來よく候、炭火にては變じやすく、火色入過候へども、樂味甚よく候　焼様工夫ある べし、乾山の類は薪火よく候　樂焼も素焼は たきがまにてもよく候

ゴスは渡りものにて、長崎よりくるもの也、伊萬里焼の染付繪は、みなゴスにて繪がくよし、乾山焼にもちゐては紫となる也、火の強弱による歟

『雑芸叢書』は三田村鳶魚・朝倉無聲編、享保から安永までの庶民の娯楽、見世物研究の資料を集成。『陶工秘嚢』はその内の一巻であるが、楽焼は室町末期以来茶の湯者には必須の道具。陶工以外に雅致ある楽焼を志す者のため、その製法を説いた一書とある。

―陶法書の手本『百工秘術』『楽焼秘嚢』―

『百工秘術』（享保九年刊）

「磁工門」目次

磁器下地土こしらへの秘術　并ニ土の出所

茶わん諸道具つくる秘術并手製の法

素焼の秘術（并ニ素焼釜ノ圖）

磁器上薬をかくる秘術

磁器薬の秘方　水薬（みずくすり）随珠方（いじゅほう）（透明釉薬）

秘傳上薬玲瓏方　氷海玲瓏方（ひょうかいれいろうほう）（不透明釉薬）

上薬をかけて後焼たつる秘術（并内釜の圖）

上薬土によりて（色）變する事

赤色の磁器の秘術　赤樂焼等是也

黒色上薬の秘方（黒樂焼等是也）

秘傳黒薬

飴色薬

秘傳本焼薬

磁器くわんにうを出す方

磁器繪の具つかひやう

『百工秘術』は、享保九年刊（一七二四）。三巻から成り、序文「享保癸卯秋八月八日」下巻末尾に「享保九庚辰歳孟春吉旦」、筆者は「東武入江貞庵」とある。江戸期の生活全般に渉る知識、技術、その他を記載。智・器・食・女・磁・雑工門、附録に分類、日常生活に必要な知識・常識が纏められた。

磁工門では、やきもの製作に関し先ず土拵えを専らとすること、土の出処を秘することを以って家々一流を造り出すとある。只今の楽焼類を慰焼と称し、内窯を裏釜と記すが、釉薬に日ノ岡石を使用せず、硼砂を用いるなど、水海方においては硝子粉を使用、趣味者向けの調合であることが分明する。

『楽焼秘嚢』（享保一八年序・元文元年刊）

目次

一器物作リヤウ　一素焼ノ仕ヤウ

一同數焼（カマ）ノ製法　一本焼赤樂ノ法

一土ヲ製スル法　一（カマ）ヲ作ル法

一火ノ色見ヤウノ法

一地薬秘傳ノ方　一紅梅手ノ秘法

一白繪薬ノ方　一赤繪薬ノ方

一同秘法　一萌黄薬ノ方

一同秘法　一黒繪薬ノ方

一瑠璃繪ノ方　一柿色繪薬ノ方

一黄繪薬ノ方　一箔黄繪ノ方

一黒繪薬ヲ製スル方　一渋紙手薬ノ方

一雲屯ノ方　一玉虫色焼ヤウ

一黒樂薬ノ方　一青山黒樂ノ方

一大口樂薬の方　一尼焼薬ノ方

一赤樂薬ノ方　一黄瀬戸薬ノ方

一紺柿薬ノ方　一變萌黄薬ノ方

一淺黄薬ノ法　一謄礬薬ノ方

一白なだれノ方　一黒頽ノ方

一青なだれノ方　一輕浮ノ秘製

一陶家用樂須知　一樂茶碗圖式

楽焼陶法を伝える最古の製法書（二巻）である。享保一八年東々主人序に「陶道の秘要を釣（もとめる）方法條件尤も精撰を勤む。命じて樂焼秘嚢といふ」とあり、作陶に関する総合的な知識を記す。元文元年刊（一七三六）、著者は中田潛龍子、浪速の人である。

趣味者には指導書、楽茶碗を重用する茶の湯者には手引書となるが（下巻には献立・菓子の記述がある）、後世、秘事・秘伝を大事とする伝書類の手本となり、右記の目次はのちの陶法書の目安、基盤として応用された。

―陶法書・伝書に記載された人物―（●：乾山焼初代口述二代筆記　○：商人など）

一、乾山名のある陶法書

●「内竈秘書」：好古・藤垣爐扇・樂吉左衛門宅手代紋右衛門・乾山省古・近藤安治郎

①『錦斎集』：大塚白鷺斎宗貫・信政斎爲政・石原策次郎

②『樂焼秘傳』：大塚白鷺斎宗貫・任土斎

○大坂道修町三丁目小西与兵衛・道修町三丁目梅檀木小西や與兵衛（『商人買物独案内』天保二年一八三一）

○京烏丸松原下ル吉野屋正兵衛・吉野屋庄兵衛烏丸通松原下ル町（『商人買物独案内』天保二年一八三一）

③『樂焼藥秘法』：京粟田口焼物師元祖九右衛門・京深草焼物師小幡佐五郎・山角六郎左衛門・杉弥左衛門・河田甚太郎・窪田助左衛門・矢部・朝比奈

○大坂屋村田宗清

○京からす丸竹屋町下ル西入わた屋徳兵衛むこふ白粉屋求馬

○二条通本明院百足屋小兵衛（『商人買物独案内』天保二年一八三一）

○五条通伏見海道西へ入伊世（ママ）屋出雲

④『樂焼藥法家々之傳寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』：窪田傳・遠山傳

⑤『樂焼秘傳全』：樂焼師杢兵衛

○北久寶寺町繪具屋吉兵衛（現大阪市中央区北久宝寺町一―四丁目。堺筋には絵具屋・紙屋・木綿屋・砂糖屋、染手拭の商人がいたという『大阪商工会議所百年史』）

⑥『千家樂焼古實附陶器出処書完』：窪田助左衛門・小高文貞・粟田口九右衛門・深草小幡佐五郎

○大坂屋村田宗清

○京からす丸竹屋町下ル西入わたや徳兵衛（桃木町烏丸西入綿屋徳兵衛）の向白粉屋求馬

○二条通本明院百足屋小兵衛（百足屋小兵衛二條東洞院東入萬繪具所畫筆書刷毛品『絵具染料商工史』）

○五条通伏見海道西へ入ル伊勢屋出雲清兵衛（京五條通橋東弐丁目御用達伊勢屋）

⑦『樂焼方書完』：圭斎傳・大坂常吉兵衛傳

○京都智恩（ママ）院古門前古橋茶碗屋長兵衛（楽焼薬諸道具）

○大坂北本町一丁目繪の具屋

二、乾山名のない陶法書

①『樂焼秘書竈図附』：樂吉左衛門・飯塚宗助常秀

②『樂焼諸傳』：松田秀徳・渡邊政挙・尚友斎一心庵（證明寺老僧）・田邊弥三郎・石

野佐次右衛門
○皇都烏丸松原下ル吉野屋吉兵衛
○京都茶碗屋長兵衛（宮川長兵衛・江戸後期京焼陶工真葛長造（一七九七―一八六八）の父）
③『樂焼藥方』：小高文貞
④『本竈樂焼唐物藥秘方全』：御茶碗師九右衛門・焼物師粟田口尾比屋忠兵衛・清水三年坂八つ坂上樂傳兵衛（無別先生）・井上傳・深川江戸記・加藤傳・國勝傳・榊原玄順・川上冬崖・今戸土器師
○とうかん堀越前守中屋敷焼物師粉裂所小川子平
○麻布廣ろふ焼物竈師今井焼物師
○浅草駒形繪具問屋近藤
○通油町新道伊勢屋吉兵衛えのく問屋（伊勢屋吉兵衛本町三丁目通油町）
⑤『秘術巻』：九谷加州小松城下吉兵衛・楽五色之傳京都家元吉左衛門弟子・七蔵傳・平助傳
○京都松原御幸町西へ入ル所大和屋六兵衛（大和屋伊兵衛）
⑥『陶器樂草』（茶顛庵・黒川県）：義方・伏見街道一ノ橋下ル丹波屋亀祐・五条通建仁寺東入高橋道八（仁阿弥）・四条川東大和橋上ル木屋左平（木左）

三、専門陶工による陶法書
①『陶器指南』（欽古堂亀祐）：可亭道人
②『本多佐兵衛所持日記』（本多佐兵衛）：音羽屋惣左衛門・丸屋庄兵衛・木米・周平・樂吉左衛門・道八・仁清
③『彩色繪具調合書』（尾形周平）：南御氏（賀集珉平）
④『樂焼之口傳控帳』（奥田木白）：樂家歴代・大樋・了入・左入・道八・光悦・折部（織部）・周斎
○金銀粉大坂安堂寺町井池東入蒔絵屋卯兵衛　創業慶応元年（一八六五）蒔絵屋卯兵衛純金箔蒔絵材料製造販売（『絵具染料商工史』他）

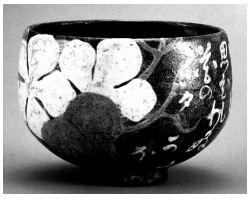
―陶法書概覧―
（●：乾山名のある伝書　○：乾山名のない伝書。合冊本はそれ以前の伝書を含む）
○ 元禄二年（一六八八）「上々御藥帳」（高取焼）八郎重房著
○ 元禄三年（一六九〇）以降「酒井田柿右衛門家文書」（有田焼）柿右衛門著
○ 享保九年（一七二四）刊『百工秘術』三巻（「磁工門」）入江貞庵著
○ 享保一八年序・元文元年（一七三六）刊『楽焼秘嚢』二巻 中田潜竜子著
● 元文二年（一七三七）『陶工必用』尾形乾山著
● 元文二年（一七三七）『陶磁製方』尾形乾山著
● 寛保末年・延享・宝暦頃（一七四一―六三頃）『陶器密法書』尾形猪八伝
　寛政四年（一七九二）萬古堂三世浅茅生三阿誌
● 宝暦一〇年（一七六〇）「内竈秘書」（『樂焼秘傳　好古樂記』内）二代乾山次郎兵衛伝
　明和三年（一七六六）近藤安治郎写
○ 文化三年（一八〇六）『樂焼秘書竈圖附』飯塚宗助写
● 文化五年（一八〇八）『陶器総録』松田元寧著
○ 文政元年（一八一八）『樂焼藥方』筆者不明
● 文政元年（一八一八）『陶法手録』青木木米著　文久二年（一八六二）改調合也
● 文政七年（一八二四）『錦斎集』大塚白鷺斎著　明治三〇年（一九〇七）合冊本成立
● 文政年間（一八一八―一八三〇）頃『樂焼秘傳』大塚白鷺斎著
○ 文政一三年（一八三〇）刊『陶器指南』欽古堂亀祐著
○ 天保三年（一八三二）『陶器樂草』茶顛庵著　嘉永元年（一八四八）義方写
○ 天保三年（一八三二）『陶法書』（『有節文書』）森有節著か
○ 天保五年（一八三四）『彩色繪具皆傳』尾形周平著・『赤絵（繪）指南』福原揺舟著
○ 天保六年（一八三五）『樂焼之口傳控帳』奥田木白著
○ 天保七年（一八三六）『樂焼諸傳』渡辺政挙筆・松田秀徳伝来
○ 天保七年（一八三六）頃『本多佐兵衛所持日記』二代本多佐平著
● 嘉永元年（一八四八）『緒方流陶術秘法書』三浦乾也伝　井伊直弼写
● 元治二年（一八六五）『樂焼藥秘法』朝比奈写（寛保三年・安永元年の年記）
○ 慶応元年（一八六五）頃『家傳覚書』奥田木白口述・二代奥田佐兵衛筆記
● 明治三年（一八七〇）頃『樂焼秘傳　好古樂記』（合冊本）小林源兵衛編
○ 明治一七年（一八八四）『陶器焼附画工秘傳新書全』江藤時太郎著
○ 明治二〇年（一八八七）以前『秘術巻』筆者不明
● 大正四年（一九一五）『陶工秘嚢』筆者不明
● 大正八年（一九一八）「楽焼傳授書」浦野繁吉著
● 不明『樂焼秘傳全』雑喉場樂焼師杢兵衛著
● 不明『繪藥・釉藥配合帳』筆者不明
● 不明『千家樂焼古實附陶器出処書完』筆者不明
○ 不明『本竈樂焼唐物藥秘方全』筆者不明・『友古樂焼』友古著
● 不明『樂焼藥法家々之傳書寫・なんきんいまり焼付繪具藥法集書』筆者不明
● 不明『樂焼方書完』筆者不明

Ⅳ　附録：乾山自筆陶法書（乾山の陶法をより明確にできればと考え、附録として再びここに『陶工必用』を取りあげた）

『陶工必用』大概―仁清伝・孫兵衛伝・乾山伝―

色絵菊鶴図香合　フリア美術館

錆絵山水図額皿



色絵夕顔図茶碗　大和文華館

仁清伝
黒谷土を使用、粘土板また削り出しによる成形、乾燥させて素焼をする。白化粧を施し、鉄（錆）、呉須（染付）絵具を用いて下絵を描き、縁文様、裏面に銘・花押を入れる。本焼上薬を掛け本焼をし、その上に赤・青・黒・緑・黄・金彩などの色絵具を使用、装飾を施し、色絵用・錦窯に入れて完成させる。

色絵十二ヵ月和歌花鳥図角皿　MOA美術館

孫兵衛伝
黒谷土を使用、粘土板による成形、白化粧。又素焼後白化粧を施し乾燥させ、上に金ハダと呉須を混ぜた錆絵具、赤・青・緑・黄・金彩などの色絵具を用いて装飾、黄土による印を入れる。内窯上薬を掛け、内窯に入れて完成させるが、白化粧は生素地上、素焼上では調合が異なる。

乾山伝
土は不明。素地は他窯の可能性もある。ロクロによる成形、乾燥させて素焼をする。白化粧を施し、上に黒絵具を惣体に塗り、乾燥。文様描きには再度その文様ごとに白絵具を下塗り、その上に緑・黄などの色絵具を施すが、地色の濃い場合は書も白絵具が適するという。乾山は多く江戸では自慢の釉上色絵具を使用。絵画活動の影響が考えられる。

『陶工必用』は仁清伝・孫兵衛伝・乾山伝の三部から成り、仁清陶法において乾山は朱字を以って仁清の名の起こり、仁清焼は専ら茶人金森宗和好みの茶器を製したこと、孫兵衛陶法では京都において楽焼創始に前後して押小路焼が始まったことなど、両窯の特質・歴史を述べ、それに連なる乾山焼の正統性を述べる。『陶工必用』がなければ京焼の歴史の一部は今日まで不明瞭なままであったと思われる。

一、仁清伝は、高火度焼成・本窯陶法。京焼土物（つちもの）・錦手陶法が主体。調合・配合例は土・本窯絵薬・本窯掛薬・錦手絵薬・楽焼薬の五種に分類。土物類は瀬戸の伝法、錦手色絵は京焼伝法とも言い換えられる。

二、孫兵衛伝は、低火度焼成・内窯陶法、軟質陶器の製作が主体である。内窯掛薬（上薬）・絵薬。華南三彩・交趾焼写し、釉下色絵・錆絵作品。

三、乾山伝は、

1、仁清伝の絵薬・錦手絵薬とその改変。本窯・内窯ともに使用可能な白絵具（白絵土）・黒絵具の開発。写し物・錆絵染付・錦手色絵作品類。

2、孫兵衛伝の上薬・絵薬、地塗り色々。白絵具を軸として新色の開発、内窯・錦手両窯に使用可能な絵薬を考案。陶器に絵画的表現を試みる。

乾山は陶家の出自ではない。自由な発想、作陶が可能であり、斬新な新手法を試みる。門外漢であったが故に仁清家でも陶法を譲渡、孫兵衛も協力・参加。新企画の展開は購買者の興味を引き、専門陶工、併せて数寄者としての特色が顕れる。この両面こそ奇しくものちに来たる素人陶芸者の道標となるが、文人・趣味人、同時に陶工として仁清、孫兵衛の指導を受け技を磨く。乾山焼の特異性であり手本とされた理由である。

【仁清伝】（『陶工必用』抜萃）

○本窯焼土の覚
一　黒谷土ニ山科石加へ水ヒ致候　ませ加減有
　上となミノ土ノ覚
○五器手土
一　黒谷土壱斗いセ土　遊行土五升ふるひ土
　山科石六升いセ土ニメ　右合作り候
○いらぼ土
一　黒谷赤土壱斗ふるひ　遊行土五升ふるひ
　山科石三升ふるひ
○からつ手土
一　黒谷白土ふるひて　同赤土少色ヲ赤ク付候
○瀬戸くハん丹う手土
一　黒谷土土々白土ふるひて
○白繪べに皿手土
一　黒谷赤土半分ハふるひ　半分ハいセ土
　右の繪ハ　黒谷上白土ヲとき　なま土ノ節　繪ヲ書申候　薬ハ惣黒色ニ　青キしゃかつ薬　書申候繪ハ白ク出申候
○なミ白土ハ
一　黒谷上白土壱斗　山科石三升斗
　右随分こまかに　水ヒいたし候
○大道具土拵ハ
一　遊行土こまかにふるひ　黒谷中土ヲ水ヒいたし
　交合申候　右水指　花生なといたし候ニよく御座候
　釜　水次　茶びん　水こほし　此類ニつかひ申候
○本焼繪薬の覚
一　黒繪薬　金ハダ極細末メ
一　青繪薬　南京同断
一　薄柿色繪薬　淡草水下同断
　右ふのりニてとき遣申候

○本焼掛薬の方
一　白薬　白石壱斗　極細水篩ニて水ヒ　灰六升
　右ハ上々白薬ノ方
○同方なミうつくしく出來候方
一　白石壱斗右同断　灰八升同断
○べに皿手薬
一　白石壱斗右同断　灰壱斗八升
○高麗薬の方
一　白石壱斗水ヒ同前　灰壱斗弐升　白粉唐土壱升
　右五器手薬也
　是ゟ以下茶入薬也
○杜若手ノ柿薬　地薬也
一　深草水下壱貫目　灰三百六十目　金ハダ六十め
　同上薬　景薬ニ云
一　深草水下拾五匁　灰三十め　ちうでい壱匁
○柿薬
一　信樂水下小　深草水下大　二色合弐貫五百目
一　灰八百五十め
○上々のぎめ薬
一　信樂水下五盃　灰七盃　少バン拾五匁
　但天目ニて合申候
○春慶薬
一　深草水下六盃　灰三盃　貫船紫石壱盃
　金剛砂半盃　胡粉少　唐土少　金ハダ少
○茶入薬
一　水下十盃　ゴフン三盃　金のるかす壱盃
　灰十五盃　紺青半盃
○瀬戸薬
一　水下壱升　灰壱升　白ぼこ壱升
○唐物薬
一　深草水下壱貫目　灰九百目　金黒石百五拾め
　海石　青黄色成ヲ用　百目　紫石弐百目　白粉五拾目

○茶入金薬
一　深草水下五百目　灰三百目　黒はま少
○正意手茶入薬（ここに灰の量目はない）
一　深草水下六十弐匁　信楽水下六十弐匁
　金ハダ七匁　唐かねせんくづ拾三匁
○なまこ手薬
一　水下百九拾四匁　灰九拾目　ちうでい八匁
○唐物薬
一　深草水下百目　紫土三拾目　白粉五匁　灰九十め
　たばこノ灰　志んヲ用　弐拾目　銀ノからミ拾匁
○朝日手の薬
一　深草水下百五拾目　おも灰八拾五匁
　金のるかす弐拾六匁五分　紫土四拾目
　ゴフン三匁　金ハダ五匁
　已上ニテ茶入薬ノ方記リ
○亦本焼山窯可用薬方
一　るり薬
　なまぜ石壱升　灰六合　南京繪薬弐拾弐匁
　右の釋ヲ昼ス　地土ハ上々ノ白土ヲ用云々
○青磁薬の方
一　なまセ白石一升　白粉四合　灰一升三合
　南京繪薬少
○瀬戸青薬
一　生瀬　白石一升　灰一升八合　ちうでい五匁
○さび薬
一　水下壱升五合　灰三升五合
　右水ニテトキ掛候
○いらほ手薬
一　山科石十盃　灰八盃
　茶入薬　一　水下十盃　灰十二盃
　右二色ノ薬ヲ合様　茶入薬八盃　いらぼ薬十盃
　右の通　弐色ヲ合テ　五器手薬ノ厚サニ掛申候
○刷毛目又井土手薬

一　藤尾赤石拾盃　灰九盃

○錦手繪具の方

一　赤　金珠壱匁　極白びいどろ弐匁
白粉壱匁　ほう砂 透たるがよし三分
右細末メ　ふのりにてときの（書）申候

一　萌黄繪具　白粉八分　萌黄びいとろ五匁
岩緑青六分　同断

一　紺繪之具　極白びいとろ五匁　唐紺青弐匁七分
白粉弐匁　同断

一　黄色繪藥　白ひいとろ五匁　金珠七分
白粉壱匁五分　丹七分　同断

一　紫色繪具　ひいとろ四匁　金珠五リン　丹八分
白粉弐分　南京繪藥壱分

一　白色繪具　極大白ひいどろ一味

一　金ノ合様　金泥壱匁　透生ほうしや弐分

一　黒繪具　金ハタ　南藥二色等分ニ合
膠ニテときの申候

○樂焼藥の覚

一　茶入の藥　白粉百目　紫土八分
右地藥也
上藥ハ白粉拾匁　赤ばこ壱匁
又上藥ノ方　白粉拾匁ニ唐紺八分

○樂焼白藥　赤樂ニモ此藥ヲ用申候
白粉百目　日岡石拾五匁　びいとろ五匁

○樂焼繪藥の覚
青繪紺青　黒繪金ハダ　柿色ハ水下

○樂黒藥

一　白粉百目　びいとろ五匁　赤ぼこ拾五匁
ほうしや五匁　よく焼テ用
からかねせんくづ四匁 内弐匁ハ金ハダ也

○同方

一　黒びいとろ百目　金ハダ三拾目　奈ら緑青廿匁

○同方

一　全ハダ壱匁　ふきだま弐匁　白粉弐匁五分
ほうしや八分
右樂焼の方

右本焼樂焼繪藥錦手繪藥　諸事　土の合様まで具ニ
尹寫遣　申候　必々　他見他言　被成間敷候　拙者家
祕傳にて候へ共　御所望ニ應申候所也　以上

野々村播磨大掾
藤良判

元禄十二年卯八月十三日
緒方深省老　参

【孫兵衛伝】（『陶工必用』抜萃）

○内窯土製の方

一　諸國　假令　異國の土ニてモ　内焼物の器ニ不成事
ハ無之候得共　先ハ居住仕候処の土ヲ用候　故　土の事
御室焼同断ニ御座候

○内窯焼器物上ノかけ藥の方

一　白粉百目　日岡石四拾目
右合極細末　絹篩ニテ能こし候て　居させ　上ノ水ヲ
捨　ふのりとき　能こし候て　合かけ申候　ふのり合加
減ハ口授

○内窯繪具ノ方

一　黒　鋏の金ハタ拾匁　南京呉洲藥五匁
極細末　フノリニテとき　かき申候

一　緑　白粉十匁　日岡（石）四匁　緑青壱匁二分
右同断

一　紺　白粉十匁　日岡石四匁　唐紺青六匁
右同断

一　赤ハ　山黄土一味　右同断

一　黄　白粉十匁　日岡石四匁　唐白目三分 極細末
右同断

一　紫　白粉十匁　日岡石四匁　南京呉洲藥五分
割ヲ見候て　色赤キものゝ交リタルヲ用　水ニ入候て見候へば
能相知レ申候　右同断

右焼方　内窯外窯形　是等者直ニ御覧シ被及候所ニ
て候へば　今更圖の申ニハ不及候

右押小路焼の親族ながら弟子ニテ候　洛東粟田蹴上ノ
水の近邊　比丘尼坂ト申候所居住致候孫兵衛ト申者ゟ
私口授仕候通　尹記送進仕候　以上

『陶工必用』から抜萃した仁清伝、孫兵衛伝である。両伝は以上のように短いものであるが、仁清伝は二代仁清の伝えるところ、本窯・錦手絵具・楽焼他の陶法。孫兵衛伝は内窯土・釉薬・絵具の材料・調合を列記。孫兵衛伝は口授であった。

『陶工必用』はそれらに加え、両者に学び、新たに考案した乾山一流を交えるが、仁清の瀬戸修行、押小路焼小伝、乾山焼の始まり、京焼上に占める位置、自らの工夫による陶法、釉薬・絵薬の調合とその使用などを記述。朱書によって私見を加え、事物を分析、解説。内容はさらに理解し易く、作陶し易く、書物としても厚み・豊かさ・深みも増すなど、文人乾山の表出した一冊となる。造り方のみではなく、謂れ、伝承、土、顔料、それを扱う材料屋、実地見学をした多田銀山など、丁寧に関係事項を説明。読みものとしても興味深い陶法書となっている。

『陶工必用』―その大概―

都の西北、仁和寺門前、受領播磨大掾藤良・野々村仁清より私、乾山・緒方深省相承の陶器の製法である。上薬、素地土、絵具の作り方など、受理した判形一冊のまに書写。私案は朱字を以ってそれを記す。

乾山滚省（深省印）

（朱・乾山）仁清は野々村清右衛門。「仁」は仁和寺の「仁」、「清」は清右衛門の「清」、多く陶器の銘に活用。専ら茶匠金森宗和老人の好み道具を製作した。

【仁清伝】

―本窯土―【本窯焼土の覚】

土は、黒谷土に山科石を加え水簸、目的に応じて割合を調整する。

（朱・乾山）黒谷土は、古来京都黒谷紫雲山金戒光明寺前辺より出土。山科石は東部山科藤尾山中にある砂である。黒谷土は上白土・中白土、下を匣土というが、上物には上白土、中・下また赤土は目的に応じて使い分ける。

○五器手土：

黒谷土一斗（水簸したいセ土）　遊行土五升（ふるい土）

水簸した山科石六升　以上を合わせる。

（朱・乾山）五器手の下地（素地）は黒谷・遊行の混合土に限らずともよい。朝鮮の土を用いれば最上であるが、江州信楽郷長野村調子村木ノ瀬村等の白土も良く、信楽土など釉薬を薄く施し焼成すれば、茶人の好む紅葉・火色・火替りなどの赤や青の斑点が現れる。遊行土は、洛東松原通り野辺にある土である。黒谷土同様上中下と赤土があり、五器手には上または中のいずれかを用いる。

○いらぼ土：

黒谷赤土一斗　遊行土五升　山科石三升　ふるい土

（朱・乾山）これも黒谷土、遊行土に限らず、諸々の土を試してみれば、好製品ができるかも知れない。

○からつ手土：

黒谷白土を篩い、黒谷赤土を少し加えれば唐津風の赤味が出る。

（朱・乾山）いずれの国の土でも良いが、唐津の薄赤土を用いることが最良である。白土・赤土の混合より、一旦窯に入れ色見をすれば、黒谷でも遊行土でも薄赤色の土を用いればよいのではないか。

○瀬戸貫入手土：黒谷白土土々の篩い土。

（朱・乾山）貫入は「氷紋」。篠焼（志野焼）は織部好みの瀬戸焼陶器であるが、黒谷土を用いて志野焼を写した場合、似ているようで違いは大きく、直接、瀬戸土を取り寄せ造る方が良いであろう。本窯用であればどのような土でもよいが、成形後、生乾きのうち、瀬戸から取寄せた白土を泥状にし、その中に浸し、乾かし、素焼後、上薬を掛け焼成すれば、表面は元来瀬戸産の土、篠焼とは相違ないものに焼き上がる。薄柿色の地に白絵また黒絵の場合も（今日の赤織部）、瀬戸の薄柿色土、他の薄柿色土なりとも塗り、黒・白の絵を描き焼成、古田織部の好み道具、香合・皿・盃台などが焼き上がる。

○白絵べに皿手土：

黒谷赤土半分はふるい土、半分は水簸土。黒谷上白土を溶き、これを絵具としてなま素地上に絵を描く。上薬は透明、半透明の蛇褐釉であるから、自ずと描いた絵は白く現れる。（仁清の白絵具は黒谷白土一味）

（朱・乾山）白絵具は乾山家第一の秘伝。口伝を以って伝授するが、右のごとく赤色素地に白絵具を用いて絵を画いた場合、何れも白の発色は悪く、純白にはならない。黒谷土白土を用いても、焼き上がりの素地は鼠色かうす墨色。絵を描いても真白にはならず、そこで私は備前八木山白土、薩摩白土、なかでも豊後玖珠郡赤岩村の紙を白くする白土の活用を考えた。一風流を極める白絵土（絵具）となったが、白絵具を用いることは今日東山の諸窯においても盛んである。多くは下粟田大日山・岩倉山に産する白土を使うが、藤尾土（石）の代用としても活用。が、絵具は白く見えても、堆く盛り上がるなどの欠点があり、上絵付（錦手）の場合はやむを得ないが、これは本窯であり、それを防ぐ乾山自家製の手立ては以上記した通りである。

○なみの白土：

黒谷上白土一斗　山科石三升程、以上二種類をよくよく篩い、細かにし、水簸をする。

（朱・乾山）並物製作には黒谷土なら中白土か、遊行土でもよいが、仁清は何故上白土とするか。誤りであろう。

○大道具土：

遊行土を細かにふるい、黒谷の中土を水簸し、交ぜ合わせる。分量は適宜か。朱書は私（乾山）の案であるが、右の土は水指、花生・釜・水次・茶瓶・水こぼしなどの製作に用いる。

（朱・乾山）大道具に限らず、赤土・白土、いずれの土も陶器にならないものはない。善し悪しは窯に入れ試してみればわかるが、頑なに思い込むなど、受け入れる心が狭ければ何事も成就しない。

―本窯下絵具―【本焼の絵薬】

（朱・乾山）素焼後、釉薬（上薬・掛薬）を掛ける前に用いる絵具である。仁清伝中ここに白絵具を省略したことはすでに紅皿手に記したからであろう。白絵具の活用は乾山に始まるが、洛東諸窯では今なお盛んに模倣している。（『陶磁製方』には「白土ヤキカヘシ・此白土ヲ一返スヤキシテ」とある。素焼後における白絵具の工夫であるが、白化粧は生懸け、素焼後など、収縮率の相違を考慮、活用においても乾山の充分な心得が窺われる）

○黒絵薬（黒絵具）：

金はだは黒絵の顔料。極細末にして用いる。

（朱・乾山）金ハダは鍛冶屋が刃物を打つとき、薄く剥げて飛散る鉄粉である。その粉末を一味、また南京染付に使う茶碗薬を等分に混ぜる。鉄粉一〇匁に対し茶碗薬四匁の割合が良い。

○青絵薬（青絵具）：南京と同断。
（朱・乾山）南京は茶碗薬である。南京人が肥前長崎へ持ち来たるというが、上中下の差が大きく、青絵には極上品を用いれば、比類のない紺色になる。
○薄柿色絵薬（薄柿絵具）：
深草水下同断。ふのりに溶いて用いる。
（朱・乾山）膠を少し加えた方がよい。水下は水垂とも書くが、水下一味では確かな薄柿色にはならず、薄赤い土、なかでも瀬戸の薄柿色の土は特によい色を呈する。（水下は鉄・マンガンなど混合物を含み、それだけでは薄柿色にならない）

―本窯上薬―【本焼掛薬】
○白薬（透明釉薬・上薬）：
白石一斗　極く細かに篩い水簸する　灰六升
（朱・乾山）白石は摂州有馬郡生瀬村山中に産する白砂。大坂天神橋南岸にはそれを扱う問屋がある。灰は染物に用いる木灰が良く、白砂は生瀬に限らず、陶家近辺、入手のし易い白砂でも良い。京都では古くからの使用があり、生瀬石（砂）を用いるが、焼上りの上薬の色が青味を帯びれば火が強く当ったこと、玉子色の場合は弱いことの証左となる。以上は上々の白薬の方である。
○同じく、並に美しくできる薬：
白石一斗（拵えは右同断）　灰八升同断。
（朱・乾山）美しくとは艶のあることをいう。白石は生瀬石・砂、灰も前出と同じである。
○べに皿手薬：
白石・生瀬砂一斗右同断　灰一斗八升
（朱・乾山）これは石少なく、灰の分量を多くした調合である（弱い釉薬）。べに皿の名は尾張瀬戸の技法に由来、仁清はこの地方の用語であるという。古い茶碗中に「白庵」と称するものがあり、地土は白く、上薬は内にも外にも流れ、溜まると青みを呈するなど、その現象を「なまこ」と呼ぶが、弱い釉薬を用いた場合に発生する。
○高麗手薬：
白石一斗（水簸）灰一斗二升　白粉（唐土）一斗
右は五器手の薬である。
（朱・乾山）同手立てを朝鮮素地の器物に試みたが、上々の出来であった。

―茶入薬―
これより以下は茶入薬の方である。
（朱・乾山）茶入薬には「地薬」「景薬」の二種がある。二重掛けにするが、地薬は土（水下）を多くし灰を少なく、釉薬の耐火度を高め薬の流れを押さえる（強い釉薬）。上に掛ける景薬は、反対に灰を多くし耐火度を低く、釉薬の流れを促し、茶入の景色、見所をつくる（弱い釉薬）。茶入の特徴の一つとなり、茶の湯者らの賞翫、好む見どころとなる。
○杜若手柿薬の下地の薬：
（地薬）深草水下（鉄文のある赤土）一貫目　灰三六〇目　金ハダ六〇目　同上薬は「景薬」ともいう。
（景薬）深草水下一五匁　灰三〇め　ちゅうでい一匁
（朱・乾山）杜若手は古くからある瀬戸茶入の名称である。ちうでい（鑑泥）は真鍮、銅と亜鉛の合金である。焼くと黒くなることから使用する。
○柿薬：
信楽水下少し　深草水下多く　二種を合せて　二貫五〇〇目　灰八五〇め
（朱・乾山）この薬は茶入のほかに雑器にも使用。本焼の火が強く当れば器は赤く、柔らかに当れば黒くなる。信楽水下は同地方の陶家村々に出土する。
○上々のぎめ（禾目）薬：
信楽水下五盃　灰七盃　少バン（硝礬）一五匁
調合には天目茶碗を用いて計量する。
（朱・乾山）禾目は古い茶入の名称であり、上品な茶器とされる。天目茶碗は従来の抹茶茶碗とは異なり、台に乗せて使用するが、各服用の茶碗であり、目安がわかり易く、計量器として応用する。（天目茶碗は中国浙江省天目山の禅院で使用されていた一客用の茶碗である。日本へは鎌倉時代禅僧によってもたらされたが、低く窄まった高台は、台に乗せて使用し、日本では貴人、献茶・供茶などに用いられる）
○春慶薬：
深草水下六盃　灰三盃　貴船紫石一盃　金剛砂半盃
胡粉少　唐土少　金ハダ少
（朱・乾山）貴船石は洛北、貴船川に多くある。金剛砂は細かな粒状の不純物を含む鋼玉、研磨剤に用いられる。
○茶入薬：（もう一つの茶入薬）
水下一〇盃　ゴフン（胡粉）三盃　金の鏤滓一盃
灰一五盃　紺青半盃
（朱・乾山）仁清が尾張瀬戸において習得した方の一つである。「鏤」は金属を溶かし鋳金の材料を取るための用器であるが、金の鏤滓は金礦の鏤内に残る滓をいう。
○瀬戸薬：（瀬戸薬の基本は水下と灰である）
水下一升　灰一升　白ぼこ一升
○唐物薬：
深草水下一貫目　灰九〇〇目　金黒石一五〇め
海石　青黄色のもの一〇〇目　紫石　貴船川石　二〇〇目
白粉五〇目
（朱・乾山）仁清は金黒石も瀬戸にあるというが、鴨川の川原にある紫黒石でもよいであろう。
○茶入金薬：
深草水下五〇〇目　灰三〇〇目　黒はま少
（朱・乾山）むらむらとして金属の光彩が生ずる茶入薬である。仁清は黒はまも同じく瀬戸にあるというが、鉄のカナハダを用いてもよいのではないか。
○正意手茶入薬：古器名
深草水下六二匁　信楽水下六二匁　金ハダ七匁
唐かねせんくづ一三匁
（乾山書にはここに灰の分量は記されていない。が、原本である仁清伝にはあったと推考。茶入の注文、茶入に興味のなかった乾山の書き落としと考える。正意手は古い茶入の名称である）

○なまこ手薬：
　水下一九四匁　灰九〇目　ちうでい八匁
なまこ手は古い上等の茶入の名称である。
○（もう一つの）唐物薬：
　深草水下一〇〇目　紫土三〇目　白粉五匁　灰九〇め
たばこの志んの灰二〇目　銀のカラミ一〇匁
（朱・乾山）銀のカラミは、銀を含む鉱石を精煉する折、炉床で吹き分け、上に浮いたものである。銀は沈み浮いたカラミは捨てられるが、実際摂津多田の銀山において見学。同所に頼めば手に入れることができる。
○朝日手の薬：
　深草水下一五〇目　おも灰八五匁　金のるかす二六匁
五分　紫土四〇目　ゴフン三匁　金ハダ五匁
（朱・乾山）仁清の口授では、おも灰は炉中に長くおかれた灰という。紫土は本絵具の紫土である。山黄土を焼いたものであるが、これより貴船紫石のほうが適する。
（白紙）
　以上、茶入薬の処法である。

―その他・本窯薬―【本焼の窯に用いる薬の法】
○るり薬：（皿・鉢・香炉・花入など）
　なまぜ石一升　灰六合　南京絵薬二二匁
この場合、素地土は上々の白土を用いる。
（朱・乾山）瑠璃薬のやきものは、中国また肥前焼にあり、全体に瑠璃色釉を施した深鉢他がある。染付南京絵薬（呉須）の上品を惣地塗りし、上薬を掛ける（南京絵薬は上薬に混ぜて用いる方がよい）。が、磁器とは異なり京焼素地は純白ではない。このような合わせ薬を塗ることは適さないと考え、今まで試みたことはない。
○青磁薬：（紛物の青磁薬。下の呉須には鉄分が多く、日本では青磁薬に転用するが、本物を知る乾山は好しとしない）
　なまセ白石一升　白粉四合　灰一升三合　南京絵薬少
（朱・乾山）本来、中国の青磁は青味を帯びた石に灰を混ぜた釉薬を用いる。南京絵薬（呉須）を入れることには合点がゆかない。
○瀬戸青薬：（織部焼緑色は生瀬石・灰・銅）
　生瀬白石一升　灰一升八合　ちゅうでい五匁
（朱・乾山）これは良い手立てである。瀬戸青薬は上薬（透明釉薬）を掛けた上に、所々に用いるが、皿類には掛け分けなどが良く、幾たびも試みている。
○さび薬：（水下・灰のみ。薄く掛けて高温焼成する）
　水下一升五合　灰三升五合　水にて溶き掛ける。
（朱・乾山）さび薬は雑器用の釉薬である。土鍋・土釜・茶瓶・水差・水こぼし・壷類などに用いる。
○いらぼ手薬：山科石一〇盃　灰八盃
　茶入薬　：水下一〇盃　灰一二盃
以上二薬、茶入薬八盃といらぼ手薬一〇盃を合わせ、五器手の薬程の厚さに施釉する。（ざんぐり味、仁清のいらぼ手は掛け分けを意図、乾山は刷毛目を意識。朱書としたか）
（朱・乾山）このいらぼ手薬は適当ではない。いらぼ手茶碗は多く茶人が賞翫。そのうち刷毛目手など、素地に白い刷毛目もつけ、その上にこの二味混合の釉薬を掛けてしまっては、下の刷毛目は、茶入薬の水下（赤土の色）によって見えなくなってしまう。むしろ、下地は薄赤色の土に少し荒目の砂を交ぜ、常の本焼用上薬を掛ければ良いのではないか。
○刷毛目または井戸手薬：（素地色）
　藤尾赤石一〇盃　灰九盃
（朱・乾山）藤尾赤石は取り寄せればよいが、当手立てよりは常の上薬（生瀬石・灰）を掛ければよいであろう。
（白紙）

―本窯上絵具―【錦手絵具】（基本はビードロ・白粉・着色剤）
○赤：
　金珠一匁　極白びいどろ二匁　白粉一匁　硼砂（焼返しをしない硼砂）三分　右を細末にしふのりにて溶く。
（朱・乾山）金珠は極上の辮柄丹土である。余り良くはないが時に用いる。硼砂は生が良く、ふのりではなく、膠を少し入れる方がよい。（ふのりは赤色を鈍くする）
○萌黄絵具：
　白粉八分　萌黄びいどろ五匁　岩緑青六分
（朱・乾山）この手立ては良い。
○紺絵具：
　極白びいどろ五匁　唐紺青二匁七分　白粉二匁
（朱・乾山）この手立ては良い。
○黄色絵薬：
　白ひいどろ五匁　金珠七分　白粉一匁五分　丹七分
（朱・乾山）この手立ては余り良くない。詳しくは乾山伝に記す。
○紫色絵具：
　びいどろ四匁　金珠五厘　丹八分　白粉二分
　南京絵薬一分
（朱・乾山）この紫絵具も勝れず、年来工夫の調合を私伝の項に記す。
○白色絵具：極大白びいどろ単味
（朱・乾山）これも余り良くない。錦手、本焼の上に白絵具を付けることはむずかしく、なお工夫を試みたい。
○一金の合わせ方：
　金泥一匁　硼砂二分
（朱・乾山）焼返した硼砂は精度・濃度が落ちる。金泥を薄く塗った場合も一時的には光沢を保つが、日を経て剝落する欠点がある。金は高価故、洛東の陶工たちは多く焼返した硼砂を使用、金泥を薄く塗る。生硼砂（透硼砂）では艶・光沢を出すために金を厚く塗る必要があり（仁清・乾山はともに生硼砂を使用）、金泥を多く使うことになる。
○黒絵具：
　金ハタ（鉄）　南京薬（呉須）等分に合わせ膠にて溶く。
（朱・乾山）これは仁清の錦手上絵の黒絵具である。が、上に緑か紺、光沢のある絵具を掛けて定着させなければ安定性も乏しく、艶もない。使い方としては細かな木葉の葉脈などを描き、その上に葉の形なりに緑薬を掛けて色落ちを止めるが（葉脈は上部へ透けて見える）、乾山の

工夫、調合は乾山伝上絵黒絵具の項に記す。

―楽焼―【楽焼薬の覚】

○茶入薬：（初期京焼には鉛釉黒薬がある）
　下地薬は、白粉一〇〇目　紫土（石）八分
上薬は、白粉一〇匁　赤ぼこ二匁
または、白粉一〇匁　唐紺（青）八分（以上黒楽）
○楽焼の白薬（上薬・透明釉薬）：（赤楽にも用いる）
　白粉一〇〇匁　日岡石一五匁　びいどろ五匁
○楽焼の絵薬：
　青絵　紺青　黒絵　金ハダ　柿色　水下
○楽焼黒薬：（もう一つの黒楽）
　白粉一〇〇匁　びいどろ五匁　赤ぼこ一五匁（赤ぼこはよく焼いて用いる）　硼砂五匁（白粉・唐土と同じ役割）
からかねせんくず四匁の内二匁は金ハダ
　同方：
　黒びいどろ一〇〇目　金ハダ三〇目　なら緑青二〇目
同方：
　金ハダ一匁　ふきだま二匁　白粉二匁五分　硼砂八分
（朱・乾山）楽焼の調合である。仁清伝に記載があり、ここに記したが有益ではない。京都には利休時代から続く楽焼本家がある。黒・赤楽技法が伝承するが、秘伝である故、希みとあれば口頭にて伝える。
　以上、本焼、楽焼、上絵薬、錦手絵薬、素地の調合、全てを書したが、必ず他見他言なきように。私家の秘伝ながら要望に応えて書き記す。以上
　　野々村播磨大掾藤良判
　元禄十二年卯八月十三日　緒方深省老　参
（朱・乾山）仁清から乾山へ相伝された陶法、奥書の写しである。

【孫兵衛伝】

―内窯―【内窯陶器】

　押小路焼は、京都柳馬場東方、押小路に一文字屋助左衛門なる人物がおり、唐人に学んだ技術を用い押小路焼を創始。楽焼創始者樂長次郎より古いと聞き及ぶが、いずれが先かは不明である。
　元禄一二年（一六九九）、乾山は都の西北泉涙（鳴滝泉谷）に窯を開く。御所の西北（乾）に当たり、陶器の銘を「乾山」としたが、その節、押小路焼親族また弟子、細工・焼方の功者の孫兵衛を雇う。御室仁清嫡男（二代）清右衛門とても大きな助力を得たが、この両人から押小路焼（内窯陶法）、仁清焼（本窯陶法）の両伝法を受理。御室仁清伝は先に記したが、ここでは押小路焼陶工孫兵衛の口伝を記す。（歴史、京焼の流れの中に位置する乾山焼の略歴を述べ、如何に乾山焼が正統な立場に立つかをいう）

○【内窯土方】
　内窯陶器は何れの国の土でも製作可能。陶工の住まう近辺の土を用いることがよいであろう。配合は御室焼と同じである。

○【内窯陶器の掛薬】
　白粉一〇〇目　日岡石四〇目
右を合わせ極細に粉末、絹篩を用いて良く漉し、水簸する。上水を捨て、ふのりにて溶き、漉したのち掛ける。ふのりの合加減は口授する。（白粉と日ノ岡石はアクセルとブレーキの関係。白粉は鉛質・溶け易く、日ノ岡石は珪石・溶け難い性質をもつ）

○【内窯絵具】（中国に始まり三彩・交趾。日本では天正頃）
○黒：鉄の金ハダ一〇匁　南京呉州薬五匁
極細く粉末にして、フノリにて溶く。
○緑：白粉一〇匁　日岡（石）四匁　緑青一匁二分右同断
○紺：白粉一〇匁　日岡石四匁　唐紺青六匁右同断
○赤：山黄土一味右同断
○黄：白粉一〇匁　日岡石四匁　唐白目三分極細末右同断
○紫：白粉一〇匁　日岡石四匁　南京呉洲薬五分右同断
　南京呉須の割合に注意。赤味を帯びた呉須が良く、水に浸せばよくわかる。
　焼方、内窯・外窯の形状などに関しては、すでに承知故、図示は省く。
（朱・乾山）押小路焼親族また弟子、洛東粟田蹴上水の近邊比丘尼坂住、孫兵衛から口授された通り、その伝統とする技法を記す。薬方、土拵え、焼方、絵具などは長年製作に携わり、一部始終を承知である。
（本窯・仁清焼にはあるが、内窯・押小路焼に白絵具はない。乾山の発明である）

【乾山伝】

（朱）ここからは乾山一流の方である。今日迄試し習得、向後も珍しいことなどあれば追って書き記す。
　京都西北、乾山において陶器を製し始めてから凡そ四〇年。仁清、押小路焼に伝承する技術のほか、無駄なものは省き、自らの工夫を加え、乾山一流の様式を創り上げたが、左にそれを説明する。数十年来、茶入製作は試みておらず、不分明なこともあるが、今年からは新しく茶入薬にも挑戦したい。

―本窯土―【陶器地土並びに製法】
　陶器の土は、日本また外国、何れにしても陶工にとって近辺の土が良質か否かを知ることは大切である。
　内窯では、低温焼成故に器物の破却はなく、いずれの国の土でも使用できる。が、土の性によっては成形後、乾燥中に碗・皿の高台にひび割れが興ることがあり、この種の土は不適である。京都ではその場合、山科藤尾白砂を入れるが、石か土か判断はつき難く、基本的には砂であろうが、土一〇貫目に対しこの白砂を二貫目ほど混ぜる。絹篩にて漉し、日に干し乾燥、粘りがでるほどよく揉むが、江戸では器の底切などが生じた場合、房州産、

錢座の用いる砂を取寄せ、本土一〇に対し同砂二貫目ほどを混入、底切れを防ぐことができる。対応方法は何れの国、何処にもあるが、素地の精・粗は、器物、製作目的によって判別することが肝要である。

○くハんにう入らず南京焼・肥前焼器物の土：（磁器土）

（朱）南京古染付・松竹梅・雲堂（俗に雲屋台）などの茶碗・香爐・盞・碟の類に用いる土である。

甲州比良山にある白土は比良の村人が採掘、京都でも売買され、乾山窯でもかなりの量を購入した。

が、単味では焼き上がりが悪く、白くならない。例として中国の呉州手・伊万里皿山の下作磁器の高台内無釉部分に類似するが、純白にするためには乾山窯には秘伝があり、豊後赤岩産の白土を混ぜるのである。比率は等分、五分と五分であるが、これを用いて素地を造り、常の本焼用上薬を掛ける。本窯（山窯）では火前に置き、匣に入れて焼成するが、窯奥は火勢が弱く、よい色合に焼き上がらない。内窯焼では火勢も弱く、道具の破却は稀であるが、本窯では土の性によっては窯中で摧けてしまい、役に立たない土もあり、毎回本窯に入れて試し焼、善し悪しを確認する必要がある。（鳴滝窯址からは磁器破片が出土している）

○高麗刷毛目茶碗の土並刷毛目の技法・薬：

赤土を粉末にし、先に述べた底切れを防ぐための藤尾石（砂・赤色のもの）を交ぜる。黒谷赤土は黒谷金戒光明寺門前に出土。江戸では所によって土性弱く、本焼窯では役に立たないが、その折には京都・尾張・信樂・志戸呂焼の土を取り寄せれば良い。白、薄赤土、いずれも本窯にて砕けない土を選択するが、半乾きの折、山黄土を塗る。山黄土は江戸所々の薬店において販売。色の良い赤土を選び、極細末の絹篩で漉し、水簸をする。器物に一、二回斑のないよう塗り、乾かし、よくよく干して、素焼をする。

刷毛目には、豊後白土に、日の岡石、又は洛東岩倉大日山より出土する白石砂を混入。豊後白土一〇〇目に対し二〇匁を交ぜる。石臼にて二返ほど挽き、細粉末にして、フノリ強、膠弱を加える。ロクロ上でも、左手に持ってもよいが、稿筆を使い思うままに刷毛目を付け、常の本窯上薬をかけて焼成する。窯中の置場所によっては色替りが生じ、これにも注意が必要である。

○高麗こよみ手：三嶋、こよみ手、三嶋こよみと呼ぶべきか

地土は右の刷毛目土と同断。（彫りとスタンプの二様式）

「こよみ」とは高麗からきた茶碗の模様である。「真の手」「花三嶋」などがあり、模写する折には、生乾きのとき、竹べらを用いて模様を堀付け（彫りつけ）、筋などはロクロを用いて廻し付ける。先の刷毛目用白土を一、二返惣地塗りし、掘付けた内部にも入り込むように塗るが、少し乾かし、薄く先の曲がった竹へらを作りそれを用いて、彫り込みではない部分の白色を静かに掻き落とす（凹なる窪みに白色が殘る）。日に干し、素焼し、上薬を掛けて焼成する。

文様を堀付ける場合は、菊花形など、先に土を用いてその印判を造り（成形・乾燥・素焼をする）、素地に押し当て、その窪みに白絵具を加える。高麗「御本手」「雲鶴」なども同じ技法であるが、古陶磁の模写は、異域本邦、何れに関わらず何より其土地々々の土を取寄せ、模写、焼成することが良い。似ている様でも、相異は歴然と現れ、古・新の別は仕方がないが、各国々それぞれの土を用いて製作する事が良いであろう。

上薬も同じこと、厳しくみれば上薬（透明釉薬）は攝津有馬郡生瀬村出土の白石に灰を加えること以外にはなく、私年来の工夫、調合は先に記した通りである。

―本窯・上薬―【本焼・山窯の掛薬】（生瀬石・灰が基本）

大方、仁清の方組が良い。生瀬石と灰の合わせ加減は、灰を多く、生瀬石を少なくした場合は釉薬の力は弱くなり、石を多く灰を少くすれば強くなる。それ故器物、窯の詰め場所などによる変化を考慮、釉薬の強弱を斟酌する必要が生ずる。

柿薬に関しては、茶瓶・土釜・土鍋など、仁清の手立て中に水下と灰、二味を合せる方があり、それに従う。

―本窯・下絵具―【本焼絵具薬】（乾山伝下絵用絵具）

○白絵具：

豊後玖珠郡赤岩村より出土する極白土一しめ（一貫目か）、日岡石か大日山石かの二色の内二〇〇目を加え、石臼にて挽き水簸、よく居させ、ふのり・膠を加え、絵具として惣地塗りなどに用いる。

（朱）この白土も極白であれば豊後白土に限ることはない。異域本邦何れにしても試してみればよく、先ずは今迄使用したものに関し記述する。

○黒絵：

南京下の呉洲薬五匁　銕のかなはだ一〇匁

極細末して、フノリ・膠を加える。

○紺絵：

南京上々茶碗薬（呉須）　唐紺青（スマルト）

極々上の茶碗薬、また肥前焼上の南京薬であれば一味が良く、紺青は用いない。が、色に深みを加える場合は唐紺青を混入、二色の分量は毎回試す必要がある。

○薄柿色：

先の白絵具に山黄土を少し交ぜる。フノリ・膠は同断。以上、右四色の外に本焼、下絵に用いる絵具はない。

―本窯・上絵具（錦手絵具）―【本焼物の上に彩色絵を付ける絵具方】

自作他作に関わらず、南京焼・阿禰陀焼・肥前並九州・南海・其外の諸国の陶器本焼上に焼付ける絵具である。

○赤絵：

年来工夫をしたが、今以って定まった作り方はない。先ずは緑礬を焼、絳礬に成して、透硼砂を加えて光沢の出るようにする、また仁清伝の如く極上弁柄丹土を再三水簸して用いるか。

○金：（消泥は金を滑らかにすること、擂棒より指を使って擂る）

金の消泥一分に透硼砂二分を膠で溶く。フノリは不用。（焼返した硼砂は日を経て落ちる。東山辺では金泥を薄く用いるべく焼返すが、必ず生硼砂を用いることが必要である）

○銀：

町売りの銀泥は役に立たない。箔消しは金箔同様自家にて行うが良く、銀泥一分に対し硼砂七厘を入れる。膠は金泥の遣方と同じである。フノリは入れない。

○紺と緑色：

仁清伝が良い。緑は岩緑青が最も良く、奈良緑青は単味では色合が悪く、岩白緑を加えるか、岩緑青二番手の上々緑青を加えるか。岩緑青・岩白緑・奈良緑青三味の場合は、奈良緑青を多くしても構わない。

又紺青の合絵具と緑青の合絵具とを等分に交ぜれば、緑色に変化のある色ができ、木の葉の裏表などに遣い分けることが可能である。

○黄：

白びいどろ一〇匁　白粉四匁　唐白目三分

唐白目一味を能々摺り、極細末にし、白びいどろと白粉を交ぜ、フノリ膠で溶く。此黄薬は内窯用（釉下色絵）である。が、びいどろを入れたことから本窯用にも使用可能。孫兵衛の伝える所、白粉一〇匁に日岡石四匁、唐白目三分は内窯専用の絵具である。本窯上絵付（錦絵）には使えないが、仁清伝の黄色も不適。

○濃黄：（後世に云うカボチャ色か）

赤味を帯びた黄色である。先の緑礬の焼返し・絳礬を少し加えるが、分量は桃花色になるほどに加える。

○紫：

紫色は、仁清伝、孫兵衛伝ともに不適である。

紫ひいどろ一〇匁・白紛三匁に膠・フノリを少し加えるが、錦手上絵、内窯にも良く、薄く付ければ藤色となり、濃く付れば良い紫色となる。

○黒絵具：（透明釉薬下でのみ使用。乾山は釉上使用可を発明）

仁清伝の通り、鉄の金ハダ、南京下の呉洲薬を合わせ、膠で溶く。下絵を描き、その上へ緑青の合薬か紺か紫などで黒絵具の上へ一度塗る。一例であるが（既述）、草葉の芯・葉脈などを此黒絵具を用いて描き、その上に葉の形に緑青の合薬を掛ける。下の黒絵が透き通り現れ、この黒絵具に艶はないが、使い方の工夫によって有益である。

○錦手黒絵具の方：是は年来私の工夫によるが、一切の黒色の画図・文字、真草・假名、或は人物・鳥獣など、墨の打付描き通りに使用できる絵具である。光沢もあり、既述した草木の葉脈・藥などを描く場合は先の仁清伝が良いが、これは絵師の用いる「付け立て」に即した絵具である。

白ヒイトロ（青でも可）一〇匁　白粉五匁　主薬は岩白緑（銅）七匁　膠、フノリを入れる。

但し、町売りの緑青に胡粉を交ぜ「白緑」としたものは適さない。岩緑青を水に入れ、上へ浮いた物と思われるが、純青色は悪く、茶色を呈するものが良い。

○錦手窯の焼き方：

早く火を引けば艶が出ず、よくよく焼き、冷まし、取り出すが、色見と称し、陶片にこの黒絵具・緑・紺・黄・紫・金・赤絵具などを少し付け、窯蓋上の色見孔からそっと窯内に入れる。然るべき火色を見定め、取出すが、色見は本焼山窯にも重要であり、小壷などを造り素焼して使用。窯内の器物同様の上薬・白薬・柿薬・黒薬を掛け、焼成の折、窯の一間一間にある火窓、匣蓋の上へ三つ宛ほどづつ置く。然るべき火廻りを見計らい壷を取出し様子をみるが、釉薬の溶け具合によっては再度窯に入れ、指木と称し細長い薪を横間から指入れるなど、温度を調整。再度色見壷を取出し、薬の溶解加減を確認する。充分ならば指木を止め、次の間へと移るが、いく間あっても作業は同断。内窯・錦手窯も同じく毎回色見を入れ確認する。窯の火色のみに頼ることはむずかしく、判断には色見の活用が肝要である。

錦手焼は右の通りである。

○本焼茶入薬：

仁清伝の通りである。年来の窯業にも拘わらず、乾山窯に茶入製作の所望はない。未挑戦のまゝ今日まできたが、仁清方を参照し向後試作、今案などが生ずれば追って書き付ける。（陶法書受理者の近在を示唆するか）

―【乾山一流の内窯薬・絵具、焼方の事】―

既述通り、土は何れの国の土にても下地造りは可能である。素地上にそれ相応の化粧土を塗り焼成すれば、如何なる様式もでき上がるが、土拵えは先に述べた通りである。（絵具とともに乾山の伝えたい事項の一つ）

―内窯・上薬―【内窯掛薬】

孫兵衛伝、押小路焼の上薬が良い。

白粉一〇〇目・日岡石四〇目を基本とするが、古来から京都に伝承する内窯釉薬の調合である。席焼などには日岡石を少し控え、四〇目を三五匁にするなど調節は可能であり、日岡石を控えることにより釉薬が早く溶解、坐席焼には最適である。（但し、焼成時の最終盤、釉薬の溶解状況を判断することこそがむずかしい）

―内窯・焼方―【内窯の窯焚】

（おそらく乾山も人前にて実演、経験上の結論であろう）

内窯焼成は、初回においては掛薬の乾き切らない器物を入れても、火気は未だ弱く器物の破損は起こらない。が、二番目よりは窯の内外共に火勢は強く、湿りのあるものを入れば器物は破却。二番目からはよくよく炙り乾かし、窯へ詰めることが大事となる。素焼が足りなければ、器物に焦げが生じ、悪い結果を招く故、素焼は薪を充分にしっかりと焼成。生焼けでは焼直しは必須である。

窯の据え方にも心得が必要である。湿気は窯の温度を上げ難くする。火気の上昇に伴って器物を蒸し上げ、蒸し上げれば器物の色合に変化が生ずる。

内窯用の窯の設置は、始めに湿気を取り去り、水捌け

の良い工夫をする。地面からは一尺ほど掘り下げ、鉄か銅かの盤を埋め、地面までは砂を詰める。地面との境目を少し空け、瓦また石などを敷きつめ、その上に窯を据えるが、内・外の窯の間隔は指二本ほどが良く、隙間が広過れば火氣は強くなり、器物の色に悪い影響を与えてしまう（本窯の狭間の役割）。焼き具合は火窓より覗き、窯内の器物の形が判然とせず、火の色が白く見えるほどの折が適時である。色見陶片にも注意を払い、絵具・釉薬の溶け具合如何を見計らい取り出すが、生焼けであれば器物惣体に艶はなく、結着が悪く白絵具の地塗り、上薬ともに跳ね上がる。もとよりふのりを濃く解き、膠も多く入れ、塗った後には指に着かない程度によく乾かすが、上薬の湿りが残れば浮き上りが起き、窯へ入れる以前に悪い結果になってしまう。注意を要する。

―内窯・絵具・地塗り―【内窯絵具・地塗り色々】

○白絵具：（乾山独自の調合・割合）

白ひいとろ一〇〇目　白粉三〇め　白土は豊後赤岩その外いずれにても五〇め。臼で挽き、水篩。ふのり、膠を濃いめに交ぜ、よくよく乾かし、最後に上薬を掛ける。文様描き、惣地塗りの場合も同断である。

○同白絵具略方：

水戸産火打石三〇め　白粉三五匁　煙硝一一匁、以上を合わせ七六匁。その半減三五匁。これに豊後白土、又いずれかの白土を入れるが、手立ては右同様である。

○黒絵具：

南京呉州薬五匁　鐵のカナハダ一〇匁。極々細末にし、水篩。フノリ、膠を交ぜる。

○赤色：

山黄土に緑礬の焼き返しである絳礬を少し加える。細末にし、水篩。フノリ、膠を加える。

○紺色：

白粉一〇匁　日岡石三匁五分　唐紺青（スマルト）六匁。此方よりは錦手絵具中に記したビードロ入紺絵具が良い。膠、フノリを交ぜる。スマルトは呉須ではなく、青色のガラス粉である。青色の顔料となるが、中国ではなく、西域に始まり、乾山は花紺青ともいう。

○緑色：

白粉一〇匁　日岡石四匁　緑青（岩緑青・奈良緑青・岩白緑でも可。その内二味、また三味を交ぜても良く、掛目惣一匁二分）紺・緑の合わせ絵具を等分にし、内窯、錦窯にも使用。

○紫：

白粉一〇匁　日岡石四匁　呉州薬のうち赤色を帯びたもの・かけめ五分　フノリ、膠を交ぜる。

右の紫よりは紫玉（紫ビードロ）を入れた絵具が良く、内窯絵薬としても用いることができる。

○黄：

白粉一〇匁　日岡石四匁　唐白目三分　フノリ　膠同前。これも錦手内に書き付けたビードロ入りの黄色が良い。

―乾山一流の色ブレンド―

○桃色：

右最初に書き付けた白絵具の合薬（白ビードロ・白粉・白土）に、緑礬の焼返し（絳礬）、又は極上弁柄丹土を混入、水篩し交り物を捨て、極精純の色よいものを少し加えるが、色相が桃の花色を呈したものを用いる。

○くちば色の黄：

右に記した黄絵具（白粉・日岡石・唐白目）に、鉄分を加えるが、先の桃色に交ぜた赤色二色の内（絳礬か極上弁柄）、いずれか一味を入れ、桃色を呈したもの。

○本絵に用いる朱墨色：

黒絵具に右二色のうち赤色の色よいものを交ぜる。

○薄柿色：

合わせ白絵具に山黄土少し加える。

○薄浅黄：

合わせ白絵具に惣地塗りなどに用いる合わせ紺青絵具（スマルト）を交ぜる。色の濃淡は好み次第。

○薄萌黄：

合わせ白絵具に合わせ緑青を適宜交ぜる。

右二色（薄淺黄・薄萌黄）いずれかの地塗上に文様を描く場合、白・黒・赤、合わせ紺青絵具・緑青絵具、何れを用いても下の地色とは判別ができ、滲むようなことはない。桃色地であれば、先の合わせた桃色を塗るが、緑青・紺青色を惣地とした場合には、文様部分の色を先に付け、文様以外の惣地を堀（彫り）塗りにする（文様の間をぬうように塗る）。黄・紫の場合も同じである。

○惣地を黒に塗る事：

はじめに下地に合わせ白絵具（密着性を高め、糊の役割）を一度塗る。その上に黒絵具を二回、斑のないように塗り、よく乾かす。次いで白絵具を用いて花形・草木・文字などを描くが、色彩を加える場合も必ず白絵具を用いて下描をする。その上に彩色をするが、黒地塗上に直に色絵具を用いることはなく、黒地に限らず、赤・薄赤地上も同様、白絵具の下描きなくして色付けは不可である。黒絵具・赤絵具の顔料である山黄戸は鉄分を含む。色絵具中に含まれる鉄分を吸収し、絵具の力は失落、上薬を掛けた場合は剝げが生じ、また溶けつきなどが起こる。故に含有物を多く含む白絵具を下に置きそれを防ぐ工夫をする。

（朱）いずれも惣地塗りの文様は、はじめに白絵具を用いて下描きをする。その上に色絵具を用いて彩色するが、文様の間を黒絵具などで塗ることもあり、併せてその黒絵具の下にも白絵具を一度塗らなければ黒色は保たれない。黒に限らず、必ず下に白絵具を地塗りすることが大事となる。

―金銀金貝焼付方―

金、銀いずれも蒔絵に用いる金貝（薄い切金）を求め、はじめに文様とする月・花、如何ようの文様も切り貫いておく。それを素焼をした器物上に貼り付けるが、白絵具が糊である。常の半減ほどの硼砂を加え、濃い膠を少

し交ぜ、よくよく摺り、固めの糊ほどに練り合わせるが、それを切金につけて図とする箇所に押し付ける。彩色する場合は黒・白・紫・紺・緑・黄・赤・桃色など好み次第。次いで上薬を全体に二度掛けし、窯に入れるが、文様上の上薬は飛散し、金具の際いっぱいに釉薬は止まり、金・銀色の文様が出現。後に切金を付ける必要のない理である。但し、器物の形状には限りがあり、表面に段差・高低のある器物、曲面上には適さない。香合など上部の平らな一文字、盃台・皿類・香盆形など、平らな形状に限定、付ける場合は縦にも横にも可能である。

右の外に珍しいものがあれば試み、工夫、作定するなど、重ねて伝える。已上□□□　巳三月五日

乾山深省（花押）爾字型

元文丁巳秡八月武江蘭溪　勝任之印（白文方印）

矢田陪氏（変形方印）

水上祕書にして他見をおそるゝものなり

水上蘆川　陶煙居蔵書記（朱文長方印）

『陶工必用』概説

（一）本窯・本焼関係（仁清伝・瀬戸焼・京焼中心）

土　：黒谷土・金戒光明寺周辺出土。粘り気強い

山科石・山科藤尾山中出土。土の粘り調節

遊行土・京松原通野辺出土。土の粗密調整

上薬：摂州生瀬産生瀬石・木灰

絵薬：絵具。本窯釉下色絵具は白黒青柿色の四色

乾山焼中四色揃う作品は春草図蓋茶碗

白絵薬：白絵土。豊後赤岩村産白土・日ノ岡石

化粧土・絵具として使用

（二）内窯・内焼関係（孫兵衛伝・押小路焼）

土　：黒谷白土が主体

上薬：白粉（唐土）・日ノ岡石。透明かつ光沢の調整

絵薬：色釉・絵具。上薬（透明釉薬）に着色剤を混入

白絵薬：豊後赤岩村白土・白粉・白ビードロ

（三）楽焼関係（乾山伝にはない）

土　：黒谷土・山科石

釉薬　：唐土（白粉）・日ノ岡石・白玉（ビードロ）

黒楽は加茂川石（紫石・貴船石）加える

（四）土・砂・石・絵具・釉薬

日ノ岡石：珪石。釉薬・絵具の原料。焼継剤となる

絵具の剥離・貫入を防ぐ

生瀬石　：長石。媒溶剤。本焼上薬の原料

唐土　：白粉・鉛白。鉛釉の原料

加茂川石：紫石・貴船石。鉄・マンガンを含む

ビードロ：白玉・硝粉（フリット）。珪石・硼砂・鉛丹を配合、坩堝に入れ人工的に作製。媒溶剤として使用。耐火度が増し、発色・艶・光沢を出す

硼砂　：白粉・唐土と同じ役割。薬の溶解を促し溶けて硝子状となる

大道具　：並道具全般。茶道具に対して雑器の意

紅皿手薬：生瀬石と灰の配合による変異。範囲は広く高麗手から唐津焼へと広がる

茶入薬　：水下と灰。中世瀬戸にみられる陶法が基本。茶入薬の根本であるが、水下には鉄分が多く、それらを溶かす役割が灰

青絵薬　：青絵具・染付・南京茶碗薬・唐紺青・花紺青とあるが、大別して南京茶碗薬と紺青の二種。大雑把に南京茶碗薬は呉須・本窯用青絵具・中国伝。紺青は花紺青（唐紺青）・内窯用青絵具・中近東に発生したものが基本。青色と緑色の呼称も混同するが、青色はコバルト基盤、緑色は銅が基盤。乾山は岩緑青・緑青を用いる。絵薬は絵具、白絵土は白絵・白泥・化粧土の意

（五）人物

勝任　：進藤周防守従五位藤原勝任。公寛・公遵法親王に近仕。輪王寺宮家坊官。乾山の葬儀、墓所を配慮。『陶工必用』受理者か

矢田陪　：矢田陪（部）豊前守。論王寺宮家坊官。公遵法親王に近仕。進藤氏の同僚

水上蘆川：『陶工必用』巻末に記載。別筆である。当書は、進藤氏から矢田陪氏、さらに水上蘆川へ渡ると推測。印章「陶煙居蔵書記」からやきもの趣味の俳諧人か

（六）その他

1、本窯にて潰れなければ、陶器の粘土は異域本邦いずれの土も適うという。乾山は工人近辺の土を第一とすることを述べるが、度量狭ければ何事も成就しないなど、素人陶芸者に向かうかの言がみられる。乾山は経験から得る常識、伝統とする定法を大切にした。

2、やきものに色彩を強調。装飾における白色の大事さを述べる。本焼・内焼ともに活用できる白絵土を開発。黒絵具とともに乾山一流の技法を確立するが、今日までへと継続する絵具となり、鳴滝下山後、洛中洛東の陶工との交流からすでにその影響大なることを認識する。後世の陶法書類にも白絵・白絵土・白泥の記載は多く、乾山焼を意識する・しないに関わらず乾山の残した遺産の一つとして伝承する。黒絵具の活用は装飾として書を入れるか・否かにも関係しよう。

3、内窯に対する特別な強調があり、低火度焼成であっても楽焼とは異なるやきもの様式を確立。乾山一流の白黒及び錦手絵具の改変とブレンド絵具、その使い方・変化が特徴。窯の据え方、焚き方、火の調節と色見の手立てなど、これらの解説は趣味者・素人陶芸者の目的に合致、乾山は自ら素人陶芸への道を開く。専門陶工の技を習得。一方、数寄者の風流と余裕を保持。自ら、両者を併せもつ陶匠であったことを証明する。

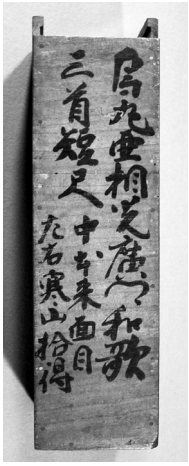
内窯は、すべての工程を己れの目で確認できる。土捏・成形・絵付・施釉・焼成までも見届けられるが、失敗も同じく自らの目で確かめられるなど、楽焼は「慰焼」と『百工秘術』にも記された。

おわりに

ぽっこりもぐらが頭を出した。大空だ。果てしない。
やがてもぐらは土の中へと戻ってゆく。
如何なることも究める道にはそれ特有の孤独が待つ。骨へと達するその孤独は、古来先人の歩み続けた道であろう。恐れるな、真に近づく道を往け。己れの心も不明であれば、解らないことにまみれることは当然である。研究上の理解、解釈に困難がつきまとうことは当たり前であろう。

乾山は新都江戸へ下向した。一〇〇〇年を誇るみやこの人。近づき難い法親王の元にあり、昔を語れば文人、数寄者、自由を貴ぶ散人であった。文事・芸事の修得に励み、禅寺に老師を訪う。一代を築き上げた絵師光琳は兄であったが、胸中にそれを潜めた乾山はゆったりとしてやさしい。工房に引きこもり、火と闘うばかりの老人ではない。席画、席焼、周囲をよろこばせるなど、乾山の愉しみの一つではなかったろうか。

乾山焼短冊皿箱書：華洛陶冶
乾山滋省　八十一歳製（印）霊海



同箱書：烏丸亜相光廣卿和歌　三首短尺
中本来面目　左右寒山拾得　静嘉堂文庫美術館

人生の終わりに乾山は何を思ったのであろう。
最後の作品、短冊皿の箱書には「陶冶」とある（上図参照）。陶冶は、杜甫の五言詩に、登臨多物色　陶冶賴詩篇
蘇軾の「司馬温公獨楽園記」に、先生獨何事　四海望陶冶
とある。「陶」はやきもの、「冶」は鋳物。手を下して形を造るとした意である。古くは（南北朝期頃）精神を鍛える、素質・才能を練りあげるなどの意に用いられたが、物事を鍛錬する、そこから自己を練る、創り上げる、天下を化すなどの意に転ずるという。

乾山は独照禅師から公案を与えられていた。心底深く潜む神龍を捉えるとは如何なる意であったのか。生きる真を会得、悟道、人間の龍、非凡の人の意にもなるが、その道程を歩み続け、磨き続けた乾山は八一歳、短冊皿を造り上げた。箱書付には「陶冶」とある。やきものとともに己れをつくる。没年までも歩みを止めず、真、乾山の命を尽くすとした生き方を示すものではなかったか。

参考文献

安芸毬子「掘り出された人形」『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第五回発表会要旨 一九九二年発表
雨森芳野編『陶器樂草』楠瀬恂編『随筆文学選集 第十一巻』書斎社 一九二九年刊
今泉雄作「尾形乾山」『建築工芸叢誌』第二期第十冊 一九一四年刊
入江佳代「文献にみる軟質施釉陶器の釉薬」関西陶磁史研究会編『軟質施釉陶器の成立と展開』研究集会資料 二〇〇四年発表
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房 二〇〇一年刊
大阪絵具染料同業組合編『絵具染料商工史』一八三八年刊
大橋康二「陶磁器の様相：高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼、そして本遺跡出土の重要な陶磁器」加藤建設株式会社文化財調査部編『上野忍岡遺跡群：東京国立博物館管理棟（仮称）地点』国立文化財機構東京国立博物館 二〇一八年刊
小川望編『江戸の土器：付・江戸遺跡発掘調査報告一覧』ニュー・サイエンス社 二〇一九年刊
小柏典華「近世滋賀院境内の復原的考察 運営組織と空間序列から」『日本建築学会計画系論文集』第八三巻七四九号 二〇一八年刊
落合則子「江戸今戸焼史に関する一試論―江戸窯業変遷史における位置づけ」『生活文化史』第一五号 一九八九年刊
鬼原俊枝「天台宗儀礼に沿ける座の昇風」『待兼山論叢美学篇』第二三号 一九八九年刊
小俣悟他編『東京都台東区 浅草高原町遺跡 寿二丁目三番地（東陽寺）地点』株式会社グローブマネージメント 大成エンジニアリング株式会社 二〇一五年刊
小俣悟「「入谷土器」について―東京都台東区入谷遺跡出土資料の検討―」『江戸遺跡研究会会報』九六号 二〇〇四年刊
浦井正明『上野寛永寺 将軍家の葬儀』吉川弘文館 二〇〇七年刊
金子智「江戸の瓦生産と近世瓦の展開」『幕藩体制下の瓦』第六六回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料 二〇一七年発表
寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編『東叡山寛永寺：徳川将軍家御裏方霊廟』吉川弘文館 二〇一二年刊
苦瀬博仁・原田裕子「隅田川河口部沿岸域の江戸期における物流施設の機能と分布に関する基礎的研究」『日本都市計画学会学術研究論文集』三三巻 一九九八年刊
斎藤夏来「家康の神格化と画像」『日本史研究』五四五号 二〇〇八年刊
下房俊一「注解『七十一番職人歌合』稿（七）」『島根大学法文学部紀要 文学科編』第一五巻一号 一九九一年刊
杉本欣久「江戸中期の漢詩文にみる画人関係資料：事項一覧編」『古文化研究』第九号 二〇一〇年刊
鈴木泰浩他『越名西遺跡・越名河岸跡』栃木県教育委員会 一九九六年刊
洲本市立淡路文化史料館編『珉平焼：珉平焼とその系譜：賀集珉平から忘吾園窯まで』洲本市立淡路文化史料館 一九八九年刊
台東区文化財調査会編『入谷遺跡下谷二丁目二番地点：集合住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書一四 台東区文化財調査会 二〇一〇年刊
台東区文化財調査会編『入谷遺跡下谷二丁目一番地点：集合住宅建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』台東区埋蔵文化財発掘調査報告書一六 台東区文化財調査会 二〇一〇年刊
玉林晴朗『下谷と上野』東台社 一九三二年刊
鶴田榮一「顔料の歴史」『色材協会誌』七五巻四号 二〇〇二年刊
東京市下谷区編『下谷区史』東京市下谷区 一九三五年刊
富本憲吉「乾山の『陶工必用』について」『尾形乾山自筆「陶工必用」並解説』大和文華館 一九六四年刊
日光山輪王寺宝物殿・徳川記念財団編『日光山と徳川四〇〇年の文化』日光山輪王寺 二〇〇四年刊
本島知辰編『月堂見聞集』森銑三・北川博邦監修『続日本随筆大成別巻四 近世風俗見聞集』吉川弘文館 一九八二年刊
大和文化財保存会編『財団法人大和文化財保存会収蔵品目録 陶磁器編―赤膚焼―』大和文化財保存会 一九九五年刊